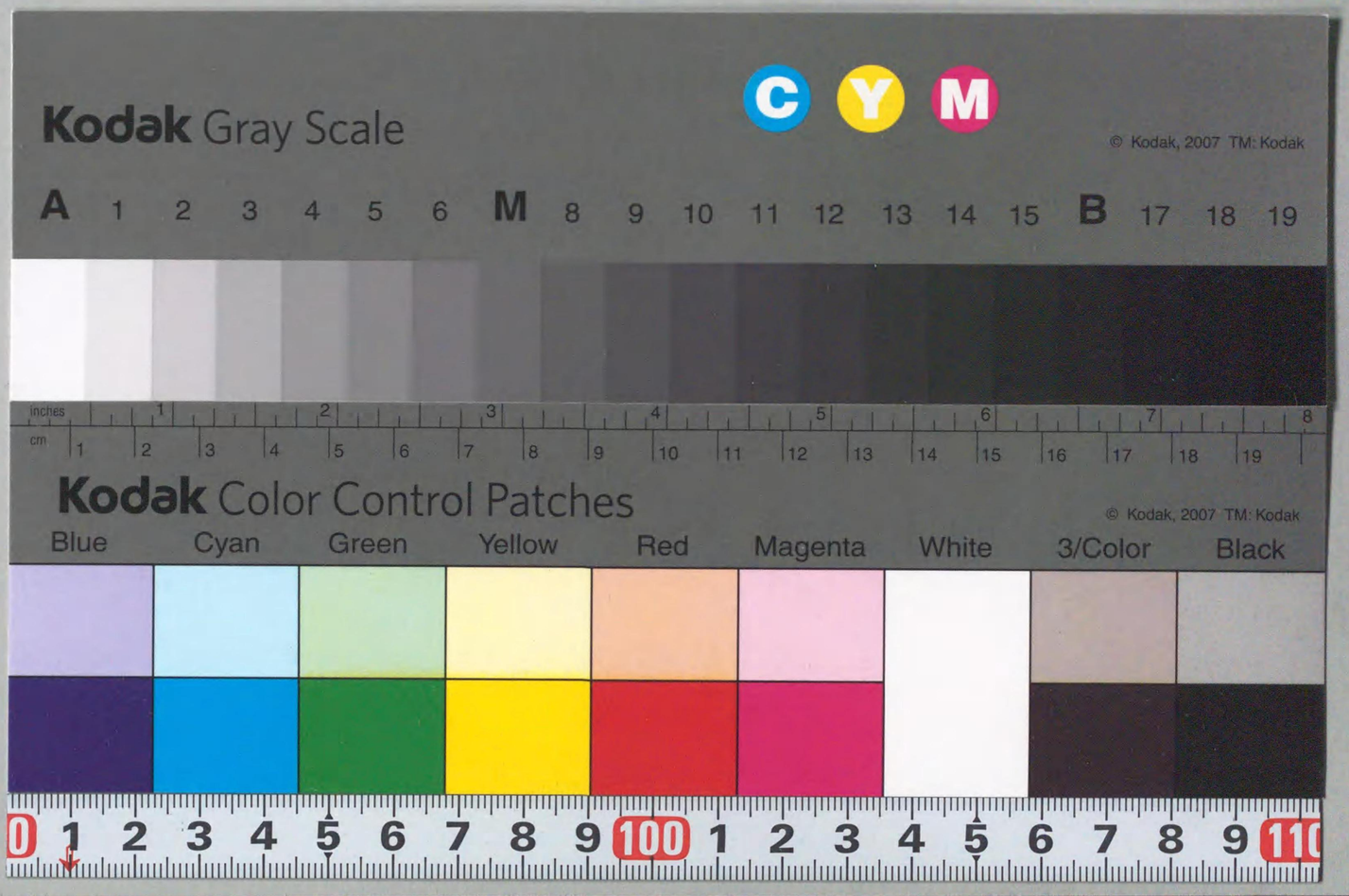


GB22
7
00707222

東京帝國大學文學部史料編纂所編纂

大日本史料

第十二編之三十二

東京帝國大學藏版

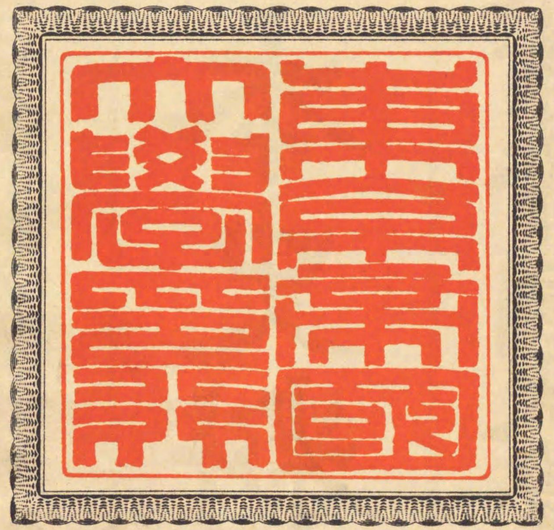
東京帝國大學文學部史料編纂所編纂

大日本史料

第十二編之三十二

東京帝國大學藏版

210.08
To 456d
B22
7
貴族院
41.10.4
圖書館藏書



707222

大日本史料

第十二編之三十二目次

後水尾天皇

元和五年

十一月

五　日　春日祭延引、○追行ス、……一
　　春日若宮祭、
十三日　持寶院快音ヲ東大寺戒和上ト爲ス、……二
　　金地院崇傳參内ス、……四
　　薩摩鹿兒島城主島津家久、弟又八郎忠平ヲ證人トシテ、江戸ニ
　　遣シ、妹千鶴ニ代ラシム、○千鶴、江戸ヲ發シテ、國ニ歸ル、……四
　　十二月廿三日、幕府、又八郎ニ米ヲ給ス、
　　肥前大村城主大村純賴卒ス、○子純信嗣グ、……六
十五日　大和多武峯大織冠社正遷宮、○勅使左少辨竹屋光長參向ス、……一二

十九日　金地院崇傳、江戸ニ之ク、……三一
廿一日　秀忠、上總土氣、東金等ニ放鷹ス、……三六

十二月

一日　日食、……三九
二日　奈良大火、……三九
江戸金地院造營成ル、〇崇傳、之ニ移ル、……四一
（江戸金地院ノ書院數寄屋ヲ建築ス、）
（筑波ヨリ植木ヲ移植ス、）
五日　御生母近衛氏、近衛信尋ノ第ヨリ、新殿ニ移徙シ給フ、……五二
六日　禁中、火ヲ失ス、……五三
十七日　角倉玄之、書ヲ安南國ニ贈リテ、貿易ノ中絶ヲ謝シ、再ビ商船ヲ發遣スルコトヲ告グ、……五四
十九日　美濃苗木城主遠山友政卒ス、〇子秀友嗣グ、……五五
出羽米澤城主上杉景勝ノ老臣直江重光、（兼續、）江戸ニ卒ス、（重光自筆願文）……六〇
（重光室直江氏及ビ嗣子景明、養子長房、勝吉ノ事蹟、）……一七三
廿一日　御髮上、……一七三
幕府、京都法觀寺ニ、建仁、清水兩寺寺領ノ内ヲ、塔屋敷トシテ寄附ス、〇兩寺ニ替地ヲ給ス、……一七四
廿二日　御煤拂、……一七七
（廿三日、女院御所御煤拂、）
幕府、人身賣買、長年季奉公、駈落者等ニ係ル禁令ヲ頒ツ、……一七八
京都所司代板倉重宗、大井川、桂川ノ堤ニ制札ヲ揭グ、……一八〇
廿五日　秀忠、書ヲ島津家久ニ與ヘテ、歲暮ノ祝儀ヲ呈シタルニ答フ、……一八一
（十六日、家久、蜜柑ヲ秀忠ニ進ズ、）
廿六日　敍位、……一八二
（廿五日、廿七日ノ敍位、）
廿八日　除目、〇内大臣花山院定熙ヲ罷メ、權大納言一條兼遐（昭良）ヲ内大臣ニ任ズ、……一八三
三十日　伊勢長嶋城主菅沼定芳、江戸ニ參勤ス、……一八四

是月　幕府、越前北莊（福井）城主松平忠直ノ弟直政ヲ上總姉崎ニ封ジ、……一八四
一萬石ヲ與フ、……一八八
常陸水戸城主德川頼房、江戸ニ參勤ス、○伊勢津城主藤堂高
虎ノ嗣子高次モマタ東勤ス、……一八八
幕府、豐前小倉城主細川忠興ノ嗣子忠利ニ米千俵ヲ與フ、……一八八
是冬　尾張名古屋城主德川義利（義直）、江戸ニ參勤ス、……一八九
是歳　幕府、京都知恩院三門、經藏ヲ造營ス、……一九〇
幕府、佐渡鑛山ノ新鑛ヲ開キ、田畠ヲ改メ、口米ヲ減ジ、マタ印
銀ヲ鑄テ、佐渡國内ヲ限リテ通用セシム、……一九三
幕府、將ニ江戸城ヲ修築セントシ、上總久留里城主土屋利直
ニ助役ヲ命ジ、遠江懸川城主松平（久松）定綱ヲシテ、大手、櫻田間
ノ地形ヲ築カシム、○薩摩鹿兒島城主島津家久、土佐高知城
主山内忠義等、木材及ビ石材ヲ進ズ、……二〇〇
（長門萩城主毛利秀就、石材ヲ進ズ、）
幕府、大坂城代ヲ置キ、同城在番ノ制ヲ設ケ、伏見城代ヲ廢シ、

同城ノ在番ヲ罷ム、○伏見城代内藤信正ヲ大坂城代ト爲シ、
大番頭松平勝政、同松平康安ヲシテ、大坂城ニ在番セシム、……二一八
（幕府、伏見城ノ破却ニ著手ス、）
幕府、駿河田中城定番、駿府町奉行ヲ置キ、大久保忠直ヲ定番、
伏見奉行門奈宗勝、山田重次ヲ町奉行ト爲ス、……二二八
幕府、服部正信、同政重ヲ遠江今切關所番ト爲ス、……二二九
（慶長十三年、江馬秀次、新居關ヲ守衛ス、）
（田邊庄助加番、）
幕府、秋鹿朝正ヲ遠江中泉代官ト爲シ、船明村樽木ヲ管セシ
ム、……二七一
幕府、信濃伊奈代官千村良重等木曾ノ地士ヲシテ、德川義利
（義直）ニ附屬セシム、○良重ノ代官故ノ如シ、……二七一
幕府、下野小山邑主本多正純、常陸笠間城主永井直勝、其子尚
政、上總大多喜城主阿部正次、常陸古渡邑主丹羽長重ノ封ヲ
加ヘ、正純ヲ下野宇都宮城ニ移シ、正次ヲ相模小田原城ニ置

キ、大多喜城ヲ壞タシメ、青山幸成ヲ常陸國新治、筑波二郡ノ内ニ封ジ、一萬三千石ヲ與ヘ、下野富田城主北條氏重ヲ遠江久能城ニ移ス、……二八四
長崎ノ人末次政直、長崎代官村山等安ノ私曲ヲ幕府ニ訴フ、○幕府、之ヲ裁決シテ、等安ヲ處罰シ、政直ヲ長崎代官ト爲ス、……二九〇
長崎奉行長谷川藤正、豐前小倉城主細川忠興等、耶蘇教徒ヲ刑ス、……三一八
幕府、刀目利本阿彌光寶、同光作ニ、知行ノ朱印ヲ授ク、……四五〇
德川義利（義直）ノ生母相應院（清水氏）、德川賴信（賴宣）ノ生母養珠院（陰山氏）、江戸ニ之ク、……四五一
尾張名古屋城主德川義利（義直）、老臣竹腰正次（正信）、志水忠宗ノ知行ヲ加增シ、正次ヲシテ、美濃今尾ニ居ラシム、……四五二
因幡鳥取城主池田幸隆（光政）、居城ヲ修築ス、……四五四
攝津麻田邑主青木一重致仕ス、○養子重兼嗣グ、……四五九
一重、養子正重ヲ廢ス、
加賀金澤城主前田利光（利常）ノ老臣本多政重、其子主税助（政久）ヲ江戸ニ出シテ、證人ト爲ス、……四六一
鐵砲鍛冶國友壽齋等、幕府ノ許可ヲ得テ、諸大名ノ大砲ヲ鑄造ス、……四六一
佐竹義宣、彌右衞門ヲシテ、大砲ヲ鑄造セシム、
和泉堺ノ人、菱垣廻船ヲ以テ、大坂江戸間ニ貨物輸送ノ業ヲ開ク、……四六二
英吉利甲比丹リチャルド・コックス、京都ニ抵リテ、秀忠ニ謁ス、○葡萄牙、西班牙、和蘭ノ商人、亦前後シテ秀忠ニ謁ス、……四六七

年末雜載

天文、氣象、災異、……四七一
神社、……四七三
佛寺、……五二五
禁中、……五七六
幕府、……五八八

諸家、……五九二
疾病、死歿、……六一七
學藝、遊戲、……六二八
武事、……六五四
知行、……六五五
年貢、課役、……六六二
法制、……六八三
訴訟、……六九一
賣買、貸借、……七一九
起請、……七四五
算用、……七五一
貿易、……七七九
開墾、殖產、……八〇三
驛遞、交通、……八〇四
音信、贈答、……八〇六
信仰、土俗、……八一六
雜、……八一七

（目次終）

大日本史料 第十二編之三十二

後水尾天皇

元和五年己未

十一月大庚辰朔盡

五日(甲申)、春日祭延引、尋デ、追行ス、

〔續史愚抄〕五十三後水尾院下　十一月五日、甲申、春日祭延引、公卿補任、追、

十七日、丙申、此日被行春日祭、上卿西園寺大納言公益、參向、辨不參、公卿補任注記、祕抄、

〔公卿補任〕五十二　權大納言正三位同公益(西園寺)、三十八、三月廿五日敍從二位、十一月十七日、春日祭上卿參行、

〔孝亮宿禰日次記〕五　十一月大九日、戊子、晴、自正親町頭中將(雪俊)、春日祭一通到來、○本書十七日條、記事闕ク、

〔弘誓院孝亮記〕十一月十七日、丙申、春日祭、上卿西園寺大納言、公益、

〔春日記錄〕七正預祐範元和五年紀記　一十七日(十一月)、春日祭有之、其式祭記ニ書之、上役老足難澁候間、次座神宮預延豐勤仕之、精進料如例十疋、代米十八

石一斗遣之、上卿西園寺殿、（公益卿、大納言、）御息參議宰相中將實晴御同道也、御宿西殿、前後天氣一段快然也、○（春日社記錄、春日祭歷名部類異事ナシ、）

若宮祭

○春日若宮祭ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔春日記錄〕（七正預祐範元和五年紀記）　一廿日、（十二月）從今日若宮祭禮前精進ニ入了、神主祐紀依觸穢也、

別火

一廿五日、御湯仕之、其式別ニ記之、從今日參籠也、

一廿六日、於船戸屋、別火沙汰之、御出、無異儀、

一廿七日、馬場出仕、其式別ニ記之、戌刻還御、廿六七日、一段天氣如春天、滿足也、

壬生孝亮宣旨ヲ調進ス

十三日、（壬辰）持寶院快音ヲ東大寺戒和上ト爲ス、

〔孝亮宿禰日次記〕（五）　十一月十二日、辛卯、晴、自廣橋（兼勝）前內府、戒和上宣旨之事申來、

十五日、甲午、晴、戒和上宣旨調遣之、

左辨官下（東大寺、）

應以大德律師快音（持寶院）爲戒和上事

右得彼寺今月□日奏狀偏、右戒和上者、尺門之窓（班）、律家之棟梁也、爰快音大德者、久翫木刄（刃）之月、偏瑩草繫之珠、內外之行業莫不周備、而今依七寺高薦、既爲諸德之上座者、權大納言藤原（西園寺）朝臣公益宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、

元和五年十一月十三日　左大史小槻宿禰（中務大輔兼左大史イ）（壬生孝亮）判　奉

權左少辨藤原（勸修寺經慶）朝臣判

上卿西園寺大納言、（公益、）奉行勸修寺權左少辨、

宣旨祿物

廿六日、乙巳、晴、東大寺戒和上宣旨祿物一貫二百文到來、○（傍註イハ、弘誓院孝亮記ニ據ル、）

宣旨

〔弘誓院孝亮記〕一　十一月十三日、（壬辰）權左少辨經廣下　宣旨、

宣旨（權大納言、）

應以大德律師快音爲戒和上事

右得彼寺今月十三日（ママ）（脫アラン）右戒和上者、尺門之窓（班）、律家之棟梁也、爰快音大德者、久翫木刄（刃）之月、偏瑩草繫之珠、內外之行業莫不周備、而今依七寺高薦、既爲諸德之上座、（副歎狀、）

仰依請、

元和五年十一月十三日

右宣旨、早可被下知之狀如件、

十一月十日　　權左少辨經廣

四位史殿

欵狀可寫加、當座無所見之故略之、○十三日ノ宣旨略ス、孝亮宿禰日次記ニ同ジ、

金地院崇傳參内ス、

〔本光國師日記〕二十六　一十三日（十一月）、參内、女院樣（新上東門院）、女御樣（御生母近衛氏）、攝家衆各へ參、

薩摩鹿兒島城主島津家久、弟又八郎忠平ヲ證人トシテ、江戸ニ遣シ、妹千鶴ニ代ラシム、是日、千鶴、江戸ヲ發シテ國ニ歸ル、

〔薩藩舊記增補〕○五薩摩義弘　元和五年、辭質、同年之冬、發江府、下著薩府、於是公賞多年之勳勞、賜加增之地、併領三千石、同七年五月三日、嫁島津下野久元、慶安二年八月十七日死云々、

〔薩藩舊記增補〕五家久公御譜中正文在日高與市左衞門　○薩摩たひ〳〵の御せうそこ、まつ〳〵くわへの事もとゝけへ申候よし、はことゝさふんのあらましこゝろけまゝと、南山めて度思ゆ候、はさめて

千鶴初伊集院忠眞ニ嫁シ後ニ島津久元ニ再嫁ス

そもし事も、この比いくさり候らんと思ゆ候、風あら記時分よて候まゝ、ゆる〳〵とせん中御下向候やうゝとれもひ候〳〵、くわしゝ口上に申候、ふまはあく（阿久根）ふきやうとはりに候て、万いり候すると、むりいの事申候へく候、さゝめてさたゝゝさうらいまちいり候、しもし、

元和五年（先カキ）
十二月七日　　家ひさ

〔島津國史〕二十四慈眼公中　元和五年、○中略初公（貴久）在京師、使又八郎忠平、如江戸代千鶴、千鶴爲質七年、聞松齡（義弘）公有病、求歸甚切、冀及其未至乎大病、大家乃罷歸之、會忠平至、十一月十三日、千鶴發江戸、（據慈眼公舊譜、島津勘解由系圖、）初千鶴生女於伊集院氏、公命使嫁松平定行、千鶴行至尾州宮驛、先使其女如桑名、交禮既訖而後發宮驛、十二月還國、（據島津勘解由系圖、）行夫人、見上卷慶長十年、其後夫人薨、故公使千鶴之女適勞州桑名城主、其後公命使千鶴再適島津久元、（據島津圖書系圖、）諸侯則書、不然則否、今書千鶴適島津久元者、何、千鶴始適伊集院忠眞、忠眞誅死、大驛、既爲質於江戸、今得罷歸、則其收局宜書耳、

（按、松齡公外孫女爲松平河内守定行、定行時爲勞州桑名城主、）

（凡公女適）

○又八郎、家久ト共ニ國ヲ發シ、京都ニ滯在スルコト、五月八日、秀忠上洛ノ條ニ、千鶴、證人トシテ江戸ニ赴クコト、慶長十八年六月二十四日

ノ條ニ見ユ、幕府、又八郎ニ米ヲ給スルコト、便宜左ニ合敍ス、

幕府又八郎ニ米ヲ給ス

〔薩藩舊記增補〕五古御文書廿五巻中家久公御譜中ニ在リ○薩摩

從將軍樣、毎年御嘉例ことく、八木貳千表(俵)、又八郎殿被遣候、御内之年寄衆手形を以、早々御請取可被成候、恐惶謹言、

元和五年(ヤカキ)極月廿三日　忠□(花押)(イカ)酒井備後守忠利判也、

宛欠ナシ

肥前大村城主大村純賴卒ス、子純信嗣グ、

〔東武實錄〕六　同十三日(十一月)、大村民部少輔純賴卒ス、二十八歳、其子純信後因幡守ニ任ニ、父純賴カ家督ヲ賜ル、

世系

〔寛政重修諸家譜〕七百四十六　大村

嘉前丹後守、今の呈譜、初喜純、のち喜前に作る、

純賴新八郎、民部、民部大輔、從五位下、

純信松千代、丹後守、從五位下、

母は賴直(大村)ゝ女、

履歷

純賴　母は上ゝ(有馬義純ヲ)たゝし、文祿元年、大村ゝ生ゝ、慶長十年の春、父ゝゝゝゝゝひ伏見ゝいゝゝ、はしめて東照宮、台德院殿ゝ拜謁ゝ、時ゝ六歳十九年九月、父ゝ代ゝ、鍋嶋信濃守勝茂、寺澤志摩守廣高、有馬左衞門佐直純、松浦壹岐守隆信とゝゝゝゝ、長崎ゝおもむき、耶蘇宗門の徒れ場屋を毀り、このとしれ秋、有馬左衞門佐直純ゝ封地を移ゝるゝにより、仰をうけて、ゝれ舊領北有馬の郡務を沙汰ゝ、ゝのとし、久嶋城を改め築く、元和元年、大坂の役ゝ、父ととゝゝ軍船ゝ艤ひし、横瀨ゝあり命令を待、五月朔日、直純、父の命をうけて纜をとき、周防國上關を過ゝのところ、大坂城すてゝ陷ときゝ、いりき大坂ゝいゝゝり、たゝちゝ馳て伏見ゝ參り、台德院殿に拜謁し、まゝ京都ゝれゝむき、東照宮にまみゝたてまつゝ、台駕にゝふて駿府ゝ供奉ゝ、ゝのとき仰ゝよりて封を襲、暇賜ゝて領地ゝ歸ゝ、二年六月二十一日、豐臣家の臣北河次郎兵衞宣勝及ゝ男市左衞門長倫をめし預らゝ、三年九月五日、台德院殿より領知の御朱印をたゝふ、四年十二月二十九日、從五位下民部大輔に敍任ゝ、五年十一月十三日、大村にをいて卒ゝ、年二十八、覺翁日敎浬槃院と號ゝ、葬地嘉前におゝし、(本經寺)室ゝ家臣大村右近賴直ゝ女、

長崎耶蘇敎徒ノ處分

久嶋城改築

大坂出陣

法名

墓地

純信　(元和)六年五月十五日、遺領を繼、時ゝ三歳、れゝ襲封を謝するゝ時、父ゝ遺物靑

江の刀を獻す、

〔大村家覺書〕四　純賴（喜前嫡男、）從五位下、民部大輔、小字新八郎、文祿元年ゟ誕生、元和五年己未十一月十三日、於久島城卒ス、于時二十八歳、萬歳山本經寺ゟ葬る、法名涅槃院覺翁日敎大居士と號ス、（殉死藤田隼人、一瀨源兵衛、）母有馬左衛門佐義純女、

殉死者

一始而大神君ゟ拜謁ゟる事、慶長十年乙未春、父喜前ゟ從て伏見ゟ到、始而大神君、台德院殿ゟ拜謁ゟ、喜前暇を賜て歸城、純賴ハ留て伏見ゟ在、後大神君ゟ奉從て江府ゟ赴く、

始メテ家康ニ謁ス

一純賴入部（幷親類拂之事、）純賴十四の年、父に從て伏見ゟ到、夫より江府ゟ赴ク、（慶長十二年）今年十六歳ゟて入部ハ、此節當家の領知、數多の親類ゟ富分ケ取居ゟるゆへ、純賴藏入甚タもくあし、此故ゟや、親類大村清助、千四百四十石六斗六升、大村理右衛門、八百六十八石三斗五升、大村伊右衛門、五百四十六石四斗三合、大村七郎左衛門、四百五十三石五斗三升、大村勝八郎、貳百四十三石五斗八升、大村喜助、三百三十九石七斗三升、大村次郎八、百三十三斗五升、大村半次郎、七拾九石七斗三合、大村久六郎、五拾六石八斗九升、大村橋左衛門、八十三石五斗三升、大村性助、六十一石四斗四升、大村性五左衛門、貳百八斗一

一族ノ知行ヲ沒收ス

親類拂

發病

家臣等喪ヲ祕シテ純信相續ノコトヲ計ル

八升、已上十三人（十三人高合五千貳百拾壹石七斗五升九合、）ゟ暇を與へ、領知を取上ゟ、（外ニ大村何右衛門、高千六百七十六石四斗二升五合、大村善次郎、高千貳百五十一石四斗一升四合、右兩人ゟ半知と成給なり、是を純賴親類拂と云ふ、

一卒去之事、（附、）跡式願之事、（元和）同五年己未十一月十三日、卒然として病を發ゟ、樣々療養を盡といへとも其驗なく、遂ゟ卒去し給ふ、依之家中貴賤上下の差別なく、茫然ゟしく途方を失し、前後も不辨次第なり、然とゟ大村彥右衛門、松浦右近汝始、役人中申談、御遺領御相續之儀專一なりと、衆議致一決、公御病中之文體ゟして、本復之程難計奉存候、幼少之男子御座候間、跡目之儀、御慈悲を以無相違被仰付下置候樣奉願之旨相認、御形見の品相添、御老中ゟ宜（ヤ、）然御取成奉賴之段申含、駒田采女、原八左衛門を使者として、同十四日、早朝發足、江府へ差越、（事詳于一件帳、）

〔大村家覺書〕五　純信（純賴子、）從五位下、丹後守、小字松千代、元和四年戊午十月九日、於大村誕生、

一家臣等襁負純信到江府事、元和五年、純信二歳ゟして、父純賴卒ゟ、依之家臣大村彥右衛門純勝、松浦右近賴直、富永四郎左衛門忠清、右三人、十二

月十日、密ゝ純信ヲ抱て大村を發し、翌年正月廿一日、江府ゝ到て、亡父遺跡相續の事ヲ願ひ奉る、

一蒙遺跡相續之恩許事、同月五日（甲）（元和六年）（マヽ）

衛門ヲ被爲召、兩人即刻登城、大老酒井雅樂頭源忠世、老中土井大炊頭源利勝、安藤對馬守藤原重清（信）、其外官僚列座、雅樂頭台命を傳曰、純賴奉對公儀勤功多からに、不幸ゝして早く相果、其子松千代未幼少也、（此時父死し、子幼少なれ）へ、遺跡相續ならに、然共祖父喜前嘗て忠節有、其上大村家ゝ累代相續寂久し、是を以、純賴に遺跡不殘松千代に被仰付候間、以後汝等兩人松千代に代て登城し、大樹を可奉拜となり、其後兩人、純信ゝ代て登城、白銀を獻上して、遺跡相續に御禮申上候、且又亡父の遺物（青江刀）を獻も、兩人始て台德院殿ヲ奉拜、老中命ヲ傳曰、純信成長の聞に、彥右衛門、右近、四郎左衛門かゝるか

（大村記、肥前大村家譜同ジ、）

ゝる參勤して、質を奉ゝとなり、

○純賴、領內檢地ノコト、慶長十八年是歲ノ條ニ、肥前日野江城主有馬直純轉封ニ依リ、鍋島勝茂等ト共ニ、有馬ヲ守衛スルコト、同十九年七月是月ノ條ニ、長崎耶蘇教寺院ヲ破却スルコト、同年九月二十四日ノ條ニ、久嶋城ヲ修造スルコト、同年是歲ノ條ニ、大坂ニ出陣スルコト、元和元年五月一日ノ條ニ、大坂ノ黨明石內記ヲ搜索スルコト、同月十二日ノ條ニ、幕府ヨリ大坂ノ黨北川次郎兵衛父子ヲ預ケラルヽコト、同月十七日ノ條ニ、父喜前致仕シ、其後ヲ嗣グコト、同年是秋ノ條ニ、封內ノ耶蘇教徒ヲ刑スルコト、同三年四月是月ノ條ニ見ユ、

（幕府特命ヲ以テ遺跡ヲ純信ニ授ク）

（純信幼少ノ間家臣ヲシテ質ヲシテ呈セシムヲ）

〔參考〕

〔大村家覺書〕（附錄二）　耶蘇宗門御制禁始之事

且民部少輔純賴、元和五年己未十一月十三日、俄ゝ吐血して死に、群臣是ヲあやしむ、果して耶蘇邪謀して、毒害ゝ死せり、家士奴僕ゝ至迄臍を嚙、彼徒を亡主の怨敵として、探し求て殺害ゝる、以て、亡君の供養とに、○（上下略、父喜前、耶蘇教徒ニ毒殺セラルヽトノ說、元和二年八月八日、喜前卒スル條ニ見ユ、）

（耶蘇教徒ニ毒殺セラレシトノ說）

〔大村家記〕四　大村備定之事

純賴武義ヲ好ム事甚深シ、元和年中、大者頭（侍）拾二人ヲ撰テ、諸小給ヲ分テ拾二組トシ、城下ノ諸士、廣間番給人ヲ小馬廻ト號シ、各旗本トス、爾後給人ノ末子百人撰テ、鐵砲足輕トシ、（久原ノ邑ニ屋敷ヲ割與フ、百人小路ト名付ク、古來用筒百挺ト云ハ此故也、）旗本足

（武ヲ好ム）

純賴ノ死ニ對スル耶蘇教徒ノ批評

輕ト定、武具器械ヲ翫フ夏ヲ以產業トスル、然ルニ純賴不幸ニシテ早世、純信幼稚ニシテ家續ス、故ニ武備自怠ル、〇略下

〔パゼス日本耶蘇教史〕第二編　第三章　一六一九年（歐文材料第一號譯文）

この年の末、降誕祭の頃、大村藩主民部殿（純賴）病むこと幾くもなくして死去せり、彼は善心に立ち歸らずして死にたるが故に、生前キリシタンを殺したる罪を償ふ爲め、且又多くの不幸なる棄教者に精神的の死を齎したる罪を償ふ爲め、地獄の永劫の火に赴きぬ、

十五日（申午）、大和多武峯大織冠社正遷宮、勅使左少辨竹屋光長參向ス、

〔談山神社文書〕

地曳日時勘文

擇申　太織冠社地曳　日時、

八月四日、庚申、　時辰、

同十一日、丁卯、　時辰、

元和四年戊午七月廿九日　陰陽頭賀茂朝臣友景（幸憲朱）

新始日時勘文

擇申　太織冠社御造營新始　日時、

九月十九日、乙巳、　時卯巳（十一）、

同　廿一日、丁未、　時辰巳（十一）、

元和四年戊午九月五日　陰陽頭賀茂朝臣友景

地鎭祭日時勘文

擇申　太織冠社地鎭祭　日時、

今月廿三日、戊申、　時辰、

同　廿六日、辛亥、　時午、

元和四年戊午十一月三日　陰陽頭賀茂朝臣友景

礎日時勘文

擇申　太織冠社礎　日時、

今月五日、庚寅、　時辰、

同十五日、庚子、　時辰、

元和四年戊午十一月三日　陰陽頭賀茂朝臣友景

立柱日時勘文

擇申　太織冠社御造營立柱　日時、

元和五年十一月十五日

今月廿九日、甲寅、　時巳、
同　晦日、乙卯、　時巳、
立柱次第、先西、次東、次南、次北、

上棟日時勘文

元和四年戊午十一月三日　陰陽頭賀茂朝臣友景

擇申　太織冠社上棟　日時、
十一月三日、壬午、　時卯、
同　十五日、甲午、　時卯、
元和五年己未十月廿四日　陰陽頭賀茂朝臣友景

正遷宮日時勘文

擇申　太織冠社正遷宮　日時、
十一月十五日、甲午、　時亥、二點、
同　廿五日、甲辰、　時寅、一點、
元和五年己未十月廿四日　陰陽頭賀茂朝臣友景

〔談山神社記錄〕四〇大和

〔編纂書〕「大織冠正遷宮次第」

元和五年十一月十五日夜

多武峯太織冠御遷宮御參向之次第

勅使參向ノ次第

一勅使御參向之時、東惣門まて御迎衆、勸盃、手長、御童子、仕丁
一勅使東惣門よりはしろ輿ゐめに、御迎之衆先立て御幸道御供申、宿坊中門之内まて御輿ゐめに、
一宿坊へ御付(著)有て、先御行水、
一御膳、御茶、
一三綱御禮、但御膳過て、
一同晩御酒可進之、
(十五日)次之日
一勅使御集來に、宮へ御出之時に、勸盃、手長、御童子、仕丁御供、

遷宮ノ夜出仕ノ次第

遷宮之夜出仕之次第
一衆徒出仕、入相鐘定、
一勅使宮へ御出仕前に、柱炬可立組、長サ丈間ぬとき三尺也、卅五、

元和五年十一月十五日

勅使拜社

一勅使宮へ御出仕、酉之下刻、勸盃、手長、御童子、仕丁先立御供也、
一勅使樓門之口ニ而御輿より御出之時、亂聲有、勸盃先へ行、正面緣之西之脇ニ而一禮、著座を見合可著座、
一勸盃之座、唐棟西柱より二間隔、北座ニ著、をこしをゐて、手長、御童子座ニはゝ、
一行裂之次第、唐棟之下乍立宮ニ向、可被讀(マヽ)納所、
一勅使御座、唐棟之西南頭疊敷、疊之上ゐ讃岐圓座敷、
一戌鐘定ニ拜社、公所勸進可有、一鎮三足、唐棟北東柱きハ緣ニ立ル、
一拜社へ使、院の預り上番、

神輿御幸

一亂聲、
一讃衆者先假殿之拜殿へ可有出仕、庭之讃、公所衆より可有左右、讃過、本社東透廊へ可有出仕、
一大阿闍梨洒水ニ御立之跡より、公所、勸進、御輿添、假殿可被參、
一榊持百齋(齊)磯野、
一御神輿、

阿闍梨拜社番論義

一御幸之間、白須之音樂有、
一御神輿本社へ遷、諸役者本座へ著、
一讃有、同千秋樂、廻向伽陁、
一阿闍梨拜社、畢本座著、
一番論義證誠、御前へ小机ゐはをより(マヽ、唐カ)居院預り持參、
一番論義有、

勅使還御

一柱炬トモス、
一勅使坊廣間へ疊にゐたしれく、
一勅使還御、勸盃、手長、御童子、仕丁御供、
一公所衆、勅使坊へ御禮ニ被參、次ニ諸役者退出也、
一仕丁、僉議衆迎可參、扨仕丁ハ緣之裏を左右ニ居、
一諸(僉)議、僉當、裏頭ゐて勅使坊へ行、
一螺衆裏頭ゐて勅使坊へ行、大門外ニ而螺一双、中門之外ゐて一双、次ニ僉當、螺衆中門へ入ル、白須の中程ゐ僉當、螺衆立竝、次僉議中門之下に立、僉當ニ向ヒ、僉當〳〵ト二聲僉議より喚、僉儀(議)ト被申、勅使者宮よりの御裝

能出仕ノ次第

元和五年十一月十五日

東ゟ出て著座、僉議畢螺一双、次ニ僉議中退出也、

翌日(十六日)御能出仕之次第

一御奉行衆東の透廊へ出仕間、下奉行衆西透廊、

一衆徒出仕、辰刻、唐棟より東、

一公方人、承仕、東縁唐棟ゟ二間、

一仕丁唐棟之庭ニ左右ニ立、

一勅使著座、唐棟ゟ西一間之中程、(但、畳)

一猿樂出仕、

一勅使へ勸盃、可始御能よし伺、公方人をめし、一藺へ御能始候へとの通し有、

一一藺御能仕と下知ゟ初、

一翁之間、一藺より以公方人、猿樂へ床木を免、

一能數七番、(但舊記)

元和五年

十一月十五日

上棟遷宮日治定

上棟日ノ延引

廣橋總光後見トシテ下向

遷宮ノ晉信

竹屋光長參著ノ日ヲ多武峯ニ豫報ス

〔孝亮宿禰日次記〕五　十月十二日、辛酉、晴、參關白(九條忠榮)殿、多武峯社遷宮事有御沙汰、

〔門主傳〕○(二十五華頂要略十四所收)　圓智院二品法親王、諱尊純　同(元和四年七月)月晦日、談山地曳日吃勸文、今日從二條殿下(昭實)到來、即賜壽命院(良慶)了、九月九日、同本宮造營斧始日時勸文、從竹屋辨光長、到來、即下談山、(幸德井主馬勘進、來廿一日云々、)十一月五日、多武峯礎、大荒神社柱立日時勸文、從竹屋左少辨到來、十月廿六日、談山上棟者五日、遷宮十五日治定之旨、壽命院言上、十一月十一日、多武峯本社上棟、(定日三日之處、有子細、俄延引、)同十二日、爲行事大谷治部卿泰重參向于談山、十三日、就多武峯遷宮、勅使竹屋左少辨參向、爲後見廣橋大納言(總光)下向、今日出立云々、同十五日遷宮、竹屋、南曹左少辨光長爲勅使有行向云々、同十九日、治部卿上洛、同十二月二日、惣代壽命院上洛、爲遷宮御禮、金貳百疋、諸白兩樽進上之、

〔談山神社文書〕

猶々、其元諸事御肝煎之儀推量申候、かしこ、

遠路御念入預書狀候、本望之至候、來十四日ニ參著申候樣可差越候、於其地萬々御馳走之儀專要存候、恐々謹言、

元和五年十一月十五日

十一月八日　　光長

竹林坊

猶々、被入御念預飛札候、本望存候、かしこ、

御書中令披見候、先日遂對談、喜悦至候、來十五日正遷宮ニ付勅使參向之事、得其意候、即拙者令同心、十四日ニ其地ニ下著可申候、恐々謹言、

十一月八日　　總光

竹林坊

總光勅使ト共ニ參向スルコトヲ諸ス

上棟遷宮ニ關スル多武峯ヨリ幕府ヘノ報告

急度申上候、仍太織冠正遷宮去十五日亥時、上棟十一日卯時相濟申候、勅使南曹竹屋辨殿御參向候、御同道廣橋大納言殿御下向候、此御同道も如先例御座候、御奉行衆被相請、如先規儼重被相調候、頓而罷下可申上候へ共、先注進如此ニ御座候、可然樣ニ被仰上所仰候、〇署名日附闕ク、

酒井（忠世）

本多（正純）

土井（利勝）

安藤（重信）

松平正久
伊丹康勝
ヘノ報告

急度申上候、仍太織冠正遷宮去十五日亥時、上棟十一日卯時相濟申候、勅使南曹竹屋辨殿御參向候、御同道廣橋大納言殿御下向候、此同道も如先例御座候、御奉行衆桑山左衞門（一直）佐殿、小野宗左衞門（貞則）殿被相請、萬事儼重ニ被相調候、楢村孫兵衞殿ハ禁中御番ニ而不被參候、頓而罷下、萬事可申上候へ共、先如此注進申候、御年寄衆へ右之旨申上候、可然樣ニ奉賴候、委細御奉行衆可被仰上候間、不能詳候、

十一月十七日

松平右衞門佐（正久）殿〇勘定頭

伊丹喜助（康勝）殿〇勘定頭

板倉勝重
ヘノ報告

急度申上候、仍太織冠御遷宮去十五日亥刻相調申候、桑山左衞門佐殿、小野宗左衞門殿被相請、如先規儼重ニ御調候、江戸御年寄衆へ、御奉行衆ゟ注進

狀被返(送)候間、我等も進上申候、御屆被越被下候ハヽ、可爲過分候、頓而罷上候
可申上(面脫カ)候、恐惶謹言、

十一月十七日

板倉伊賀守(勝重)様

〔談山神社文書〕第二回採訪五〇大和

覺

伶人登山舞樂

一先年ゟ正遷宮之時、勅使參向ニ而御座候、元和五年、從御公儀御遷宮被仰付候時も、勅使御參向ニ而御座候事、

一先年ゟ正遷宮之時、伶人登山、舞樂御座候、元和五年之正遷宮之時も、如先規舞樂御座候事、

勅使ノ御馳走トシテ能ノ興行

一先年ゟ正遷宮之時、勅使爲御馳走、一日能御座候、元和五年之正遷宮之時も、寶生太夫樂頭ニ付而、寶生相勤候事、

勅使ノ賄

右勅使之御賄、伶人能大夫下行、元和五年御遷宮之時ハ、從御公儀被仰付候付而、寺中ニ記錄無御座候、

長者宣ノ禮錢

一長者宣之禮錢、先規ゟ仕來候、元和五年御造營之時ハ、万事從御公儀被仰付候付而、如何樣ニ被仰付候も、寺中ニ記錄無御座候故不存候、

日時勘申ノ下行

一幸德井日取之下行、先規ゟ仕來候、元和五年之御造營之時ハ、是又從御公儀被仰付候付而、寺中ニ記錄無御座候故不存候、

右者元和五年御造營之時之樣子、如此御座候、〇中略、永正十八年、永祿三年造營ノ時ノ入費ニカ、

ル、

右者從公儀被仰付候御造營ニ而無御座候付而、今度御造營之例ニも罷成間敷奉存候へ共、記錄之趣寫候而、差上ケ申候、以上、

申(寶文八年)正月廿三日　多武峯役者中

五味藤九郎(豐貞)殿〇代官

〔談山神社文書〕第二回採訪一〇大和

太織冠御造替僉議曰、厥當寺者、去帝都阿練若處、叡願無比靈崛也、隔人境神仙所居、吾朝無双勝地也、王臣尊敬超餘社、公武崇敬勝他寺、精舍者、三寶住持梵場、四衆勤行淨席也、肆月氏者、須達長者作祇園精舍、辰(旦)者、後漢明帝建立白馬寺、日域者、上宮太子營四天王寺、爾以來、三國建伽藍、貴賤崇堂舍、爰從一位右大臣征夷大將軍源秀忠公、三寶仰信銘肝、佛神歸依更深、然間當社造替、

遷宮用ノ布帛

自昨年至今年、命奉行三人、新造立神殿、改舊作拜殿、本社琢珠玉、寶柱莊衆寶、社頭竝甍於甍、樓閣重軒於斬(軒)、金銀無量營之、米錢盡數瑩之、爰以依關白(九條忠榮)殿下命、南曹役者奏之、仰天文撰嘉辰、召博士卜良日、粤吾君、遣天使新殿場、遷冥神寶閣座、故吾神者、開安座玉扉(之脫カ)、褒擁護之錦帳、冥衆者、曳影向之裙帶、盡隨喜之歌詠、加之鼓々打鼓音、峙四智三身之耳、颯々振鈴聲、醒六道四生之眠、誠是天下泰平之懇祈、國土安穩之勤行也、視夫萬岳千峯、峨々岨雲路、山川谿谷、險々流萬水、乞願者法味無竭、增威光於我國、參詣無止、施靈驗於自他、奉祝今上皇帝聖躬萬歲々々萬々歲、征夷大將軍武運長久々々長々久、殊者金槌不傾、送星宿劫春秋、玉壘(キ)不朽、遇樓至佛出世、將亦禁闕雲收、萬乘浪靜、大衆不絕大慶祝言、侍庭上謹而唱短札之僉議而已、

元和五己未歲十一月十五日　敬白

〔談山神社文書〕

覺

一から錦拾卷　但三拾貳丈壹尺

一せんし拾六疋

一ねり四疋　是ハ小道具之用

一布拾壹端　是ハ地布、

一布五拾端

右之分相渡シ申候、以上、

十月卅日　小野宗左衛門(黑印)

壽命院(良藝)様〇十月晦日附、造營奉行衆宛、良藝ノ請取狀アリ、略ス、

覺

一ぬの貳拾四端ハ、地(充カ)ちやう上下之用、

一きぬいと貳拾目ハ、戸張、かべ代ノ用、

右之分慥請取申候、以上、

たう

壽命院

良藝(花押)

十月晦日

小野宗左衛門尉様

遷宮用ノ諸道具

元和五年十一月十五日

楢村孫兵衛様
桑山左衛門佐様参

覺

一三拾六なかれ　はた
一貳つ　てんかい
一九つ　御ミすのかゝえ
一九つ　すゝ
一貳拾貳張　白布まく
一壹つ　あしろこし
一貳つ　うちしき
一貳筋　てんかいのひきなわ
一四筋　けいのを
一拾八筋　御かゝみのを
一九筋　御ミすすゝのを

遷宮ノ費用

一三拾筋　かへしろのつりを

右之分持越申候、慥こうけ取、何れも所々ニ遣可被申候、又寺中へ相渡候物ハ、竹林坊、壽命院へ相渡可被申候、以上、

霜月九日　小宗左（黒印）

多武峯下奉行衆（十一月十日附、福壽院尊英、壽命院良藝連署、小野貞則宛請取狀アリ、略ス、）

請取申平錢之事

一三拾貳貫八百七十文　寺中へ、
是ハ地引、地鎮、石礎、釿始、柱立之時、寺中諸役人へ下行、
一八貫百廿六文　御供所へ、
是ハ御遷宮之時、御供備近々（遠カ）下行、
一六貫文　幸德井へ、
是ハ禁中ゟ被仰付、御日取仕候下行、
合四拾七貫文

右是ハ多武嶺御造宮幷御遷宮ニ付、諸役人へ如先規御下行、慥ニ請取申候、

元和五年十一月十五日

元和五年十一月十五日

仍如件、

未十一月十六日　　壽妙院(命)
　　福壽院

桑山左(帯脱カ)門佐殿
　　楢村孫兵衛殿
小野宗左衛門尉殿

一地引
一地鎮
一石礎
一釿始
一柱立
右五ヶ度之入目、
合三拾貳貫八百七十文　　幸德井
一五百文

擬寶珠ノ代銀

一壹貫文　　同内衆
合六貫文
御供二ヶ度之入目、
合八貫百廿六文
　御供所宮仕ゟ可相渡候也、
都合四拾七貫文
此内貳拾五貫文
　安養院ゟ請取申候、
引殘貳拾貳貫文歟、
右之通御覽候て、引殘所御渡可被下候、奉賴候、以上、
元和五年　　壽命院良(花押)
十一月十九日　　福壽院(花押)
柳新左衛門殿參

多武峯きほうし覺

元和五年十一月十五日

一百五十貳匁　物かす四ッ、中　但付壹ヒ卅八文ッヽ、
一三百六十匁　物かす六ッ、大　但付壹ヒ六十匁ッヽ、
一貳百七十六匁　物かす十二　但付壹ヒ廿三匁ッヽ、
以上　物かす貳拾貳也、
右之代銀合七百八十八匁也、

京佛供屋
甚左衛門（花押）

元和五年霜月十九日
御寺中
一百匁　けくぎ　物數四拾四
一三十匁　しやくてう　一つ

寶生大夫多武峯ヨリ遷宮ノ命ゼラルヽ能破裂ノ能祭ノ能移ノ初能

今度多武峯御造宮、從公方様被成候付、御遷宮之御能拙者被仰付、忝奉存候、毎年九月十一日御祭之御能ハ、先々ゟ拙者樂頭にて御座候條、無相違被仰付可被下候、其外御はれつの御能、並御宮移之はつのうの御能ハ、拙者樂頭にて無御座候條、以來毛頭構申様無御座候、御寺中ゟ被仰付候ハヽ、何時も可仕候、自然御雇なく候はヽ、拙者少も構申間敷候、爲後日如此申上候、仍如件、

元和五年　未霜月九日
寶生大夫
多武峯　忠勝（花押）
御寺中人々御中

（図紙）「多武峯能之儀ヒ　寶生大夫一札」

病氣全快次第下向セントス

○幕府、多武峯大織冠社ヲ造營セントシ、桑山一直等ヲ奉行ト爲スコト、三年九月三日ノ條ニ見ユ、

十九日、戊戌、金地院崇傳、江戸ニ之ク、

〔本光國師日記〕二十六　一同日（十月十六日）、伊丹喜之助（康勝）殿へ書狀遣ス、略○中　案左ヒ有、大（土井利勝）炊殿へも狀遣ス、案左ヒ有、

氣相彌本復仕候、力付次第ニ可罷下候、彌御次而之刻、可然様ニ御取成奉賴候、大炊殿へも一書申入候、猶以御參會之刻、能様ヒ被仰入可被下候、○上下略、十月十六日附、伊丹康勝宛、崇傳書狀案、崇傳病ムコト、四月十三日、暇ヲ給セラルヽ條及ビ年末雜載、疾病、死歿ノ條ニ見ユ、

氣相彌能罷成候間、力付次第ニ可罷下候、御次而之刻ハ、猶以可然樣ニ
御取成奉頼外無他候、○上下略、十月十六日附、土井利勝宛、崇傳書狀案、

一十一月七日、

冬至過ギ下向ノ豫定

一伏見以來者、終ニ以書狀も不申入、無音所存之外ニ候、病後故未氣力無之候而、養性(生)仕候、冬至過候者、江戸へ可罷下と存候、其内面上ニ申入度候、隨而先度於伏見も、内々申入候宗清申分之儀、何とそ相濟儀ニ候者、被仰付可被遣候、猶期拜顔候、恐々謹言、以上、

十月八日(一脫カ)　金

小野宗左衛門(貞則)殿　人々御中

右之折紙、草津之太兵へ達而望候故、認遣ス、

一十六日、伊賀(板倉勝重)殿へ狀遣ス、

○略上　隨而拙老義、彌十九日江戸へ可罷下候、明十七日之晝參て、御暇乞可申入候、恐々謹言、

十一月十六日

林永喜詣ノ色紙

京都ヲ發ス

大津

板伊州樣　人々御中

一同日、永(林)喜詣之色紙六枚書て、道春へ持せ遣ス、江戸へ十九日ニ下候間、用所候者、可承由申遣ス、

一十七日、河内道明寺、源四郎事ニ狀所望之間、調遣ス、案在左、

乍幸便一書令啓候、拙老義、明後十九日、江戸へ罷下候、御越年ニ可被成御下候者、於彼地可得貴意候、○下略、十一月十七日附、甲斐庄正房宛、崇傳書狀案、

一十七日、板伊州御出、江戸へ下候ニ付而暇乞也、色々持參共あり、

一霜月十九日、江戸へ下ル時、方々へ之銀子共御渡候、後又未下分とて、久右衛門書上候

方々へ未下卅一ヶ所、合三貫八百七十目九リン也、おくりきして遣候、
此分當納之銀子を以可相渡也、江戸へ下候時、未下分も書立見候、右ハ
さし引皆濟也、

元和五年未十一月十九日

書判

一同日、大津ヨリ方々へ狀遣ス、板伊州へ自筆之狀、神泉苑へ渡ス、○略中　南僧(天海)正、施藥院與安法印、友竹院、伯安(宗伯)、杉原東遣ス、竹田法印(慶安)、竹田治部卿、杉原東遣ス、宮丹入(宮城豐盛カ)、

山圖書（山崎景以）、盛方院（坂淨玲）、諸白一荷、若王勝仙院、諸白一荷、知足院、道春、竹門様（梁妹院入道昌智親王）廣内府（唐紙十枚）、右書狀遣ス、又板倉殿へ書狀進、方首座一禮之狀也、宗對馬殿（義智）へ狀遣ス、銀子五枚之禮狀也、柳川豐州（調興）へも、小袖壹重之禮狀遣ス也、

一同日、大津にて、久右衛門に切米加增之廿石遣候、右ゟ卅（マヽ）石遣候、合五十石遣候、手形切紙を遣ス、

切米

一同廿日、石部ゟ甚藏京へ戻ス、久右衛門へ書狀遣ス、るを中之法度書共遣ス、

石部

一同廿二日、三州岡崎ゟ竹之助京へ戻ス、進上之杉原三束、喜六にもゟせ、竹之介相添、廿五日に南禪を立、二日に江戸へ必下著候樣にと申遣ス、こゆゑも、同ゝ其時下し候へと申遣ス、相國寺長西堂へも狀遣ス、入寺之事、來々年も可然候ゟ、我等寺之入院も無本（マヽ）にと申遣ス、幷鹿苑へ官物納之儀尋に遣候書中也、侍衣付行者、力者、下物之員數も、具に御書付候而御越候へと申遣ス、自筆之書中也、

岡崎

一同廿六日、駿府へ下著、一色左兵衛殿（直勝）ゟの狀披見、屋敷之事等申來ル、

一同廿七日、駿府を御立、江戸へ御下向、松平大隅殿（忠明、駿府城代）、渡邊山城殿（茂、駿府城番）、村上三右殿（吉正、代官）

駿府

三嶋
戸塚
品川
有樂釜
江戸ニ著ス
幕府ヨリ米三百俵ヲ給セラルル

へ書狀認置、臨濟寺へも書狀遣、綿帽二ツ、踏皮一足遣之、

一同廿八日、三嶋に御泊、〇下略、江戸金地院作事ノコトニカヽル、十二月二日ノ條ニ收ム、

一同晦日、とつゝへ御著、松首座ゟ使者十來ル、狀來、ミそもち來

一極月朔日、とつゝゟ十を江戸へ先に戻ス、松へ返書遣ス、

一同晩、品川に御泊、樽もち來候人足共上候に、品川に而逢候、久右衛門へ狀遣ス、有樂釜、ごとく、いろりふち一つ、下候へと申遣ス、北山靜原之人足共六人上候に、右之狀遣ス、

一同二日、江戸へ下著、〇江戸金地院ノ造營成リ、崇傳之ニ移スルコト、十二月二日ノ條ニ見ユ、

一同日（四日）、駿府へ荷物取に、中間六人遣ス、めいゝゟへ、清兵へ方ゟ狀遣ス、

一同十日、伊丹喜之助殿ゟ使者、八木拜領之手形もゟせ來ル、

八木三百俵金地院へ被遣候間、手形を取可被相渡候、以上、

未極月十日

伊喜之助印（伊丹康勝）
井主計印（井上正就）
水監物印（水野忠元）
安對馬印（安藤重信）

松風助右衞門殿
紅林彌右衞門殿

右之手形、則兩人之御藏奉行衆へ、松首座ともゝせ遣ス、喜之助殿へも禮狀遣ス、

一同十一日、駿府ゟ中間六人戻ル、めい七日之返書來、こつりん廿袋、さゝ、たいも、ふろうま以下來ル、此便宜惣持院七日之狀來、松平大隅殿霜月廿七日之返書來ル、

一同十四日、細川越中殿(忠興)へ返書遣ス、內記殿(細川忠利)へもゝせ遣ス、案左ニ有、

○上略　一拙老義、十一月十九日ニ南禪寺を罷立候而、極月二日ニ江戸へ下著仕候、○中略、秀忠、上總土氣、東金ニ放鷹ノコト、崇傳、江戸金地院等ニカヽル、本月二十一日ノ條及ビ十二月二日ノ條ニ收ム、一拙老義、六日ニ御目見仕候、忝き上意共、仕合無殘所候、翌日ニ則八木をも過分ニ拜領仕候、年寄衆も御出候而、別而御懇共ニ候、御氣遣被成間敷候、○下略

〔梵舜日記〕二十二　十一月十九日、晴、○中略次金地院江戸下向之由也、

秀忠ニ謁ス

二十一日、庚子、秀忠、上總土氣、東金等ニ放鷹ス、

〔本光國師日記〕二十六　一同日、(播磨守四日)佐倉ゟ四郎(津田)右衞門戻ル、大炊殿(土井利勝)四日之返書來、上樣五日ニ此地へ可爲還御、大炊殿ハ一兩日御跡ニ、當地へ可有御越由之書中也、○崇傳、コノ時、江戸ニ在リ、

一同十四日、細川越中殿へ返書遣ス、內記殿へもゝせ遣ス、案左ニ有、

○上略　一上樣、十一月廿一日、土氣、東金へ鷹野ニ被成御成、十二月五日ニ江戸へ被成還御候、御機嫌能被成御座候、○中略　一土井大炊殿ハ知行所佐倉ニ御逗留候而、一昨十二日ニ江戸へ御歸著候、昨十三日參候而、緩々ト語り申候、是又別而御懇共ニ御座候、○下略、東金記錄異事ナシ、

〔東武實錄〕六　(十一月)是月公東國所々ニ御放鷹アリ、下總國市川ニ於テ、鐵炮ヲ放チ給テ、雁ニ中ル、時ニ淺原(正忠)又三郎、是ヲ捕ラント水ニ入テ、忽チニ凍死ス、公是ヲ憐ミ給フ、家光公ヨリ御使トシテ、土井左兵衞正次(後三浦志摩守ト號ス、)東金ニ赴ク、台命ニ依テ、內藤左馬助政長東金ニ供奉ス、

淺原正忠
土井利勝知行所佐倉ニ逗留ス
淺原正忠秀忠ノ所ノ鳥ヲ捕ヘントシテ凍死ス
土井正次東金ニ使ス
內藤政長扈從ス

〔寬政重修諸家譜〕八百六　內藤政長(左馬助、)五年(元和)十一月、台德院殿上總國東金御放鷹ゝとゝ、ゝゝゝひゝゝて万ゝゝ、○下略

〔寬政重修諸家譜〕二百十三　淺原正忠(又三郎、)某年、東照宮ニ拜謁し、大坂の役

秀忠毛利ノ秀就ヲニ鶴贈鷹ルノ

細川忠利同興孝ヲニ鶴贈鷹ルノ

ゑ供奉ゑ、それゝち台徳院殿とはのへゑて万ゆ里、小十人をはと先、元和四年十一月十六日、今乃呈譜五年十一月二十六日、十下総國市川ゑ鷹狩のとき、去さのゑゑて万つ里、御手はゑら鳥銃ををつてうさを給ふところれ鳥川中ゑ落しかは、正忠、こをを捕へんとて、水に飛入しゑ、寒に堪もして、はゐゑ凍死ゑ、年二十九、法名趙堂、今乃呈譜棟繁牛込乃寶泉寺に葬る、乃ち代々葬地とゑ、

〔寛政重修諸家譜〕五百十一　三浦正次左兵衛、五年十一月、台徳院殿上總國東金に放鷹したまふとき、御使ゑ遣て彼地ゑいさゑ、○正次、コノ時、土井氏ヲ稱ス、

〔寛政重修諸家譜〕六百十六　毛利秀就長門守、ゑのとし、御鷹れ靈を賜ふ、乃ち代々例となる、

〔細川家記〕二十一忠利一　一○略中其後御鷹之鶴御拜領、御天様へも、御鷹之鶴拜領被仰付候、

〔寛政重修諸家譜〕百五　細川興孝天、十二月、御鷹の鷹をたゐふ、

〔細川文書〕一其方へ御鷹之鳥、天こも御鷹之鷹ゑと被遣候由、大炊殿、主計殿へ懇ニ禮を申遣候事、○上下略、元和六年正月十日附、細川忠利宛、同忠興書狀、

興南院燒亡

千餘軒燒亡

十二月大盡庚戌朔

十二月大一日、庚戌、晴、日蝕、寅卯辰刻七分、

一日、庚戌、日食、

〔孝亮宿禰日次記〕五　十二日、亥、剋西里火事出來了、魚屋ノ

二日、辛亥、奈良大火、

〔春日記錄〕七正預祐範元和五年己未記　町ヨリ出シト云々、折節風吹テ、次第ニ燒失、大門（大乘院門跡）様御馬場、南院（興南院）、多門院、西坊、成林坊、御門前不殘燒了、御門跡既ニ火懸テ、御築地マテ火付了、乍去數多參合テ無異儀、珍重々々、西里南方大略燒了、中院寺村迄火來了、大方千家餘燒亡了、古今ノ大火也、

〔東大寺雜事記〕二　十二月二日、南里西口ヨリ火事出來ノ、東シ大乘院ノバヽ、（公納）クナウ堂町迄燒失、凡面家千三百間（軒）燒ト云云、町數以上十三町ト云云、陳（樓）數ハ四千ト云云、元興寺極樂坊加（脚）藍不（マヽ）苦、

〔孝亮宿禰日次記〕五　一十二月十日、己未、雪降、參二條殿、今月二日、南都町中三千軒計燒亡云々、

〔興福寺別當記〕下　同年（元和五年）十二月二日、南都千餘家燒亡、

元和五年十二月一日　二日

池之町
南燒
燒跡町
淨言寺町
南風呂町
十念寺

〔參考〕

〔奈良坊目拙解〕二　池之町（俗謂燒跡町、）

當名在猿澤池南邊、仍名之矣、

當町先年西一方口也、中世新開東門口渡橋矣、故此板橋令造營自當所也、

池之町如謂于南市今御門條下、天正慶長年間、興福寺坊舍或爲芝原焉、後世爲町家、

按、元和五年己未十二月二日、自南新町到高畠邊悉燒失、謂之南燒矣、當町罹此災而後、久不造民家、爲荒廢地乎、仍時人稱燒跡町焉、

〔奈良坊目拙解〕三　淨言寺町（當町入組興福寺領下東側、自北限川岸、至南方中程寺下也、亦西側不殘各爲寺下也、）

〔略〕上元和五年己未十二月二日、南都南方有火、出自新町、及于高畠、悉炎上、此日淨言寺燼滅、爲廢地乎、

〔奈良坊目拙解〕五　南風呂町（往年爲小路、仍曰南風呂辻子、）

古記云、元和五年己未十二月二日、自南新町出火、而南都南方至高畠、各類燒、當邊其時變古地爲町屋也云々、

十念寺（忍性山在北側東端、淨土宗、京誓願寺末寺、）〔略〕中

阿彌陀寺
南新町
新町燒
作事始
江戸金地院ノ留守居

奈良年代合運曰、寛永六年己巳、本堂造立云云、按先規、移建自八條邑、本堂去元和五年十二月二日炎上、而寛永六年再興乎、

阿彌陀寺（安養山淨土院在當町南側、淨土宗、一心院派、）〔略〕中

按、當寺慶長年爲艸庵、爾時南都尹中坊飛驒守秀政、同子息美作守時祐、相續而爲當寺大檀越焉、元和五年十二月二日炎上以後、寛永中、本堂造立乎、於是中坊家代々墓所有當寺矣、

南新町（謂魚屋町南、瓦町北、）

當名同魚屋新町、慶長年不有町家、其後建民屋、仍號新町、其先城戸邑界內也、南者所以在於魚屋新町之南矣、猶後建于魚屋新町也、

古記云、元和五己未年十二月二日出火、自新町至于高畠、南都南方過半燒失、是謂新町燒云々、〔本書、公納堂町ノ條、燒亡ノコト所見ナシ、〕

江戸金地院造營成り、崇傳、之ニ移ル、

〔本光國師日記〕二十六　一正月十日、寺院寺作事之事始也、〔崇傳、コノ時江戸ニ在リ、〕

一同日（五月二十六日）松首座五月十三日之狀來、此書中ニハ、竹侍者十四日ニ江戸を被罷立之由申來ル、長谷七右衞門居ル、江戸金地之るも居六月末ニ替候樣ニ

と申來ル、六月中旬こ此地を立、可下也、○崇傳コノ時京都ニ在リ、

一同日、(六月五日)江戸松首座五月廿四日之狀來、作事出來ノ指圖來、

一同十五日、江戸之寺留守居珍首座、四郎右衛門差下ス、

指圖

一同日、(十七日)江戸深津彌左ゟ五月廿六日之狀來、子息孫左衛門被屆候、伏見之屋敷迄來著候由、今日清兵へ取て來ル、作事首尾之由之書中也、

作事落成

一同廿九日、(七月)松首座江戸こ上ル、渡邊孫(勝)三、深津彌左七月廿二日之連狀來、寺作事出來、十九日こ相渡候由也、

一同十三日、(十月)津田四郎右衛門九月廿五日之狀來、珍藏主ゟも書狀越ス、京之馬ゟ之言傳ル、西岡之者之由也、四郎右衛門書中こ、江戸寺作事彌皆首尾、けんくゆんと、らうか、たい所の間こといゟけ候由、董堂之南之えんひろく成候由、方丈臺所こ天水貳つつ上り候由申來、

一同日、(十一月七日)江戸延壽院十一月三日之狀來、延壽院(今大路道三)ノ者上ル、此便宜こ津田四郎右衛門、珍之(珍首座)十一月一日之狀來ル、大炊殿(土井利勝)、喜之介殿(伊丹康勝)、十月十九日こ寺見こ御出候由申來、

土井利勝
伊丹康勝ノ見分

一同廿六日、駿府へ下著、一色左兵衛殿ゟの狀披見、屋敷之事申來ル、○崇傳、京都ヨリ江戸ニ之クコト、十一月十九日ノ條ニ見ユ、

寺ノ引渡シ

一同廿八日、三嶋こ御泊、渡邊孫三郎、肥後へ御使こ御越候、原之宿こ而路次行違、吉原ゟ、廿八日之狀三嶋へ來ル、三嶋之代官今村宗左衛門ゟ被屆、江戸之寺作事共皆々相濟、津田四郎右衛門へ相渡候ことの書中也、松首座方へも、同文言こ而又狀來、寺之儀取成申候樣ことの文言也、

崇傳移徙ノコトヲ土井利勝ニ報ズ

一同(霜月)三日、土井大炊殿へ、佐倉へ書狀遣ス、○利勝、知行所上總佐倉ニ逗留スルコト、十一月二十一日、秀忠上總土氣東金ニ放鷹スル條ニ見ユ、江戸へ下著之案內也、○崇傳、本月二日、江戸ニ著スルコト、十一月十九日ノ條ニ見ユ、昨二日、新院へ移徙仕候儀をも申遣ス、使ハ津田四郎右衛門也、

細川忠興ニ報ズ

一同十四日、細川越中殿(忠興)へ返書遣ス、內記殿(細川忠利)へもゟせ遣ス、案左こ有、

十一月十七日之尊書、極月十日、於江戸致拜見候、○中略　一拙老義、十一月十九日こ、南禪寺を罷立候而、極月二日こ、江戸へ下著仕候、吉日こ御座候而、直こ新院へ移徙仕候、寺見事こ首尾仕候而、手つゝいも能、緩々と罷在候、御心安可被思召候、○中略、崇傳、秀忠ニ謁スルコト及ビ秀忠、上總土氣東金ニ放鷹ノコトヲ等ニカヽル、十一月十九日及ビ同月二十一日ノ條ニ收ム、

へ可有御出由こ候、殊こ新院こ而之振舞、一入目出度存候、○下略、極月十四日附細

移徙ノ祝儀

川忠興宛、崇傳書狀案、年寄衆招待ノコト、所見ナシ、

一同廿日、南禪寺常住ゟ飛脚下ル、略○中正因庵八日之狀、幷歳暮新院移徙之祝儀ニ、銀六匁來ル、良西堂八日之狀、幷歳暮移徙之祝儀ニ、壹分一ッ來ル、廣西堂八日之狀、歳暮移徙ニ、壹分一ッ來ル、求西堂八日之狀、移徙之祝儀三匁來ル、貞首座八日之狀、幷移徙之祝儀ニ、壹分一ッ來、久右衞門八日之狀來、追而狀も來ル、

一同廿二日、南禪寺常住之飛脚返し上ス、略○中正因庵、大寧院、慈聖院、語心院、正法院へ返書遣ス、有樂老(細田長巻)、崇壽院ゟ、久右衞門へ返書遣ス、用之事、以一書申遣ス、何も歳暮移徙祝儀之禮申遣ス、

一同廿九日、龜、祝儀ニ、壹分一ッ來ル、

一同大晦日、細川越中殿ゟ使者來、十二月三日之狀來、又三日之追而狀來、○中略使者之名神西與三右衞門、田中半左衞門も同心ニ來ル、則返書遣ス、案左ニ有、

先書ニも申入候、當地拙老寺、見事ニ首尾仕候而、緩々と罷仕候、仕合之事、可御心安候、○上下略、極月晦日附、細川忠興宛、崇傳書狀案

寺ハ幕府ノ造營

崇傳ノ伏見屋敷

〔仏古語〕三　一同(元和)五年十二月二日、於江戸、金地新院ゟ移徙、

〔續府内備考〕八十九　臨濟宗　寺院部六十　金地院上　六十五　御由緒書

一十一(元和五年)月十九日、僧(崇傳)錄京發出仕、十二月二日、江戸ゟ參著、御作事被仰付被下候新院之金地院ゟ移徙仕候、

○崇傳、江戸城内新造ノ第ニ移徙スルコト、四年九月二十七日ノ條ニ、江戸ニ之クコト、本年十一月十九日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔本光國師日記〕二十六　一同日(二月十五日)、窪之坊則被上之由候間、久右衞門方へ狀遣ス、十五日之日付也、久右へ追而狀遣ス、伏見小や掛不相調候者、御幸(尊)宮之内文殊院外被居候寺を借候樣ニ才覺可申由申遣、則文院(味脫カ)折紙を取上ス、何も窪之坊ニ渡ス也、

一二月十六日、京ゟ彌十郎人足兩人下ル、略○中板伊賀(所倉藤貞)殿二月二日之返書來、伏見屋敷之事心得候ヒの返書也、

一同十九日、北山人足貳人上ス、久右衞門へ狀遣ス、崇壽院殿、伊賀殿へも狀遣ス、小袖貳、ねまき上ス、伊州へ伏見屋敷之禮申遣、

一同日、(九月六日)村田權(守次)右衞門、日下部五郎八(宗好)、今晩之儀公儀隙入、來臨有間敷之由申來、一紙ニ狀來、則返書遣ス、大坂屋敷割候者、算用場之隣、覺長老屋敷申請候樣ニ御肝煎賴入之由申遣ス、

崇傳大坂屋敷割ニ就キ村田守次ニ依宗好ニ依頼ス

一同十八日、駿府ヘ五郎兵ヘを下ス、書狀之案左ニアリ、

○上略隨而駿府寺之義、可然樣ニ御前御取成、奉賴存候、○下略、崇傳、秀忠ニ蜜柑ヲ獻ズル

コトニカヽル、九月十九日附、土井利勝宛、崇傳書狀案、

駿府ニ就キ井利勝ニ依頼ス

九月十八日ノ條ニ收ム、

寺ノ土

一同日、(十月十六日)伊丹喜之助殿ヘ書狀遣ス、大橋長(重保)左身上之儀賴入之由、長左被望候間申遣、案左ニ有、大炊殿ヘも狀遣ス、案左ニ有、

○上略、秀忠、江戸ニ還ル途、駿府ニ著スルコトニカヽル、駿府拙老寺、如九月十八日、秀忠、京都ヲ發シテ、江戸ニ還ル條ニ收ム、前々拜領之旨、忝儀不淺奉存候、氣相彌本復仕候、○崇傳病ムコト、年末雜載、疾病、死歿ノ條ニ見ヱ、力付次第ニ可罷下候、彌御次而之刻、可然樣ニ御取成、奉賴候、大炊殿へも一書申入候、猶以御參會之刻、能樣ニ被仰入可被下候、隨而大橋長左衞門被罷下候、最前ゟ如申候、我等所ニ而手習をもさせ申仁ニ候、貴樣御懇ニ被成之由、彌身上罷立候樣ニ萬事奉賴存候、恐惶謹言、

幕府駿府ノ寺ヲ崇傳ニ安堵ス

崇傳大橋重保ノ身上ヲ伊丹康勝ニ依賴ス

十月十六日　金

伊丹喜(康勝)之助樣　人々御中

利勝ノ斡旋ヲ謝ス

○上略、秀忠、江戸ニ還ル途、駿府ニ著スルコトニカヽル、駿府拙老寺、如九月十八日、秀忠、京都ヲ發シテ、江戸ニ還ル條ニ收ム、前々拜領之旨、忝次第不淺奉存候、貴樣御取成故、諸事外聞實儀無殘所、難有存候、氣相彌能罷成候間、力付次第ニ可罷下候、御次而之刻ハ、猶以可然樣ニ御取成、奉賴外無他候、猶追々可得御意候、恐惶謹言、以上、

十月十六日　金

土井大炊助樣　人々御中

○江戸金地院ノ書院、數寄屋ノ建築及ビ筑波ヨリ植木移植ノコト、便宜左ニ合敍ス、

書院及ビ數寄屋ノ建築崇傳ヲ大工ヨリ都ヨ招ク

〔本光國師日記〕二十七

一正月廿四日、(元和六年)岡嶋二郎兵上洛、寺志摩殿(寺澤廣高)ヘ自筆ニ書狀遣之、其便宜ニ久右衞門方ヘ狀遣、書院、數寄や立候ニ付、大工長右衞門下候ヘとの事、くきかゝ物萬調、下候ヘとの狀也、

一同十日、(二月)久右衞門方ヘ狀遣ス、宮丹州(宮城豐盛)ニ言傳ル、すきや、書院作事之儀申遣ス、

元和五年十二月二日

一二月十七日、久右衛門ゟ彌十郎下ル、久右二月九日之狀來、大工長右衛門、
其外大工衆、小引（木挽）、たゝミさし、何も近日可下ス之の書中也、釘百ゑ來、但右
之内十ゑい、與吉持下ル、
一同（二月）十七日、筑波へ庄介遣ス、定德院へ狀遣ス、もみの木丸太舟こつミ候儀
萬賴入、由申遣ス、庄介い舟之上乘也、
一同廿二日、筑波定德院廿日之狀來、植木共十九日ゟ掘つゝませ申之由之
書中也、知足院ゟ被屆ル、
一同日（二十三日）、京ゟ助三幷中間一人下ル、久右衛門三月十二日之狀來、すきや材木
共馬三駄こして下ル、下候註文別紙こ書付下ル、
一同日（二十四日）、筑波定德院廿二日之狀來、植木共舟つミこてまゐし候との註進狀
也、廿二日八つ時分出船之儀申來ル、庄介らゟゟも、清兵へらゟへ狀を越
ス、定德ゟ知足院迄折紙も見せこ來ル、
一同日（卯月三日）、筑波ゟ植木船著、采女殿へ禮之撚遣、常德院、伊藤五右衛門、大岡治左
衛へ禮狀遣ス、知足院迄狀を添遣ス、
一同日（六日）、大工衆六人、甚藏添下ル、久右衛門三月廿六日之狀來、下物共色々有、

筑波ヨリ樅ノ木ノ輸送

數寄屋ノ材木京都ヨリ江戸ニ著ス

植木船筑波ヨリ江戸ニ著ス

大工衆ノ下向

別紙ニ目錄來ル、
一同（卯月）十日、甚三上ス、久右衛門らゟへ返書遣ス、書院板之事、就中御祈禱料、寺
中出仕之衆へ布施之事、則別紙こ書付遣ス、
一同晦日、たゝミや三人こ、喜六宰領こ而下ル、

〔本光國師日記〕二十八　一同（元和六年五月）八日、筑波定德院五月七日之返書來、伊藤五右
衛門五月六日之返書來、大岡次左衛門六日之返書來、植木之禮申遣候、何
も返書也、知足院ゟ被屆ル、
一五月十八日、清八こ人足兩人以上三人下ル、久右衛門五月八日之狀來、書
院ゑの引付、間合百八十まい、らゝミ貳百四十まい、しやのゝちやう一
張下ス、
一同十九日、清八幷人足二人上ス、久右衛門へ返書遣ス、ふとん一つ上ス、又
ゝらゝミの事間合とりのこ之事申遣ス、今度下候間合一まい、らゝミ
一まい、本こ上ス、又取寄候二色の紙の員數、十七日之案之所こ見えゟり、
○本書十七日ノゝけか條ニ所見ナシ、
申遣ス、引手も今六つくゝさし候へ之由申遣ス、

書院板

疊屋ノ下向

紗ノ蚊帳

かんてら

疊屋ノ歸京

一同廿一日、上方飛脚藏福下ル、久右衛門六月六日之狀來、下物共、一引手四十八、一りけりを九、くさり、其外色々道具共下ル、註文別紙ニ書付來ル、則戸ニ張付置候、

數寄道具

一同廿四日、たゝミ久三郎上ス、久右衛門へ書狀遣ス、たゝミさし共日數作右衛門ニ申付、別紙ニ書付上ス、

大工ノ歸京

一同十日、京方甚藏、中間、共人足、以上五人下ル、久右衛門八月廿七日之狀來、數寄道具仕立色々下ル、目錄別紙ニ來、則佛さんノ戸ニ張付置、

はかき

一同日、久右衛門方へ狀遣ス、道三方之便宜ニ遣候、甚藏、與右衛門、人足共、十日ニ下著、道具共ハ皆々請取候、右之者共ハ煩候者、又ハ此方用所候て留置候、大工長右衛門同時ニ、十七日過て可上ト申遣ス、

作料ノ手形

一同十九日、大工長右上ス、甚三千人足三人上ス、久右衛門方へ狀を遣ス、餅米、さひ、こゆミの事あと念比ニ申遣ス、自筆ニて遣ス、板伊州、防州、廣内府、三大有樂、道惠、大寧、崇壽院殿へ文上ス、長右ニ作料渡候ハゝ、ひき遣ス、長右ニ小袖二、銀子一枚遣ス、又駿府めい藏主へ、清兵へ、りさん書狀遣候樣ニト申付ル、小判一兩遣ス、甚藏ニ渡遣ス、長右衛門作料之手形、久右衛門へ

大工ノ賃銀

申遣ス、案左ニ有、但長右衛門ニ渡ス也、

大工長右衛門ニ可渡作料之事、但一日三匁つゝ也、四月廿四日ハ九月晦日迄遂算用可相渡者也、以上、

申九月十九日　金地院印

指物屋ノ下向

久右衛門　り

右是ハ、久右衛門ニ取而置、久右衛門ニ銀相渡候樣ニ申遣ス、

一十一月二日、さし物や宗十郎下ル、久右衛門十月十五日之書狀來ル、近日人を下候ト之文言也、宗喝十月十五日之狀、清兵へ方迄來ル、助十郎持參申也、

大工ノ歸京

一同廿三日、大工衆六人、善左衛門、九郎兵へ、左兵へ、長兵へ、長次、善四郎上ス、久右衛門へ狀遣ス、大工之日帖も上ス、大工衆ニ小判六兩、壹分五切りし候、其借狀も上ス、春以來之さん用し、相渡候へと申遣ス、其外大工九郎兵へニ、八木一石、一日りけ升ニ而遣候へと、久右衛門へ追而狀遣ス、又、ゑりき、右之通ニ認、九郎兵へニ渡ス、其手形久右衛門ニ渡、八木請取候樣ニト申渡ス、崇壽院殿へも、自筆ニ而文遣ス、久右衛門へ之書中ニハ、なんニ極

白貳石遣ス事、八尾餅米其外歳暮之道具如例下候へと申遣ス、其外用共申遣ス、右之狀、大工日帖以下、文箱ニ入、封付而、大工九郎兵へニ渡ス、

一同十六日、久右衞門方庄介下ス、同日同時程後ニ與三下著、與三ニ久右衞門十二月五日之狀兩通來、下物共、別紙ニ書付來ル、案左ニ有之、又六日之日付ヨて、追而狀來ル、是ハ五日ニ大工衆上著候作料見合遣スへきとの書中也、以來念(マヽ)をさめ、久右狀札を付、うけ硯へ入置也、

一後極月四日、大佛師左京上ス、道惠へ返書遣ス、○中略左京ニ見さやうし五遣ス、

大工ノ下向

大佛師ノ歸京

五日、甲寅、御生母近衞氏、近衞信尋ノ第ヨリ、新殿ニ移徙シ給フ、

〔言緒卿記〕十二月大一日、庚戌、天晴、

一從兩傳奏(廣橋兼勝・三條西實條)來五日、國母樣新殿ヘ移徙(徒下同ジ)也、公卿殿上人各御供ニ、從日出參會可有由御觸有之、言總(山科)ニハ北面一人、布衣一人可召連之由申來、餘雲客ニハ、烏帽子キ二人、雜色二人可召連由申來了、

四日、癸丑、天晴、小寒ニ入、

一從兩傳奏觸アリ、明日、國母樣御移徙アリ、御供ノ殿上人ハ右衞門佐殿(宮倉永慶)、平松殿勸修寺殿(經廣)、中務殿(土御門泰重)、山科殿(言總)、極藏殿(行カ)(千生忠利)、倉橋殿(泰吉)清藏人(頭殿)、鹽小路等也

五日、甲寅、天晴、

一國母樣新御殿ニ御移徙有之、公卿殿上人供奉ト云々、

六日、乙卯、天晴、

一國母樣御移徙ノ御祝言ニ、昆布三束、烏賊十連、雉三羽進上申了、

〔孝亮宿禰日次記〕五　十二月五日、甲寅、晴、女御移徙有之、中御門大納言、資胤、廣橋大納言、總光、正親町三條中納言、實有、今出川中納言、中院中納言(通村)、阿野中納言(實顯)、西洞院宰相、時慶、廣橋宰相、兼賢、藤右衞門佐(宮倉永慶)、勸修寺、土御門中務少輔泰重、平松、山科內藏頭(言總)、藏人小槻忠利、倉橋差次藏人泰吉、鹽小路新藏人通規等供奉也、

六日、乙卯、晴、忠利參禁中、女御移徙御祝、二ケ兩種進上、

○御生母近衞氏、院御所ニ御移徙ノ風聞アルコト、四年九月是月、幕府、秀忠ノ女和子入內ノ爲メニ、女御御殿ヲ造營セントスル條ニ、近衞信尋ノ第ニ移リ給フコト、本年三月十日ノ條ニ見ユ、

六日、乙卯、禁中、火ヲ失ス、

山科言緒御移徙ノ御祝儀ヲ獻ズ

清所

慶長十七年以來貿易絶ユ

貿易ノ再興

我ガ商船中不義ノ輩アラバ我ガ國ニ刑ニ處スベシ

〔言緒卿記〕十二月六日、乙卯、天晴、

一禁中清所、戌刻ニ既ニ欲燒、漸鎭火了云々、

〔孝亮宿禰日次記〕五　十二月六日、乙卯、晴、禁裏清所欲出火、早打滅云々、

十七日、丙寅角倉玄之、書ヲ安南國ニ贈リテ、貿易ノ中絶ヲ謝シ、再ビ商船ヲ發遣スルコトヲ告グ、

〔角倉文書〕〇山城

日本國回易大使司貞順（角倉玄之）謹啓書安南國執事大人足下、（未知官爵姓名、故如是、）我商船通貴邦者、自癸卯歲（慶長八年）至壬（辛カ）亥歲、比年相繼無絶、壬子歲（慶長十七年）、自有事於國以往、不通我商船、雖然有邊鄙貧賈、假名于交易、至于（衍）交易至（カ）貴邦者矣、不齎持此印信者、猥勿容交易矣、今依善隣國寶之義、脩舊好、亦非二國之大幸乎、然則我邦之民、亦貴邦之民也、何不愛愍乎、若我商船中有不義之族者、具載回書、抵我國刑、海洋雖杳、厚隣好、何殊肺肝、不腆土宜、別附艚長、領納、爲國民自重、不宣、

元和伍己未年冬拾涍日　回易大使司　貞順〇コノ文書ハ草案ニカ、ル、

〔鷹見文書〕一〇下總

自今毎歲商船ヲ遣スベシ

〔慶長十七年（朱書）より通船中絶之處、元和九年（五カ）ニ至、如元相始候節、差遣候添書寫　三枚之内〕〇ハ弘定五年五月附、安南ノ國書ニカ、ル、二通略ス、一通ハ角倉文書ニ同ジク、一通

日本國回易大使司貞順、謹致書安南國署衞事駙馬都尉廣富候（後）足下、海洋迢迢、久阻音耗雅履清勝否、癸卯（慶長八年）年、自通我商船以往、遞年無絶者、貴國治教休明、懷遠人之情可見矣、殊自己酉（同十四年）年至庚戌（同十五年）年、我商人漂游貴國之時、足下惇恤我商人、慈仁之心、何人不懷焉乎、〇京都ノ商人角倉庄左衞門等、安南ノ救護ヲ受ケテ歸國スルコト、慶長十五年六月十二日ノ條ニ見ユ、自壬子（同十七年）年以往、不發商船者、爲有事于國也、更非薄隣交、今亦依舊好、令此商船齎持印信、以之欲二國隣好信矣、若外鄙僞船、無此書信者、勿許交易、自今毎歲我商船至貴國、而厚二國交易之利者、世世非兩國之利乎、我商船有不敬之科者、具載回書、抵國刑、不腆弊產、別附艚長、時屬玄冬、爲國自嗇、不備、

元和伍年己未年冬拾貳月拾涍日　回易大使司　貞順

〇安南國、物ヲ角倉玄之ニ贈ルコト、元和三年年末雜載、貿易ノ條ニ、安南國、玄之ノ商船ニ託シテ、書ヲ幕府ニ贈ルコト及ビ玄之、書ヲ安南國ニ贈ルコト、寛永二年正月是月ノ條ニ見ユ、

十九日、戊辰美濃苗木城主遠山友政卒ス、子秀友嗣グ、

世系

〔東武實錄〕六　是月(十二月)、遠山久兵衛友政卒ス、六十四歳、

〔東武實錄〕七上　是月(元和六年五月)遠山刑部少輔秀友、父久兵衛友政ヵ遺領、濃州苗木采地一萬五百石餘ヲ賜ル、

〔寛政重修諸家譜〕七百八十六　遠山

友忠　久兵衛、

友政　三郎兵衛、久兵衛、

秀友　刑部、刑部少輔、　母ハ某氏、

女子　母ハ七郎右衛門某ノ女、尾張家の臣生駒因幡守利豐ノ妻、

女子　母ハ上ノ おおかし、尾張家ハ臣山村七郎右衛門良安ノ妻、

女子　母ハ上にお彫し、尾張國熱田の神職加藤圖書助順正ノ妻、

女子　母は某氏、家臣遠山万五郎某ノ妻、

女子　母ハ上ノ ハれなし、五十川氏の妻、

女子　母ハ上ノ おなし、原氏ノ妻、

友政　母ハ信長ハ姪女、弘治二年、美濃國飯場ノ生る、父友忠とともノ阿手羅の城ノ住し、祖父友勝死ハのゝち、苗木城ノうつり、右府ノ屬ハ、天正

履歴

織田信長ニ屬ス

家康ニ仕フ

館林ニ住ス

關原役ノ戰功

十一年、父とゝもに濱松ノいとして、東照宮ノはたらへたてまつる、十八年、小田原落城ハゝち、仰ノよりて、榊原式部大輔康政に屬し、上野國館林ノ住ハ、慶長五年、上杉景勝御征伐として、下野國小山に御進發あり、石田三成もまゝ叛逆を企ハ、このとき ハノ ノさりて、石河備前守貞清ハ、信濃國木曾ハ代官たり、關治兵衛某ハ苗木ノ城を守る、田丸中務具直ノ岩村の城ノあり、各三成ノ屬せんハ、東照宮小山にをいて、友政をめされ、美濃國をよゑ木曾路ハ地理をたつまさせたまふノより、詳ノ言上をしかハ、御銃炮をよひ玉藥、黄金等をたまハり、木曾及ノ苗木、岩村の城をせめ、まゝ親族山村甚兵衛良勝、千村平右衛門良重、馬場平左衛門某等を率ゐて、所々の逆徒を追討し、美濃國ノ至り、中津川、駒場等を放火ハ、このとき關治兵衛某和をこふて、苗木の城をゆゑし、田丸中務具直ハ、三成敗亡の事を聞て、下人福本三之丞某をして、長刀一柄を贈り、和を請しむ、ハの ところノ、遠山民部少輔利景等馳くハゝて、急ノこれを攻しかハ、岩村の城ハゐノおちいる、ときノ台德院殿、信濃國上田より關原に御進發あるハところ、木曾路の諸民悉く深山ノのり、旅亭人なくして、士卒粮食

本領苗木城ヲ知行ス　大坂役ノ戰功

の便を失ふ、友政所々ゐ制札をたてゝ、離散の民をして、各その宅ゐかへらしむ、ころとゐ、粮米、大豆をよゐ御馬の沓等を獻し、まゐ同國大井ゐ至りて、馬をたてまつりしかゐ、すゑゐち其馬ゐゐらせゐまひて、大坂ゐ著御あゐ、後この軍忠を御感ありゐ、本領を賜ひ、美濃國惠那、賀茂兩郡れ内ゐをいて、一万五百石餘を領し、苗木城に住ゐ、十九年、大坂の役ゐゐ、伊勢國桑名れ城を守衛し、元和元年ゐ御陣ゐゐ松平下總守忠明ゐ隊に屬して、從ひたてまつり、友政ゐ手に首六級を得たゐ、五年十二月十九日、苗木ゐをいて卒ゐ、年六十四、法名傳公、今ゐ呈譜ゐ、心月宗傳雲林寺と號ゐといふ、彼地の雲林寺に葬る、後代々葬地とゐ、これ友政ゐかゐて開基せしところなり、室ゐ平井七郎右衛門某○下ノ苗木濃遠山家譜ニ作ル、ゐ女、

法名

墓地

秀友　元和六年五月、遺領を繼、

〔美濃苗木遠山家譜〕　友政久兵衛妻美濃

久兵衛友忠二男、初三郎兵衛、生國美濃、母織田信長姪、美濃國高山城主平井七郎左衛門某女、織田信長ヨリ信州木曾筋押ノ爲メ、父友忠、兄友重ト父子三人ヲシテ、美濃國阿手羅ノ城ニ住セシム、其時、甲州勢、彼ノ城ヲ攻擊スト雖ゐ、固ク守テ無恙、此時友重血戰シ、終討死ス、十九歳、城不陷シテ、敵退去ス、祖父友勝苗木城ニ於テ病死ス、而シテ後、信長ヨリ祖父ノ遺城ヲ賜リ、父友忠ト共ニ移住ス、信長、本能寺ニ於テ、明智光秀ノ爲ニ自盡ノ后、豐臣秀吉ヨリ、森武藏守長可ノ麾下ニ屬ス可キ旨令アレゐ不應、故ニ長可ト交戰スルヿ數回、終不降、然ルニ四隣皆降ル、依テ獨リ城ヲ守ル能ハス、和ヲ乞ヒ、城ヲ武藏守ニ渡シ、去テ直ニ遠州濱松ニ至リ、德川家康ニ隨從ス、友忠ハ菅沼小大膳ノ家ニ在テ病死ス、友政ハ濱松ヨリ駿府ニ隨從シ、小田原ノ役、家康ノ密旨ヲ受テ、伊井直政ニ屬ス、慶長五庚子年、上杉景勝征伐ノ時、下野小山陣中ニテ、上方蜂起ノ注進アルニ依テ、家康ヨリ友政江、濃州及ヒ木曾筋ノ儀尋問セラル、然ルニ石河備前ハ信州木曾筋代官、關治兵衛ハ濃州苗木ノ城ニ居住シ、田丸中務ハ同國巖邑ノ城ニ居住ス、各石田三成ニ與力スルノ旨、巨細ニ演述ニ及フノ處、鐵炮三十挺、並彈藥及ヒ黃金ヲ賜ヒ、速ニ木曾筋エ馳向ヒ、秀忠將軍關ケ原出陣ノ前途ヲ開ク可ク旨令アリ、茲ニ於テ、直ニ發シテ、木曾筋ノ兇徒ヲ打攘ヒ、尋テ苗木、巖邑ノ兩城ヲ陷レ、秀忠ヲ濃州大井驛ニ迎エ、驥馬並ニ米、大豆等ヲ獻ス、關ケ原ノ戰ヒ終テ後、勸賞ヲ行レ、本領ヲ賜ハツテ、再ヒ美濃國苗木城壹万五百石餘ヲ領ス、同十九年甲寅年、大坂ノ役、勢州桑名城番勤之、元

和元乙卯年、大坂ノ役、松平下總守忠明ニ屬シ、大和口ニ向ヒ、玉手山ニ戰ヒ、龜井口ニ於テ、自ラ敵ニ當リ、傷ヲ被ル、同五己未年十二月十九日、於苗木卒、六十四歲、法名雲林寺心月宗傳、美濃國苗木城下雲林寺ニ葬ス、秀友初刑部、生國美濃、母家女、慶長十九甲寅年、秀忠將軍ニ初テ謁ス、六歲、元和六庚申年五月、亡父友政ノ遺領ヲ賜フ、

○友政、家康ノ命ヲ承ケ、美濃、信濃木曾ヲ徇フルコト、慶長五年七月二十八日ノ條ニ、山村良勝等ヲ援ケテ、信濃ヲ徇フルコト、同年八月二十一日ノ條ニ、美濃岩村城ヲ攻ムルコト、同年九月十六日ノ條ニ、松平忠明ニ屬シ、大坂役ニ出陣スルコト、元和元年五月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔新撰美濃志〕二十二惠奈郡　苗木　雲林寺ハ元龍山ト號シ、臨濟宗京都妙心寺の末寺、領主遠山家の菩提所なり、

出羽米澤城主上杉景勝ノ老臣直江重光、兼續、江戸ニ卒ス、

〔景勝一代略記〕一　一元和五○中略十二月十九日、直江山城守逝去也、

〔上杉年譜〕四十九景勝二十九　同年（元和五年）冬十二月十九日、江府ニ於テ、直江山城守兼（承光）續卒ス、享齡六十歲、去ル五月初ヨリ氣宇常ナラス、然レ𪜈御上洛ノ供奉シ、○上杉景勝先發上京スルコト、五月八日、秀忠上洛ノ條ニ見ユ、日々ニ重シ、公殊ニ不便ニ思召レ、時ノ良醫ヲ招キ、鍼藥怠ルコトナシ、然レ𪜈醫術効驗ナク、終ニ其命ヲ終フ、幼齡ヨリ公ニ近侍スレハ、猶以テ愁嘆勝テ計ルヘカラス、則御使ヲ以テ、香奠銀子五十枚ヲ賜フ、山城守、童名ハ與六、樋口摠右衞門カ嫡男ナリ、樋口ハ政景（長尾景勝ノ父）ノ從臣ユヘ、兼續幼ヨリ近侍、寵遇モ他ニ殊ナリ、天正十年十月朔日、○本書、天正十年十月朔日トナスハ誤ナラン、直江與兵衞信綱、毛利名左衞門カ爲ニ横死シ、嗣子ナキニ付テ、兼續ヲシテ、信綱カ妻ニ嫁セシメ、直江一跡ヲ賜リ、大家トナサシメ、終ニ國柄ヲ執テ、武名ヲ天下ニ洋溢ス、故ニ秀吉公、家康公、秀忠公ニ拜謁スル事數次、恩遇モ亦諸家ノ臣ニ超越ス、人皆此ヲ惜ム、家嗣（景明）、兼續ニ先立テ卒スレハ、公ニモ別テ憐愍シ玉フ、○景明ノコト下ニ見ユ、

〔上杉家記〕三十六景勝公十二　十二月十九日、從五位下直江重光、病テ江戸ノ邸ニ沒ス、年六十、達三全智ト法諡ス、後英貌院ト追諡ス、遺骨ヲ高野山ニ納メ、更ニ墓石ヲ米澤林泉寺ニ建ツ、幕府、賻銀五十枚ヲ賜フ、重光、文武錬達シ、最

履歷

直江氏ヲ冒ス

國柄ヲ執ル

法名高野山ニ葬リ墓石ヲ米澤林泉寺ニ建ツ、幕府ヨリ

傳ヲ枚ト説ノ米澤ノ城築ヲ改ヲ開ス銀五十賜フ市田野墾

モ治方ニ深シ、庚子（慶長五年）役後、封土減削、上下困乏ス、重光、城市ヲ改築シ、田野ヲ墾開シ、文ヲ起シ、武ヲ磨シ、屹然ト東北ノ雄鎮タルヲ失ハサルモノ、其功居多ナリ、男景明、先ニ沒ス、因テ重光ノ妻直江氏ニ給スルニ三千石ヲ以テス、直江氏亦才幹アリ、上下、後室ト稱シテ、名イハス、（○直江氏ノコト、下ニ見ユ、）重光、庚子（慶長五年）ノ役後、專ラ本多正信父子、土井利勝ニ結託シ、務テ幕府ニ承奉ス、而テ欝勃ノ氣時ニ詩賦ニ見ハル、雪夜圍爐ノ詩ニ曰、（異本上杉系圖、景勝公御年譜、直江系圖、米澤日記、三公外史、招靈棚牌名、林泉寺過去帳、東源寺牌名、千坂文書、清淨心院記錄、○詩略ス、下ノ林泉寺文書ニ同ジ、）

按ニ、奥羽永慶軍記、重光、景勝公ノ男定勝公ニ手刄セラルヽヲ記ス、（○奥羽永慶軍記所見ナシ、）世ノ奇怪ヲ好ムモノ、往々筆シテ之ヲ傳フ、（誤）忘誕甚矣ト云フヘシ、

〔上杉家中諸士略系譜〕（九ノ之部）

直江

世系

與兵衛信綱（始神五郎、實上田將士長尾平太景貞男、）

山城守兼續（始與六、後重光、實上田將士樋口摠右衞門兼豐男「（朱書）兼豐後ニ伊豫豐臣、半ヨリ姓ヲ改ムヨシ、慶長十六年四月廿七日、秩三萬石ト御書上ナリ」守ト改、從五位下豐臣、）

天正十年十月、父信綱之家督、同十一年ヨリ山城守ニ改ム、慶長九年八月、家康公之老臣本多佐渡守正信二男左平次、故アリ、米澤エ浪人、于時兼續嗣子無之、御内意ヲ伺ヒ、養娘ニ取合、養子トス、下ニ詳ナリ、但養娘ハ大國但馬守娘也、元和五年十二月九日、於江府、歳六十二ニシテ卒ス、（○下略、重光室ノコトニカヽル、下ニ收ム、）

大和守勝吉（始左平次、實本多佐渡守正信二男、）

慶長九午八月、兼續養子トナリ、秩一万石賜之、父子勤、于時勝之御一字ヲ拜領、大和守勝吉ト改ム、同十四年九月、婚禮式アリ、同十六年五月、御暇ヲ願ヒ、江戸ニ歸ル、翌十七年之春、加州前田利家（常）ニ屬ス、秋、三万石賜之、本多安房守政重ト改メ、今ハ五万石ニナル、

但安房守妻（大國但馬守娘、兼續姪ヲ養女トシテ、勝吉ニ嫁ス、）モ慶長十七年五月十七日、加州ニ赴ク、

平八（直子）景明　慶長三年ニ生、元和元年七月十二日卒、歳十八

但慶長十四年十二月二日、江戸ニテ婚禮、妻ハ江州膳所城主戸田左門氏鉄娘ナリ、（氏鉄子孫、今ハ濃州安八郡大垣之城主、十万石、戸田采女正氏教之先祖ナリ、（朱書）○上杉重房以來同定勝以前系譜書上ニハ、景明ニカケアキラト傍訓セリ、）

○重光、上杉景勝ヲ擁立スルコト、天正六年三月十三日、上杉輝虎卒スル條ニ、景勝ノ命ニ依リテ、直江信綱ノ家ヲ嗣グコト、同九年九月一日ノ條ニ、秀吉ヨリ新發田、伊十公野ノ戰功ヲ賞セラルヽコト、同十五年

十月二十八日ノ條ニ、景勝、松崎城（米澤城）三十萬石ヲ領スルコト、慶長三年正月十日、秀吉、景勝ヲ會津ニ封ズル條ニ、景勝ニ勸メテ、藤田信吉ヲ誅セントスルコト、同五年三月是月ノ條ニ、家康ノ、景勝ノ非擧ヲ條記シ、入京陳謝ヲ勸ムルニ答フルコト、同年四月十四日及ビ五月三日ノ條ニ、最上義光ヲ討タントスルコト、同年八月十八日ノ條ニ、山形ニ入リ、畑谷城ヲ陷レ、長谷堂城ヲ圍ムコト、同年九月十三日ノ條ニ、關原ノ敗ヲ聞キ、最上ノ兵ヲ撤スルコト、同年十月一日ノ條ニ、兵ヲ二本松ニ出スコト、同月十二日ノ條ニ、景勝ニ從ヒ、入京スルコト、同六年七月二十四日ノ條ニ、玄興ヨリ集九自筆ノ漢書ヲ贈ラルヽコト、同九年五月二十日、玄興寂スル條ニ、活字ヲ以テ文選ヲ印行スルコト、同十二年三月八日ノ條（第十二編之十三所收補遺）ニ、本多正信ノ第二子政重ヲ女婿トナスコト及ビ政重、直江氏ヲ去リ、前田利光ニ事フルコト、同十六年七月是月ノ條（第十二編之一所收補遺）ニ、大坂役ニ出陣スルコト、同十九年十一月七日、秀忠、永原ニ至ル條、同月二十六日、景勝、鳴野ニ陣シ、進ミテ城柵ニ逼ル條、同年十二月十二日、家康、船場、天滿、備前嶋等ノ諸營ヲ巡見スル條、元和元年五月八日、豐臣秀頼等、大坂城中ニ自殺スル條ニ、家康ヨリ律令、群書治要ノ異本ノコトヲ尋ネラルヽコト、同二年正月十九日、家康、金地院崇傳等ニ命ジ、群書治要ヲ印行セシムル條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕（ナ之部）

直江重光

○蓼沼文書（羽前）

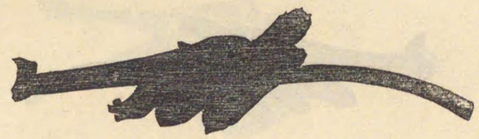
天正十年五月廿五日附蓼沼藤七宛書狀

○清淨光寺文書（相模）

天正十七年九月十一日附過書

○志賀槇太郎氏所藏文書（一前）

文祿五年九月十六日附丸田周防守宛書狀



○篠澤文書（信濃）

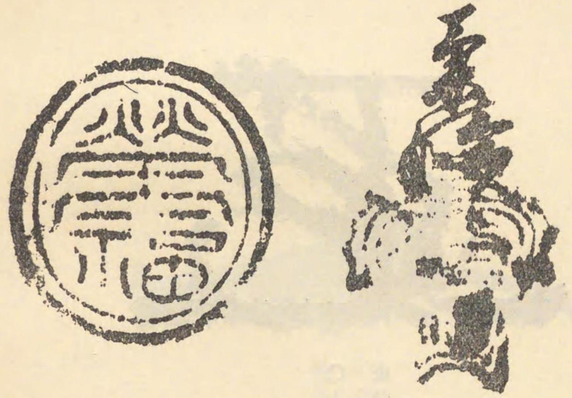
慶長四年八月十四日附若松奉行衆宛手形

○上杉文書（羽前）

慶長貳拾年正月朔日附歳德神祈願文

元和五年十二月十九日

〔印章彙纂〕ナ之部　直江重光



○伊佐早信氏所藏文書（羽前）
文祿三年九月十三日附本村親盛宛知行宛行狀

○同上
六月六日附本村監物丞宛知行宛行狀

元和五年十二月十九日

〔集古十種〕四肖像古畫　直江兼續像

高野山龍光院瑜祇塔壁畫

○高野山龍光院瑜祇塔ノ壁畫ハ、文化六年七月ノ火災ニ燒失セルヲ以テ、集古十種ニ據リテ、茲ニ掲グ、

〔上杉家記〕二十七 岩井文書

敬白天罰起請文

通稱及ビ實名

○本文略ス、

天正十年三月十三日

直江與六
兼續 花押 血判

岩井民部少輔殿（信能）

與六兼續

〔上杉家文書〕

○本文略ス、天正十一年二月二十日ノ條ニ收ム、

二月廿日（天正十二年）

宜順（花押）

上條入道
宜順

山城守

直江山城守殿（兼續）○山城守ノ稱ハ、コノ書狀ヲ初見トス、

（崇裏書）「口宣案」

上卿 水無瀨中納言

天正十六年八月十七日　宣旨

從五位下豐臣兼續

宜令任山城守、

藏人頭左近衛權中將藤原（中山）慶親奉

〔上杉編年文書〕三十二

○本文略ス、慶長十五年十二月二十五日、秀忠、上杉景勝ノ邸ニ臨ム條ニ收ム、

山城守
重光花押

（朱書）「慶長十五」七月十三日

澁谷彌兵衛殿
千坂伊豆守殿

○重光ノ名ハ、コノ書狀ヲ初見トス、

〔上杉家將士列傳〕中

直江山城守兼續

木曾殿四天王樋口次郎兼光ゝ末也、天正五年丁丑五月、直江大和守實綱、喧咤ゝて相果、男子無之ゝ付、越後之與板城主樋口與三左衛門（兼豊）一子與六郎、其比ゝ謙信出頭の小性成を、直江與六ゝ改、大和守聟養子被申付、實綱ゝ一跡相續ゝ、○本書、天正五年、直江實綱ノ跡ヲ相續ストナスハ誤ナラン、後山城守兼續ゝ成、景勝、定勝代迄、○本

重光一人ニテ仕置ヲ行フ

書、兼續定勝代マデ國政ヲ執ルトナスハ誤ナラン、

分別者

知行ノ大半ヲ傍輩ニ配分ストノ說

軀幹壯大ニシテ辯舌爽ナリ

傍の人を拂、刀を傍ゝ置、百姓町人ゝ白砂へ呼、對決させ、侍をゝ座上へ呼て、様子を尋、何事候ても、大方當座さたなゝ賞罰を行フ、家中の訴訟も、手形證文の判形も、兼續一人ゝて事濟も故、たゝ行ゝ、直江學文多智、分別者ゆへ、順路ゝる事多し、元より謙信の傍ゝて生立、武功も重るゆへ、世の覺へ、人の用ひも厚く、秀吉公へも出頭し、大御所様、秀忠様へも出頭也、〇下略、重光貨幣ヲ手ニセザリシコトニカヽル、下ノ武邊咄聞書ニ同ジ、

傳曰、兼續幼少の時ゝ、謙信姉景勝母公仙桃院殿ゝ、小屋從ゝる奉公仕候由、會津にてゝ三十二万石を領も、米澤へ所替ゝ付、景勝ゝ六万石宛賜る、〇本書、六万石ヲ領ストアルハ誤ナラン、次ノ郡村誌、志士清談マタ同ジ、然るを我身一万石を領し、五万石をゝ諸傍輩ゝ配分、一万石の私領を、又五千石分て、家中へ與へ、我身五千石ゝりしを、景勝より新田を開ゝあゝへる、又一万石ゝゝり、死去、法名英貌院達三全智居士、

〔郡村誌〕山形縣南置賜郡御膳部町外三十四ケ町村　墳墓　直江他屋　今ノ他屋町是也、從四位下侍從直江山城守兼續ハ、〇本書、四位侍從ト上杉景勝ノ家老ニテ、軀幹舌爽ナリトナスハ誤ナラン、

秀吉重光ヲ重ンズ

秀吉ヨリ豐臣姓ヲ授ケラル

米澤三十萬石ヲ領ス

石田三成ト共ニ家康ヲ除カントス

壯大、智勇兼備、辯舌爽カニシテ、天下無双ノ豪傑也、太閤將サニ興ラントスルノ初、自ラ以爲ラク、今天下强大第一ノ大名ハ、上杉景勝ニシテ、天下智勇第一ノ人傑ハ、直江兼續ニ如クハナシ、上杉家ト和シ、兩人ヲ手ニ屬ケハ、天下ノ大小名ハ、招カスシテ、皆風靡スヘシト、天正十三年五月、秀吉越中ノ役ヨリ、直ニ獨石田三成ト、自ラ使者ト稱シテ、越後ニ來ル、景勝モ亦、獨兼續ト秀吉ヲ見ル、秀吉卑辭厚禮、深ク相結締ス、景勝ニ上洛ヲ勸メ、其送迎欵待ノ丁寧ナル、殆ント媚悅ヲ獻スト云テ可也、〇本書、天正十三年、秀吉、景勝ヲ訪フトナスハ誤ナラン、於是景勝ヲ從三位中納言ニ、兼續ヲ從四位侍從ニ敍任ス、後兼續ニ豐臣姓ヲ賜フ、然レ𪜈畏ルヽ所ハ景勝ナルヲ以テ、後遂ニ術ヲ以テ、越後ヲ轉シ、會津ヘ移シ、百貳拾万石トナシ、兼續ニハ米澤ヲ賜ヒ、伊達信夫ヲ合セテ、三拾万石ニ食マシム、是年慶長二年也、〇本書、慶長二年ノコト、ナスハ誤ナラン、三年、秀吉大病ニ罹リ、嗣子秀頼幼弱ナルヲ以テ、景勝及德川（家康）、前田（利家）、毛利（輝元）、浮田（宇喜多秀家）ヲ五大老トシ、秀頼ヲ輔佐シ、軍國ノ事ヲ處置セシム、既ニシテ秀吉薨ス、家康威權獨熾シテ、天下德川ニ歸スルノ勢アリ、石田三成大ニ之ヲ憂ヒ、密ニ兼續ニ勸ムルニ、天下ノ大小名、家康ノ擅權ヲ惡ミ、皆共ニ上杉公ヲ推戴スルヲ願フヲ以テシ、其連

米澤ノ屋敷及ビ屋敷下

判狀ヲ示シ、遂ニ兵ヲ擧クルヲ約ス、關ケ原ノ敗ニ及テ、天下德川ニ定リ、景勝削封セラレ、三拾万石トナリ、米澤城ニ移ル、兼續ハ六万石トナル、兼續城ヲ避ケ、今南堀端畠山融山カ宅地花岡町迄一圓ニ屋敷トナシ、之ニ住居シ、他屋町ハ下屋敷ニシテ、他屋ヲ置キシ處也、上杉家ハ元三越數國ヲ領シ、無高ノ大國ヨリ百貳拾万石ニ減シ、會津ヘ移サレ、又減シテ三拾万石トナリ、米澤ヘ移サレタレハ、用度不足ニシテ、國ヲ立テ難キハ云ニ及(不脫カ)、慕來ル譜代ノ臣モ扶持スヘカラサルノミナラス、誠ニ狹小ナル米澤ノ土地ヘ、驟カニ數万ノ士族入込メハ、家ノ住スヘキナク、飯ノ食フヘキ無キニ、兼續誠忠ニシテ、經濟ノ大才アリ、市街端々ヲ始メ、南原、在家、山上、花澤等荒蕪ノ地ヘ掘立小屋ヲ作リ、之ニ住シテ開拓ニ從事セシメ、己レカ祿六万石ノ内五万石ヲ公ニ獻シ、士族ノ扶助ニ供シ、後又一万石ノ内五千石ヲ獻シタリ、内證ニテハ斯ク身ヲ窶シタレモ、公邊向ハ、從四位、侍從、六万石、大廣間詰ノ大名ニシテ、江戸ニハ鱗屋敷ヲ有シ、參勤登城シ、(本書、大廣間詰ノ大名ニシテ、鱗屋敷ヲ有シ、參勤ストナスハ誤ナラン、)毎度將軍家ヨリ時服ヲ賜リ、懇切ニ遇セラレ、老中始メ譜代大名等ハ尤モ恭敬ヲ極ム、關原ノ從(後カ)、兼續、家康ニ謁シタル時、家康笑テ曰、日本ノ天下ハ

經濟アリテ才ノ澤ノ開拓ノ大ス知行ノ外ヲ牛ヲ返却シテ士ヲ扶助シテトヲ

鱗屋敷

目前ノ利ヲ謀ラズシテ萬ノ世ノ公益ヲ期ス

廢藩後ノ舊藩士家產ヲ失ハサル者ハ皆直江ノ遺澤ナリ

兩人ノ手ニアリシカ、既ニ吾カ手ニ落ツレハ、子吾ニ輸(マヽ)リト、卒スルニ及テ、將軍家ヨリ銀五十枚ヲ賜フ、兼一(遺脫カ)心公ニ奉シ、國ヲ富マシ、兵ヲ强フシ、民ヲ安ンスルヲ以テ、己カ任トス、其事ヲ爲ス、苟モ目前ノ利ヲ謀ラス、皆萬世ノ公益ヲ期ス、荒蕪ヲ開拓セシムル、始テ種ルニハ、必午房ヲ以テス、其開墾深キヲ期スル也、今原々ノ住士、廢藩ニ及テ、獨家產ヲ失ハサル者ハ、皆直江ノ遺澤也、能ク地味地質ヲ辨シ、民ニ樹藝ヲ教ユ、白旗南ノ松原ハ、直江ノ樹ヘシムル所也、笹野ノ頽山ハ、元美ナル桂林也、兼續遺誡シテ曰、一度ニ多ク伐木スル勿レト、後人其言ヲ用ヒス、終ニ頽雪山トナリ、今ヤ一樹ヲ生長セスト云フ、米澤城郭、市街ノ區畫、後世軍國ノ豫備至ラサル所ナシ、殊ニ水利ノ術ニ長シ、城下市街ノ飲水ハ、遠ク松川ノ水ヲ、李山ヨリ堰揚シテ、城中ヘ引入レ、市街諸町川水ノ達セサル所ナク、戶々用水ノ便ヲ得タリ、其堰口ヘ据ヘタル要石ヲ猿尾留ト云フ、何ノ義ナルヲ知ラサレモ、數百年ヲ經、屢々洪水アリト雖モ、少モ動カス、堰ノ破レサルハ、天工ニ勝ル者ト云ヘシ、加之置賜全郡屋代鄕ヨリ、小國、中津川、下長井ニ至ル迄ノ田水、直江カ引ク所ノモノ多シト云フ、人間ノ一生ニ報ヒ盡スヘカラサルモノハ、父母ノ恩ト水ノ

米澤城及ビ市街ヲ設計ス

水利ノ術ニ長ズ

松川ノ水ヲ城中ニ引ク

置賜郡ノ用水ノ

高野山ノ諸寺院ニ川水ヲ通ズ

恩也ト云ヘハ、直江ノ遺德豈大ナラスヤ、紀州高野山ノ諸寺院ヘ川水ヲ通シタルモ直江ニテ、高野山ニテハ、直江ヲ水神ニ祭レリト云、○紀伊國續風土記等所見ナシ、一代ノ武功ハ云ニ及ハス、米澤ヘ遺セシ公益事業モ大層ニテ、一小冊子ノ直江カ能ク悉クス所ニアラス、元和五年十二月十九日、江戸鱗邸ニ於テ卒ス、年六十、英貌院殿達三全知居士ト謚ス、米澤林泉寺ニ葬ル、實子平八郎（景明）病死シ、子ナキヲ以テ、家絶ス、其家財ヲ藩ニ沒ス、武器書籍ノ外、他器ナシト云フ、下屋敷モ同ク沒シ、他屋ヲ毀ハシ、數十戸ノ士屋敷ニ割、直江ノ他屋タルヲ以テ、直ニ町名トナスト云フ、人間ノ道、忠孝ヨリ大ナルハナシ、君ノ爲ニ身ヲ致ス、之ヲ忠ト云フ、公家ノ事、知テ爲サヽルナキ、之ヲ忠ト云フ、兼續ノ君ニ事フルヤ、心ヲ勞シ、身ヲ苦シメ、己レノ祿ヲ奉シ、公家人民ノ爲ニ、終身公益事業ヲ謀リ、未タ嘗テ一タヒモ英華安佚ノ事ヲナサス、豈之ヲ精忠ト云ハサルヲ得ンヤ、勝テハ官軍、負ケレハ賊徒ナルハ、戰爭ノ通義ナレハ、成敗存亡ヲ以テ、英雄ヲ議スヘカラス、佐竹義宣カ和ヲ德川氏ニ請フニ及テ、家康曰、天下ヲ爭フハ英雄ノ常也、景勝ノ如キハ少モ惡ムニ及ハス、首鼠兩端ナル義宣ノ如キハ、誠ニ鄙ムヘシト、明眼ト云フヘシ、米澤ノ士民、今ニ

子ナクシテ家絶ユ

家財ヲ藩ニ沒ス

米澤ノ士民重光ヲ以テ奸臣ト爲スモノアリ

至迄、各兼續ノ遺澤ヲ蒙テ、之ヲ知ラス、關ケ原ノ敗ヲ以テ、石田ト同ク天下ノ奸臣ト思フ者アリ、豈誤（ナ脫カ）ラスヤ、豈冤ナラスヤ、

景勝ヨリ新田一萬石ヲ與ヘラル

家康秀忠ニ優遇セラル

〔志士清談〕一直江山城守兼續ハ、幼名樋口與六郎、越後與板ノ城主樋口與三左衞門（慶吉）カ子ニメ、其先樋口兼光ニ出タリ、上杉ノ家老直江大和守實綱、○本書、實綱ノコトヽナスハ誤ナラン、森名右衞門ニ擊殺セラレ、男子ナキニ依テ、兼續ヲ女壻ニメ、名跡トス、○本書、女壻トナスハ誤ナラン、上杉家棟梁ノ臣ニメ、武功碩大也景勝越後ヨリ奥州ニ移シ封セラレ、兼續ハ米澤三十二万石ヲ領知ス、關原一戰ノ後、景勝會津ヲ削ラレ、米澤三十二万石ニ封セラレシカハ、兼續ニ六万石與ラレケルヲ、五万石ハ家中ノ士ニ分與テ、一万石ヲ領ス、又五千石分テ、家中小身ノ輩ニ與テ、其身ハ五千石ヲ受タリ、後景勝、新田ヲ墾テ、一万石ヲ賜ル、○重光知行ノコトヽマタ校合雜記ニ見ユ、兼續江戸、駿府ニ至レハ、兩將軍御懇意、御暇ノ節ハ、時服等頂戴ス、兼續壯大ノ男、辨舌ヨク、御老中ニ對メモ、サノミ頭ヲ下ケ、手ヲ不束、アツハレ武功ノ士ト見ユ、死後、將軍家ヨリ御香奠トメ、白銀ヲ下シ賜リヌ、小早川左衞門佐隆景、堀監物直政、直江山城守兼續、万事調練ノ武士、天下執柄ノ器量ト、秀吉公モ御稱美ノ者ナリ、

秀吉ノ評

〔上杉年譜〕四十六 景勝二十六　同年（慶長十六年）夏四月二十六日、土井大炊頭（利勝）ヨリ、御當家秩祿ノ高、幷ニ諸大夫ノ員數御尋アリ、直江山城守兼續、本庄出羽守克長從五位下タリ、是來年禁裏仙洞四圍ニ鹽築地修セラルヘキタメナリ、其書云、

景勝知行高之目錄

高合三拾萬石　景勝拜領分、

右之內諸大夫給分、

一三萬石者、　直江山城守

一二萬石者、　本庄出羽守

慶長十六年四月廿七日　直江山城守

本多佐渡（正信）守殿

〔志賀槇太郎氏所藏文書〕二 史徵墨寶

爲歲暮之祝儀、吳服壹重、遠路到來、祝著候、猶片桐市正（且元）可申候、謹言、

極月十六日　黒印（秀頼）

直江山城守とのへ

〔歷代古案〕七

爲端午之祝儀、單物一重到來、悅思食候也、

五月五日　家康御黒印

直江山城守とのへ

〔歷代古案〕三 近藤右兵衛所持之

同　爲歲暮之祝詞、小袖一重到來、喜思食候、尙本多佐渡（正信）守可申候也、

十二月廿二日　御黒印

直江山城守とのへ

〔本間光正氏所藏文書〕○羽前

猶々、□も御□□□候まゝ、御こゝろやすかるへく候、

佐州御ふうを（ふカ）の御祝ん□□いやましこて候、お祝ひさまて申候へく候、

一書申入候、仍而此方相ゝる義これおく、將軍樣方々御成、大御所樣御鷹野ニ御いておされ候、ゑかしかゝら、二三日いせん御ゝへりおされ候、又□御いてのよし、佐州御申候、又大御所樣ゟ御たゝの鷹御拜領之內壹、其方へ被遣候、各常者こあつらゑ候て越申候、恐々謹言、

元和五年十二月十九日

極月三日　　山城守
大和守殿□　　兼續（花押）

〔上杉年譜〕四十九景勝二十九　同年（元和二年）冬十一月十三日、幕下ヨリ山城守ニ御鷹ノ鴈一羽拜領ス、千坂飛脚ヲ以テ差下ス、公御喜色アリ、則土井大炊頭ヘ飛札ヲ以テ御禮アリ、山城守ハ別シテ使者ヲ上セ、有難キ旨趣、大炊頭マテ謝シ奉ル、

秀忠ヨリ鷹ノ鴈ヲ贈ラル

〔米澤地名選〕廟墓部　直江侍從山城守兼續墓　○中略、墓地ノコト等ニカヽル、下ニ收ム、山城守卒する時、秀忠公より賻を賜ふこと、銀三百枚あり、○下略

秀忠ヨリ賻銀三百枚ヲ贈ラルトノ說

〔杉原謙氏所藏文書〕

一書申入候、
一水常（水谷常陸親憲）身上摺切、來年公儀役義難成由、兩度被申越候條、彼知行□朝夕賄以下、悉穿鑿候而、大方顯帳面、水常所へ遣申候、吾々申所於同心者、自當年、彼身上知行共ニ、請取可申付由、存分ニ候、其方幸程近候間、常陸對談候而、樣子被相極、米錢其方ゟ淺見所へ渡、賄方可被仰付候、但一月切ニ米錢被相渡、算用一月切ニ可被極事、
一水常所へ遣候帳面ニ、少々よけいを相積候、本より淺見おと才覺ニも成事を、代物ニゆうしゝる事も候、らやうの義も、其許被入念、水常身上相積（槽）候樣ニ憑入候、
一知行水常ニ任置候者、むさと地下人之手前ゟかり越、おゝよりの用所申付、百姓逃散、田地荒候而、さてさけおと可有之候、其方ゟ代官一人被相添、淺見ニ被申付、一錢成共無私樣ニ可有才覺事、
一去今兩年之借物、米錢共過分ニ有之事候へ共、只今朝夕斷絶之樣ニ申來候條、辨濟おもひもよらす候、來々年少宛も相濟樣ニ可申付候、其通借主共ニ可被申屆候、水常無沙汰ニ無之事、
一帳面ニ相見候通、水常知行指引候而、餘所米錢共ニ驗進候條、來納ゟまり分を、只今手前ゟ取替遣候、其御心得專一候、猶淺見ニ申含候、恐々謹言、
尙々、水常無據相賴候而、如此申遣候、幾度も水常有談合、別無同心者、可相止候、以上、

（年未詳）十二月十四日　　山城守

四季農戒書　國主ハ日月地頭代官ハ氏神ト心得ベシ

正月ノ行事

夕なべ

大茶ヲ呑ミ外出ヲ好ム女ハ離別スベシ

二月ノ行事

用水井溝

紅花畑

實相坊 參

〔直江兼續四季農戒書〕

地下人上下共身持之書

一國主汝日月と心得へし、地頭、代官い所之氏神と崇ゑし、肝煎いまとの親とおもふゑき者也、

一正月五ケ日之内、身ふ玄さりひて、方々への禮儀濟へし、同十五日迄れ内、大小公役、自分の繩を、分際ふ過る程支度もへし、十五日過は、諸山中、平地共ふかさ雪ふ成へし、年中之薪伐取ゑし、幷ニ驢(ソリ)を以、畑へこやしを引付へし、夕おへふ馬之くり、わらち汝作ゑし、家主、娘(ヨ)、女房い糸を取、苧をひま、男子共乃著類をかせくへし、大茶汝さて喰ひ、彼方こおさの留守汝尋行、人事をいふ女房い、かおらも隱夫汝持へし此等之類ゑ、縦子共有中成共、離別もへ汝者也、

一二月半之比も、公役流木伐、或米持夫、萬役儀番手ふて被仰付へし、殘もの い、先用水井溝以下汝拵ゑし、朝夕鋤鍬を以からむしれなへを取、植しむへし、幷紅花畑乃支度いさし、吉日を以ゑ稼汝まくゑし、彼岸之内ふゑ種子籾ゑらひ、井水へひさにへき也、

三月ノ行事

仕付米

たねやき米

そし米

四月ノ行事

耕作

一三月、鍬乃さき汝かけ、馬くゐの子も、不足おらは入とゝのへ、則新苗代を拵ゑし、幷麻畑をうおひ、殘おく打うおふへし、頓而田打前ふ候へい、仕付米を相もとめ、女房い是汝白米ふいさもへき也、三月末ゑ、井よりたまをあけ、苗代ふ是汝まくゑし、たゑや汝米を用意し、所之代官、肝煎の方へ遣、童子共喰へし、年寄の祖母、祖父、齒おくて喰事かおさもんい、そし米ふゑ

一四月寂中、男い未明ゑ暮まて、鍬のさたれめり入ゑと田をうおふゑし、女房、娘ゑ三度之めし汝こしらへ、頭ふあり汝手巾汝かふり、田乃邊へ持行、老若共ふ、よこれさる男の前へ食汝もゑへし、ありき衣裝乃女房を、老若共ニ、男みて、其身いよこれおりらを、心汝いさゝ、身勞汝忘へし、男暮て歸らい、湯汝とり、足をおらいせ、娘、舅、女ともふ、たとこのありゝり足汝、女房の腹れうへふ置、なてさすゑ、一日の辛勞を忘るへし、四月末い、牛馬ふまくゐ汝り者、男い田をりくふ、からむし畑へ、近邊の山〳〵ゑ萱(かや)汝きりりけ、家近おらい風汝うゐゝひ、燒ゑし、時分ならは、山畑ふゑ粟、稗、黍汝まくゑし、

元和五年十二月十九日

元和五年十二月十九日

五月ノ行事田植草歌紅

一五月ゟ入てゐ、吉日ゟ為らひ、田を植ゑし、男ハ苗代ゐおり立、めてさ花草歌を諷へし、女房ゐ顔をけゑひ、紅をけ、衣裳をあらさめ、笠をりふり、去り為ゟゝけ、黒き身ゟを白きやふをして、田ゐおり立、早苗為うゑし、歌ゟゐ、いゟゟを去やゑさる男女、夫婦のゟさらひ乃事為作ゑうさふゑし、是ミゐ山〳〵の神為いゑひ申祝言也、去ゟらは、又晝食ゟハ、ささうれあさま程ゐる食為もゐゐからへて喰ゑし、男ハさる事ゐゑとも、女房ハ腹ゟゐ過さるやうゟ見え候間、女房の食ゟハ、少かてゐゐの葉為入度候、大豆を田のあをゟうゆゑし、

六月ノ行事草取

一六月、田の草為取へき事専ゟも、國ゟよりて、女房草為取所を有り、又男計炎天ゐとらを、女ゐ内ゟ置、よき留守居と心得候へハ、まおとこ為もるを紅花摘ミの也、是ゐ不足の事也、紅花ある所ハ、花かこを持、畠ゟ出、つま袖をゐらめゟし、紅花つむ所を有、中ゟを紅花よく出來し候をのハ、朝起し、女子共まて相かをく故也、不出來なる所の女房ハ、大茶をくらひ、其よめ、子共迄だらくをのと知るへし、如此の女子共ゟハ、夏かさゐらをもゐさほましきゐゑ、又土用之比ハ大根をまくへし、大根畑の邊へ、月のさゝゑり有女出

七月ノ行事からむしハ米ニ優ルル

女房ノヨシアシ

候へハ、大根皆赤ゐる物と申候まゝ、かさく禁へし、又麻おも此比まき申也、そと山畑ゟ專はをへき也、

一七月ゐゟらむしを取へき也、むゐしハゑつゟのよし候、只今ハからむしを以、地下人よろゐを調也、能々案知見為ゟ、田ゟ出來る米ゟゐまさりさゑ、いゟゐ是為おろそかゐせんや、其年乃仕合ゐよるといへとも、からむし短ゐ、こやし不入故也、是ハ男れ不念ゐり、如此之男ハ、物くさきをのゟ、病者ゟ、せんきふるひゟさるゑし、其子細ハ、風おもてゟ風やらひを不致故也、又ゟらむし能候へとを、ゐらさひぬゐさるハ、女房乃ぶさしおミ也、如此の女房ハ、いつゟさの掃除もむさく、あしたゟやひふん〳〵たるもゑらに、男ゐ向ゑし、又綿おも色白、からむしをも能仕出しさる女房ハ、ミめさほハもくゑに、とも、不斷のさしなミきれゟゟして、心言葉もゑにし く有ゑし、如此の家主をハ、男いゟゟを懇切ゐ、常ゐ午房、山のいも為ふくして、晝夜ともゟかせくゑき也、綿乃いろく為く、からむしれ色を惡敷ハ、いゟゐ女房をめゟさち能くとを、いつゑわきゟくにたゟ、息の香をさたゟ、朝夕乃ふるまひも表裏ゐ、左様之女おは、とおゑあさりのをのゐて

元和五年十二月十九日

盆

不たしなみノ女房ハ離別スベシ

聖靈

八月ノ行事

袋米

百姓ハ給人ヲ輕ンズベカラズ

九月ノ行事

稲刈

も、不審成さつ候し、又盆の比いよくおし、綿成いさゝたあろき、いつくも
ならぬ商人成たふらうし、うゑ度といへとも、かれ手あかさのけはま孫
きつゑ行、まちもり成おし、それをあいそうようり付、代物を取、おとこお
見もは物也、如此おる女房あ、たとひ子共有中成共、追出もへし、又夫はや
き米をつき、地頭代官へも、心さし次第ゐ參らもへし、盆れ聖靈乃手向水、
まつり米を是也、

一八月、もゑきりをのゝくせとして、いまさ實熟をさる稲を苅ゑ、雨れふる
日ゐむし米ゝして、一日〳〵と日成おをゑ申族を有、又所ゝより、むや雪
の内れ薪を支度可仕事專一也、左もれい、むや痩給人ゐ、年貢むつをとて、
さやゝうるしもつゐぬ刀脇指さし、かゝ衣著さる足輕、小者催促ゝ付、袋
米を調らゑ候て、彼使如在すましく候、痩ても肥ても、給人い、百姓の身と
して、いやしむをゐらは、

一九月、稲を專苅干をし、稲場とおくい、必盗人取へし、男い棒をつた、鑓を持、
稲廻りゐ夜おゝ〳〵出をし、天氣もよく、稲を内へ入て、先餅米成用意仕、秋
餅をつき、地頭、代官、肝煎方へも參らすへし、其身乃親類、縁者振舞へし、但

十月ノ行事

菜大根引

粟稗黍ノ刈入

米相場

若者ノ傾城遊

山歸來

男ノ夕なべ

もりきりをらい無用、女子共秋の米ゝつきさるを祝、大めしをくらひ、に
こりさけを作ゑ、ぶくもをい、かおらは腹を煩をし、其時い己り無養生を
いもは、おゝあしこ、山伏や神主れ所へ、袋ゝ米を入持行、子共打もらひ、い
きゑやう、死ゑやうのと申事、ゐまた有へきあり、前かとゐ養生仕へし、女
房いあお麻ゝて布を拵、紺やゐ遣、子共のゝは肩ゐ筋、わきに靄龜のかさ
成付候へとなとゝ、好て去年れ古ゑさ成中へ入、秋あゑせおと可仕肝要
也、

一十月いもや寒天ゝ成ををい、家〳〵夏の窓おをふさきな、大根を引をし、
粟、稗、黍おを苅可入事肝要也、大豆、天氣を見合うりをし、男女共ゐ冬中之
ゝまり肝要也、夕おべゝ稲をこき、米ゐして、米乃相場よれ時分、町へ出し、
うゑ代を年貢の心りけ專一也、但わのきをの、女ををささるい、米、大豆う
り代銀有とて、町立おし、大酒をのゝ、傾城やへ行、瘡乃有女に出合、かゝゝ
ゐ瘡をうけ取、山歸來之入藥をのゝ、爰れかしこのとて湯治おと申内ゝ、
あたまゐふくをのとくぬゐ申也、能々さしおゝ申へし、又惣して男、夕お
べゝたゑらをあゝ、年貢れ米を入置をし、

元和五年十二月十九日

十一月ノ行事ノ年貢ノ納入ハく酒

一十一月、雪ぬらさる内、米年貢を、牛馬乃ゐしのさゝ内ゐ、地頭、代官の藏所へもたひ納ゑし、殘米もあらい、町こてむく酒を三盃さべて歸へし、一入心持面白かるゑし

十二月ノ行事一汁一菜

一十二月、地頭、代官よゑ、未進あらは催促付へし、賄ゐ一汁一菜との御法度こ候へとも、百姓之似合ゐ、どう成ともゐり、いゑしの一ッやゐ成ともいさし參らもゑし、催促よても濟し不申い、祕藏之女房を去ちよとらゑ、殿方こてわゐゐ小者、中間、女房をぬもむ事有へし、左樣之事無之まへりとゐ、御年貢い霜月中ゐ皆濟もゑし、能々分別仕見可申候、地下人と云ゐあら、祕藏乃、あらゐ風よをゐてしとおもふ女房ゐ引さらはゑ、わのきものよぬもまれ、天道よもあさゑ、運命をつき果、地下傍輩よもいやしまれ、口おしき事なるへし、兼てうゐ事をおもひ、年貢米、代官油斷有ましき事

正月ノ用意

專一也、年貢皆濟あらい、正月用意いさし、殘米を餅ゐつゐ、酒おをはくり、鹽さりあをもかいもとめ、目出度年ゐ取ゑゑ也、正月い、我人ともよ、高砂や此うら舟ゐ帆をあゑて、月を汲ともよ出しやなとうさひ可申者也、此外書入度事おほゝるへし、百姓をろ〳〵乃ゑさゐおし、萬物を能作り出し候へい、皆人飢ものあく、かちけをのもおし、然時者佛神れ御心よを叶ひ、現世よてい九屬さあへ、來世よてい一門眷屬と〳〵く蓮花乃上よのゆる事、是皆濃作（ノウサン）のつと先よくいさに故也、有增此書よ載といへとも、其事よはき、其事ゐ思もゝ、いろ〳〵さま〳〵の味有へし、寢を寤を忘るましゐ事肝要也、

直江山城守記之

幕府年寄トノ應對

上杉家中ノ事一人ニテ仕置スス

〔武邊雜談〕乾

一關原以後、權現樣天下御取被遊候而も、景勝出仕の時、直江山城守供して登城もは、其時、天下の執權本多上野、酒井雅樂、松平右衞門、安藤帶刀、成瀨隼人あと、直江よ參會もる、山城方より帶刀、隼人あどゝ言よ、帶刀、隼人い、手をつき、山城殿何と被成候へと敬し申也、

一輝虎代より景勝、定勝迄、（○本書、定勝マデトナスハ誤ナラン、）直江山城一人こ而、万事國の仕置もる、公事をも山城一人して聞よ、側の人を拂、刀をそもよ置、白淵（洲カ）へ呼付、對決を聞、士い座敷へ呼、樣子を聞、何事も當座よ埒明、或い成敗、又追放、夫々よ云付る、家中訴訟事、まさ手形判形も、山城一人ゐて出す故、万事もゝゆき埒明也、山城武勇の譽有、學文有故、諸事順路よて、諸人悅也、

元和五年十二月十九日

軍法
行軍ノ心得
營壘ノ警備
備ノ是非ハ諫爭スベシ
死生ヲ共ニスベシ

〔軍法〕

○伯爵上杉憲章氏所藏

一推行スレハ則、定前後左右之行列、而旌旗不亂、長兵不横、火繩不滅、不遠不近、不重不輕、寂而若無聲、行止應鼓矣、此謂明法審令者也、不可不誡也、

一或船、或橋、過諸惡所則、設前後之備、若臨戰時而、諸勢悉濟畢而可行矣、如此則、不見擊中途者也、

一過山陰、谿澗、林木之處則、必當察有伏兵而遮擊也、無遠慮則、是所以龐涓見欺孫臏者也、

一營壘相成、而分地之外、妄不可通交往也、各堅守其所而、晝則設遠候、夜則出伏兵、專攻守之備而、可停止無用之他出也、若至于夜中有急用則、可持燭行也、

一或喧譁口論、或放牛馬、失火、而莫驚駭營中及敗亡矣、

一備之是非、不顧思慮、可諫諍也、或不知其得失、或雖知之、默而不言、凶妄出來之後、誹上之失、益己之智、此佞人也、語曰、既往不咎、

一采薪芻牧之者、五人組而副警固、示方角、定往還約束、不可有遲疾也、

一或主人、或與首、在戰死之場則、其衆一所、而可死於敵、若遁逃者、於立所可誅之也、亦莫捨忘士卒之難矣、故曰、可與之死、可與之生而、不畏危也、

軍中ノ心得
輕薄粗暴ノ者ヲ近ヅクベカラス
輕卒ハ馳引ノ鍛錬肝要ナリ
鐵炮ヲ練習スベシ
總人數ヲ三分シテ正兵奇兵

一在於軍中則、節衣食之用而、專可畜積兵器玉藥矣、莫催遊興、妄佚樂也、雖有佳賓上客、一汁三菜、酒不可及醉飽也、

一貪小利而、妄輕戰、求虛譽、而爲氣勢、專勇力而、爲暴亂、伐軍功、而爲奢侈、侮有司、而犯法禁、奪人忠、而爲己威、進退共不顧大妄者、是非仁義、勇者、愼而莫爲友相近矣、

一輕卒者、馳引之鍛錬干要也、其疾如衝風、其輕如浮雲而、往來狹路微徑、圍周前後左右、爲之呼號奮發而、可使敵失氣勞力也、若彼進來則、輕引而如鳥散、又退去則、暴馳如電擊、而可追之也、幾度如此、待自破時、而莫卒爾挑戰矣、故太宗曰、朕觀千章万句、不出乎多方、以誤之一句而已、

一夫鉄炮者、平生習玩、可以手熟、未手熟則、臨于不虞、而難用、々々則、攻守之備不利、々々則、其軍破却、玉藥、火繩等能拵持而、縱雖遇風雨、濟深水、不可不得而用也、無遠無近、必料當與不當、而莫向虛空放矣、就中臨鑓下其外大妄之虎口則、先跪而靜心、治氣、休息、開眼而、大將又進表者、撰之而可擊也、

一總人數三分而、其一者、撰武勇而、可使爲正兵、其一者、撰丈夫而、爲奇兵、其一

前鋒ト爲スベシ

者、撰輕足而、爲前鋒也、

追擊ノ心得

一追逃則、量窮寇之還擊而、後軍者整行列而、可以相屬也、人馬之力、地之遠近、日之長短、不可不知矣、是勝者非勝、在於慮敗而已、

互ニ密事ヲ語ルベカラズ

一士卒相會而、語莫以蚤夏、使傍人生嫌疑、伸我之不利、擧敵之美好矣、說妖災不祥、以虛言無實、失衆之氣勢矣、欲陷堅陣、破强敵、致忠節、發名譽而、爲少弱、可激勵膽勇氣力也、

營中諸門ノ警備

一營中四方之門、定約束符信而、可改來往也、不改則妄々則壁壘虛々則彼來而制於我、所制於人者殆矣、亦彼使間諜而、別異於其內、出盜兵而、擾亂於其外也、豈可不愼乎、

戰勝シテ驕ルベカラズ

一雖戰勝、不可驕、雖少弱、不可侮、陳勢已固、常戒而莫有罷怠矣、其行列者、若初戰、其威武者、若臨大敵剛强然也、故曰、敬勝怠則吉、怠勝敬則滅、

一陳則先堅守禦之備、而可以爲壁壘、妄莫離散勢衆也、

諸勢ヲ三分スベシ

一諸勢三分而、其一者、夜白共堅甲冑而可、以待不虞也、營中雖有失火以下之騷動、專虎口之防戰而、可出備揄勢也、

勝負定ヲザル以前虎口ヲ去ルベカラズ

一或號討捕敵、或號引除手負死人而、未勝負相果以前、不可去其虎口也、自始到于終、不離其手、可抽軍功也、武勇之甲乙者、主人與頭遂糺明、無私可言上者也、

合討

一合討者、敵動則雖助救、於首者、可付與初太刀之者也、爭於死人而、莫搆比與矣、

士ノ心得

一夫士者、在於治國、則專法度、禁邪僞、以修其身、在於危難則、勵勇氣、盡忠節而、以無二心爲名譽也、必莫見吉凶、變貞心義理也、

騎兵ノ進退

一騎者、審知別徑奇道之利、而可進退也、未知地形則、以敵之往來驅馳、乃料廣狹險易則、無所不知也、

陣所ノ心得

一兩軍相對則、陣處干要也、敵之所進者險、我之所進者易而、可處於不破之地也、雖有薪草水便之利、不可因天隙之地也、若敵處戰地之利則、引而可避之也、

武主戰場ノ心得

一臨戰則、撰英雄豪傑而爲左右、大將居中而、老弱可爲後軍也、戎馬僮僕等者、付武主、可置後軍之次者也、

一臨戰則、先能整內、堅前后左右之備而、治氣、靜心、休息、開眼、跪而可以待也、小筒爲正、鑓下、中筒爲奇、百步大筒爲握機、貳百步、各專其處而、不可空放矣、敵

攻城ノ心得

敵國ニ入リタル時ノ心得

戰法ハ敵ノ氣ト心トヲ奪フニ若カズ

始終ノ慮アルベシ

元和五年十二月十九日

堅守而無挑戰者、發我之輕卒、可襲之也、知敵之可擊、知我之卒可用、知地形之利則、急擊而莫疑矣、三者一闕則、莫挑戰也、

一向敵城而相動、則見道橋之惡處而、卽付奉行、可作之也、知道之左右、可以立備處、深草林木之可以設伏兵巷、可得歸軍之策矣、

一入敵國則、先宜察地之形勢、遠近廣狹、兵之多少、彼與我孰勝矣、是謂地生度、々生量、々生數、々生稱、々生勝者也、

一治衆者、自伍到十則、雖百萬不難矣、鬪衆者、使旌旗鼓貝定進退之約束則、易行矣、

一將士吏卒明其法而、各專所用、可以常戒也、審其令而、指示所、雖水火不可避也、當其勢而、不懼大敵剛强、可設奇正之備也、量其機而、見可勝則、速擊而、莫敢爲猶豫也、

一戰法者、不若奪敵人之氣與心矣、奪氣也、有旌旗五采鉄炮、奪心也、有奇計知謀矣、蓋非治己之氣與心者、何以得奪人之氣與心乎、

一物在於始則、氣盛而銳、在於中則、氣微而惰、在於末則、氣衰而勞矣、雖起一日之軍、豈無始終之慮乎、

承兌等ヲ招キテ漢和聯句ヲ興行ス

〔上杉家文書〕

（包紙）「京都にて、直江山城守、相國寺兌長老を招、漢和興行之懷紙ノ寫」（朱書附箋）「筆者 宇津江朝清」

直江山城守重光作

漢倭

楓散風紅色、　西咲

玄くはゝるとの山乃傍　昌茂

月よなる霧れ降そふ瀧たちて　氏長

捲簾好賞商、　兼續

暮天看盡雁、　仙需

田面れ原のゝすむをち方　了意

川音も日れさす影も長閑よて　紹旨

雪消岩徑彰、　朝清

經岨樵歩倦、　言俊

かさある山を空に藏ふゝ　壽三

元和五年十二月十九日

元和五年十二月十九日

扇こそ明行月は名殘おれ　素仙
空閨幾斷腸、　氏秀
とゝれしとたもふゝ内よ憑まれて　昌茂
十年釣渭姜、太公望也、　西
鷗邊無黜陟、一一進退ッ　兼
ぬもとの嵐吹をつる迄　長
たえ〳〵は霧にむら立松みえて　意
秋寺不尋常、　需
鐘破永霄夢、　清
敷ゝへゝりゝ衣手乃霜　旨
雪ゐとゝはもらぬ花の苦むしろ　三
風微桃李場、　言
春遊歸計少、　西
雲ゐとはゝになく夕鶴　仙
らすむ野の日は色うすゝ雨晴て　長

分行はゝとよはゝゝくむら篁　茂
景落畫工手、　需
山彰金佛相、　續
を初瀨やくるとなくとの鐘の聲　旨
月よとけしき秋乃川颸　意
冷袖舟先繫、　俊
露盤玉已瑲、　咲
浮ゐゝゝはきれやをはれ亂碁よ　仙
淡燈照獨床、　清
童眠書儘㨗、　續
道乃をしへそうたゝ忘る　三
はきゝつる行衛をたとり山くれて　意
眞柴ゐるたゝ乃ゝゐるかゝ岡　旨
花雖幽處美、　咲
杏在遠村粧、　需

元和五年十二月十九日

元和五年十二月十九日

たもふとちはとひよはるぬ春かれや　茂
溪流飛羽(トバス)觴、　續
もらはしとかをしを君の惠よて　三
ゑもの ゑをまて人そ惶ふゝ　仙
矮屋難推暑、　清
密雲奈隔鄕、　俊
うへりみる跡遠はるる旅乃空　長
浪よりなみよこく興津艎　意
更深月寒沍、　需
日昇峯近望、　咲
霞もや山のさ分て晴々らし　旨
やのうゝへる鴈乃一行　長
塵裡負春客、　續
朝來下殿嬌(フシヤウ)、　清
僞眞難辨(キハシ)約、　咲

あひたもふよもつらき妨　三
霧間疎影月、　俊
秋乃田つらは行りひも無し　茂
ゑゝ寒き伏見は野邊のくるゝよに　意
風乃まゝなるすゑ乃篁　旨
閑寂鳥知樂、　需
聯翩蝶似狂、　咲
花さくいもみれましをはくさむらよ　仙
霞融詩債償、　續
々ふもたゝ酒のむしろこくらしもて　長
市はりりやよとはる賈　意
ぬりきぬる雨は氣色を三輪の崎　三
袖よ杉間は風そ荒さる　仙
波激停征櫓、　清
海深括智囊、　需

元和五年十二月十九日

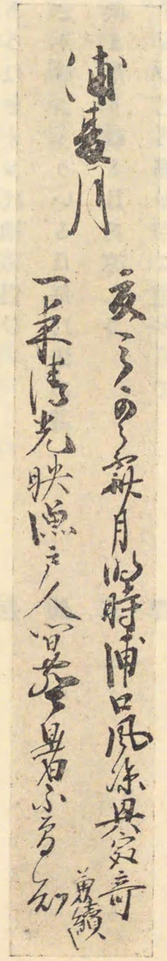
濁清胸不混、　　咲
今古力擒强、　　續
國遠き御調もとこふためしあるや　　旨
民の家居も猶昌おり　　茂
晩煙山鎖著、　　俊
朧月水忿忙、　　咲
瀧津瀬よときとめられぬ花散て　　意
ゑりえらよる岸れ青楊　　旨
機外遊絲亂、　　需
樓頭横笛揚、　　俊
はまとのにもひもほさる秋のくれ　　茂
別涙露瀼々、　　清
電頃相逢處、　　咲
のこれもうすき袖の移り香　　長
取とむる衣を形見もとゐおしや　　旨

ありまのもてはかるる裝ひ　　茂
ゐら玉乃年や今朝より霞むらん　　三
鶯亦弄春光、　　咲
吟履爲花緩、　　續
あらぬをまゝれ袖の倡ひ　　意
とくいさゝらいる日毎れ法乃道　　仙
秋よなりぬる月乃凉しさ　　三
すゝむし乃聲ゐ砌よ遠ららて　　旨
露於蘭草芳、　　續
分らへる野いさひ〳〵の雨そゝき　　意
暮れもゑいし人う彷徨　　仙
深宮門可鑰、　　咲
少室渡堪航、（フナワタシスルニ）　　需
なゐれあるとゝれを川の末廣ゝ　　茂
たちきふ波乃と筏き旁　　長

元和五年十二月十九日

相國寺兌長老　西㕓　十三
城織部　昌茂　九
成田下総守　氏長　八
直江山城守　兼續　十
同歸依僧　仙需　九
成田内藥　了意　十
房州里見殿ノ後見　紹旨　十
宇都江九右衞門　朝清　七
池上兵部少　言俊　七
木戸元齋　壽三　八
竹田　素仙　八
來次出雲守　氏秀　一

〔直江重光兼續筆詩短册〕（侯爵前田利爲氏舊藏）



〔林泉寺文書〕（前羽）

雪夜　雪夜圍爐情更長　吟遊相會古今忘
圍爐　江南良策無求處　柴火煙中煨芋香　兼續

〔伊佐早謙氏所藏文書〕（前羽）

（元和四年）元午仲冬下澣、余一日寄駕於新築之禪林寺、此地有經堂之靈也、有神祠之英也、青松碧流、僉以山門之境致也、是日也寒氣料峭、飛雪封條、恰如春樹著花而已、四隣觀覽之美、倍萬于舊古者、實老禪卓錫之謂也、此時此興懷不可擲、漫賦俚語一篇、以表他時異日花園轉位之賀云爾、伏希改正、

（重光）鈎齋

卓錫神祠靈地鄰、講筵平日絶囂塵、禪林寺裏枝々雪、認作洛西華圃春、

〔米澤地名選〕（廟墓部）

直江侍（マヽ）從山城守兼續墓　（○中略、重光ノ墓地ノコトヲ等ニカヽル、下ニ收ム、）

元旦　四位侍從直江兼續

楊柳其賓花主人、屠蘇舉盞祝元辰、迎新送舊換桃符、万戸千門一樣春、

曉鐘

孤枕幽齋夢不成、疎鐘報曉太多情、豐山霜白一色裏（マヽ）、月落烏啼第五更、

山家

盤石無蘿避世塵、山中舊宅獨容身、白雲深處行人少、峭壁攢峯蓋四隣、

螢入簾

凉螢度竹影横斜、忽入疎簾夜色加、應是客星侵帝座、丹良（マヽ）一點映窓紗、

元和五年十二月十九日

菊花

菊逢秋白露(日カ)香奇、白々紅々花滿枝、好把西施舊脂粉、淡粧濃抹上東籬、

松雪

孤松吹雪倚巖檐、一夜枝頭白髮添、曉起朝來開箔見、羈橋詩思在蒼髯、

逢戀

風華雪月不開晴、邂逅相逢慰此生、私語今宵別無事、共修河誓又山盟、

○題闕々、

○一、二句闕々、春雁似吾々似雁、洛陽城裏背花歸、　兼續

歲旦　天正七年

冬風吹盡又迎春、春色悠々暮運長、池上垂糸(絲)新柳綠、檻前飛氣(ヤ)早梅香、

織女惜別

二星何恨隔年逢、今夜連床散鬱胸、私語未終先洒淚、合歡枕下五更鐘、

人日

佳辰今日得春來、人日題詩更幾回、猶說風流千歲後、舍(含)章樓下壽陽梅、

洛中之作

重光京都ニ於テ五山ノ僧ヲ招キテ詩會ヲ催ス

獨在他鄉憶舊遊、非瑟非瑟自風流、團々影落湖邊月、天上人間一樣秋、右二首、下矢來

篠田甚左衞門に眞筆あり、

〔殘暑促俶裝〕

○伯爵上杉憲章氏所藏

〔包紙〕即京都直江山城守宅ニテ

五山衆詩

休道炎蒸與夏齊、朝來爽氣已凄々、　不二庵(寸藤集覽)

胡爲殘暑促行裝、穉樹凉蟬三拍鷄、

紅暑猶殘雖座侵、俶裝已促喜人心、　正因庵

清風稍覺送穉熱、次第聲凉松樹陰、

炎熱穉闌漸盡時、先西風有入窓來、　南明院

曾言殘暑推難去、俶裝欲歸天一涯、

秋至常愁殘暑苛、朝來初覺俶裝俄、　最岳(元良)

炎官此去知何處、蕭颯西風三疊歌、

酷暑夏過何振威、朝來料識促裝歸、　棠陰(玄召)

穉風起日炎蒸去、正是張翰似見機、

手抄ノ韻書

蕭々爽氣滿蒼穹、纔促俳裝炎帝忽、
送暑新凉以何餞、柳條換得一簾風、　永喜（林）
溽暑纔殘池水灣、且將團扇廢投閑、　鈎齋（重光）
俳裝簡易早歸去、浙瀝穉聲在樹間、
白髮驚看爽氣新、清風吹起卉萎辰、　元親
秋鴻社燕所何似、殘暑催歸凉作賓、
殘暑朝來促俳裝、天涯穉色現微凉、　氏秀（來次）
離筵不惜炎蒸客、吟翫清風到夕陽、
漸促俳裝暑愈微、清風自是入柴扉、
炎官告往鷄鳴後、一點新凉透客衣、　範利

〔直江山城守眞蹟韻書〕○憲章伯爵上杉氏所藏

○本文略ス、重光ノ陣中ニ携帶セルモノナリト傳ヘラル、コノ外、重光ノ手抄セル韻書四部五冊、マタ上杉家ニ藏ス、

〔師説撰歌和歌集〕○綱氏佐々木信所藏

○本文略ス、古今集、後拾遺集、詞花集、千載集、新古今集、新勅撰集、續古今集、續後拾遺集、長秋詠草、拾玉集、秋篠月清集、拾遺愚草ヨリ、百四十首ノ歌ヲ抄出シ、之ニ木戸元齋ガ簡單ナル註解ヲ加ヘタルモノニカヽル、

古歌ヲ抄シ木戸元齋ヲシテ註ヲ加ヘシム

此一冊、直江山城守兼繼（直江）行有餘力折々よせこれ侍りをきる時よ、太政大臣（藤原實行）乃心は水の御歌思えたれとも、○實行ノ歌ハ、詞花集ニ、をもひやれ心の水の淺けれはかき流すへきことのはもなしトアリ、此比乃懇志、一入再入乃紅よりもぬりし、依之いかひかをりれい、病筆を染て紙上にをりへとも、心冥々と去て、言葉俗也、四季乃次第を調をは、作者は次位雜亂せり、神慮をがめおはして、人口をとゝかりおやし、とや〳〵丙丁童子よあさへらるゑ物也、

天正十三歳三月七日　木戸元齋壽三

景勝ト男色ノ關係アリトノ說

〔紳書〕八

己亥（慶長四年）五月、鳩（雀）巢より來る水戸史館總裁安積覺（澹泊）兵衛より見せ來り候事の由、覺書文章ゑ、直江山城守兼續、父曰樋口與三右衛門某、事上杉景勝、母掌薪櫃（炊イ）、兼續美而晳、景勝悅而寵之、老臣直江大和（實綱）守死而無子、景勝使繼其家、○本書、實綱ノ家ヲ繼グトナスハ誤ナラン、長而有材氣、遂爲景勝之重臣、其報兌長老書、傳播于世、○重光、書狀ヲ承兌ニ贈ルコト、慶長五年四月一日ノ條ニ見ユ、觸撥東照宮之震怒、兵端萌于此矣、然嘗怪、其書辭氣雖悖慢、而飽滿抗壯、無窒塞之累、似曉文字者、適見四家合攷、稱其有文學（ヲイ）載詩二句、曰、春雁似吾吾似雁、洛陽城裏背花歸、○コノ詩句、上ノ米澤地名選ニ見ユ、一變知味、頗能詩者、因考本

安積澹泊重光ノ詩ヲ評ス

新井白石ノ重光才ヲ評ス
淺野長祚ノ重光詩ヲ評ス

館所纂詩集、得詩二首、其一賦織女惜別、曰、二星何恨隔年逢、今夜連牀慰鬱胸、私語未終先灑淚、合歡枕下五更鐘、句語洗刷、殆非麁人口氣、及閱羅山先生五臣注文選跋、始知兼續之所梓行、〇羅山ノ文ハ下ニ見ユ、於是方信其注意文字、合攷之語不妄也、兼續頗有將略、惜其肆意反噬、寇鈔山形、陷畑屋、攻長谷堂、與最上義光相持、關原之敗、旋師于會津、皆有法度、時人稱之、唯上山之戰、不用上泉主水之言、使之憤激致死、不厭人望耳、總之兼續罪魁也、當與逆黨同誅夷、而東照宮包荒之量、赦而不問、及難波搆兵、志貴野之戰、出奇制勝、雖功不贖罪、而竭力戎事、干戈既戢、能以文籍自娛、當時武夫健將亦所罕有、偶因論詩及之、〇澹泊史論ニハ、紳書ヨリ採錄セリ、マタ可觀小說ニ載セタリ、傍註イハ史論ニ據ル、此文書生の常談よて、時勢を云らさるの言なれとも、兼續ゐ全詩を云るをしゐ故ゐ、こゝゐ記もゐり、我藏ゐ、兼續ゐ和漢聯句百韻あり、其詩才有し、うゝかふへゐらゐ、

〔寒檠瑣綴〕二　戰國ノ詩ニハ、謙信ノ七絕、直江兼續ノ行雁似人人似雁、落陽城裏背花歸ノ詩、政宗ノ馬上往年過、世平白髮多、殘軀天所縱、不樂又如何ノコトキ、何モ清健ニシテ、介冑ノ氣ナキモノト云ヘシ、

〔讀書餘適〕上　（天保十三年七月）二十日、晴、熱甚、橋本伯恭、飯田世坦來、申牌導觀國饗、廟堂寮

藤原惺窩ト交ル
文祿役宋版漢書及ビ史記左傳ヲヨリ朝鮮將來ストノ說

塾盡具焉、其大聖殿區、卽鷹山（上杉治憲）公所書、〇略中既而至一小室、敎授坂千丈輩來會焉、觀古本漢書、模印精明、注家盡具、每葉欄後著篇名、其紙堅韌、無簾紋、朱紙裝之、乃宋板佳者、聞之、文祿中、其大夫直江氏（重光）、勇而好學、與藤惺窩諸人交、壬辰（文祿元年）役、慨然語其徒曰、我師獨喜芟鮮奴髯首、是何所用、我將攫至寶、以幸萬世、取書數筐而歸、直江氏亡、其書歸於公、卽此本也、其裝蓋直江氏所改云、宋板漢書彼中既亡、以予所聞、漢書善本、宇宙間惟有是書、信乎萬世儒者之幸也、又有左傳、史記等、亦直江氏所齎歸、時諸子設宴於輪王寺、督促頗急、皆不及致詳焉、因念他日獲數月暇、倣山井鼎考文例、精對以爲一書、亦藝林一勝事也、乃謀之千丈、千丈唯唯、至寺則暮矣、僧曰雪庭、善飲、雖無勝景、地頗幽靜、弦月離山、橫射樓壁、風涼而談清、亦此游所罕遇也、〇宋安井息軒、松島ニ遊ブノ途、コノ日、米澤ニ在リ、版漢書史記、左傳、今伯爵上杉憲章氏ノ所藏ニカヽル、題簽ハ共ニ玄興ノ筆ニ成リ、又史記、左傳ニハ、題簽ノ下部ニ玄興ノ朱印ヲ捺シタリ、果シテ文祿役ノ將來品ナリヤ否ヤ明ナラズ、上杉家ニハ、ナホ重光ノ舊藏ト稱スル宋版ノ千金要方ヲ藏ス、每卷金澤文庫ノ黑印アリ、

重光所持ノ七書講義

〔寒檠瑣綴〕一　新見伊賀守（正興）正路、藏書ニ贍、寔古刻ヲ裒ラレタリ、歿後、其嗣豐前守、宋槧ノ左傳、玉堂類藁、王荆公集、楊誠齋集ヲハ官ニ獻セリ、予（護野長祚）モ其藏書ノウチ、〇略中活版ノ七書講義、詩仙堂藏本ニテ、丈山ノ手書ニテ、藝州廣嶋

ニテ閲セシ由、マタ直江山城守ノ本ニテ校讀セシ由ナト處々書入タルハ、奇書ニテ愛藏ス、新見氏、賜蘆館ト號ス、

〔從三位權中納言上杉景勝卿記〕ニ　同年（元和五年）十二月十九日、從五位下直江山城守重光、江戸邸ニ卒ス、〇中略重光文武兼備、陪臣中ニアリテ、實ニ當時ノ偉傑ナリ、常ニ五山僧徒ノ文學アル者ニ交遊ス、其貯藏書頗ル珍重スヘキモノ多シ、其刻スル所ノ論語、文選等、往々世ニ傳存ス、

五山ノ僧徒ト交ル
論語文選ヲ上梓ス

〔漫畫隨筆〕下版行　書ヲ版行ニスル事ハ、五代ノ馮道ニ始ル、後唐、明宗長興三年二月辛未初、令國子監校定九經雕印賣之、二十年後、後周廣順三年六月、板成獻之、吾國ハ土御門帝元久年中ヨリ始ルト、始ハ活板（ウヘダハン）ナリ、直江山城守兼續左傳ヲ活版ニ搨セショシナリ、惺窩先生ノ門人中川宗伴、始テ四書ノ文之點ヲ一枚ノ版（イタ）ニ彫セタリト、東海先生（後藤）ノ話ナリ、

春秋左氏傳ヲ刊行スト
ノ説

〔筆ゝもさひ〕三　一勇將文學の事　出羽米澤ゝ人神保幸作ゞ話ゝ、かの藩中（ちゆう）ゝ、直江山城の訓點しゝる唐本の兩漢書、前田慶二郎ゞ自輯めゝる圓機活法の如き書ゝあり、〇下略

漢書ニ訓點ヲ施スト
ノ説

〔直江重光（兼續）書翰留〕

尊書拜見、其以來遙音絶、疎心之至、令迷惑候、然者、去春得御意候證類本草一部、被懸御意、令祝著候、殊更一段見事之本ゝ候而、別而令祕藏候、將又其元御院中御無事之由、珍重令滿足候、此方上下無違義候、可被少尊慮候、猶期後音候、恐惶謹言、

一乘院尊勢ヨリ證類本草ヲ贈ラル

（慶長十七年）二月廿七日　（尊勢）一乘院　御報

其以來遙不得御意、遠境故毎夏御無沙汰、令迷惑候、先度采女（戸田氏信）殿江戸御下之時分、彼地ゝ不有合故、不及御馳走候處、下々迄種々御隔心之儀共、彌迷惑仕候、然者八月廿四日之尊書、今月廿二拜見、幷宇治丸鮨一桶被懸御意、忝令賞翫候、就中新渡之万用不求人一部被懸御意、遠國如此之書始而披見仕、別而祕藏仕候、猶期後音不能具候、恐惶謹言、

戸田氏鐵ヨリ万用不求人ト云フ書ヲ贈ラル
宇治丸鮨

九月廿五日　（戸田氏鐵）戸左門様　貴報

林道春上杉景勝ニ要法寺版文選ヲ需ム

文選有李善註本、有五臣註本、有六臣註本、其六臣注本中、又有就善本、而加五臣者、有就五臣而添善註者、今此者、就五臣而添善註者也、此本近歳米澤黄門景勝陪臣直江山城守某開板于要法寺、余請秋元但馬守泰朝、而後泰朝告景勝而得之、以寄余、余先是倩友人及傭書者、爲之朱墨點、往往傭點之中舛謬多矣、後再借唐本加改正、猶非無疎略、特註中文字、魚魯陶陰不少矣、它日之暇、又宜校讎焉、古云文選爛、秀才半讀之者、能熟爛則下筆、不能自休、豈翅武仲而已哉、然則此本、亦吾家敝帚、享千金耶、(元和八年)壬戌仲秋十又九日、

山城守

煙草ノ法度

〔上杉家文書〕

尚々、大御所様御下向之沙汰、聞合可申下候、其外相換義候ハヽ、可申越候、莨菪之御法度如何候哉、此方へも御觸候哉、承度迄候、已上、

今月十日之書狀加披見候、其元上下無事之由、珍重候、就中稽古無油斷之段、可然候、扨亦戸左門殿(戸田氏鐵)預御狀候條、及貴報候、可相屆候、次文選御所望候哉、幸持合候條、則可進置候、重而も御用次第之由、申遣可然候、猶期後音之時候、恐々謹言

戸田氏鐵ニ文選ヲ贈ル

九月廿五日　重光(花押)

平八殿　參

〔定慧圓明國師虚白錄〕(三記)　漢書記

集九前漢帝紀ヲ手寫ス

此前漢帝紀十二卷、余祕在書棚、而禪餘遊目於此書中者、有年于此矣、夫此書之爲書也、萬(集九)里老人之自筆、而老人尋常考史記通鑑之文、書其首、以精詳句讀也、不從師而解惑者、此一書也、豈不珍貴乎、此越上杉宰相(景勝)股肱臣直江氏城州刺史者、余之方外舊交也、自卯歳頃、有志學也、外遊六藝、内行五常、是故計國事、則盡力乎溝洫、而立夏后之功、勤家業、則設禮乎庭燎、而執齊桓之政、加旃、趣敵、則軍中横槊賦詩、楯上磨墨、作文于武、無不到、實出群拔萃之一雄士也、誰不嘉尚也乎、一日扣余禪寂、道話次、見此書、有心謄寫之、余感其志道之深、投之刺史、數日之後、需余書此書來由、辭則缺朋爻忠愛義、書以梗其請、文祿乙未(四年)臘月中澣日、華園虚白(南化玄興)道人書東山下、

玄興ヨリ助字ノ解釋等シタル記文ヲ贈ラル

〔文鑑〕(○伯爵上杉憲章氏所藏)

藤氏字訓助字問答略云、柳文云、乎、歟、耶、夫者、疑辭也、矣、耳、焉、也者、決辭也、

柳文ハ柳子厚カ文也、乎ノ字、歟ノ字、耶ノ字、哉ノ字、夫ノ字ハ、未決疑處ニ置

玄興前漢帝紀ヲ重光ニ贈ル

玄興ト方外ノ友タリ

元和五年十二月十九日

字也、矣、耳、焉、也者、決處置也、

夫古文之助字、以論語爲祖、余問、何以究論語助字之大抵乎、答、以焉耳乎哉四字究之、問、皇侃曰、送句也、如何、答云、凡虛字者、矣字是也、矣字者、不決前、不生後、絕其語、不使之蔓延也、見虛字問答、今之四字者、或語之餘或生後、或足句意所不足、或令其支脈不斷絕、故云、送其句也、送之句云非也、問云、焉字如何、答、焉而不決、故曰、語餘而生後、問、其證如何、答云、或乞醯焉、乞諸其鄰而與之、是也、問、有黨字乎、答云、如之諸已而者、皆其黨也、此四字、置之句中、則不黨、置之末、則皆然矣、問、其證何耶、答云、時習之山川其舍諸、室是遠而不可尙已之類是也、問、以決而不決之字、置之大篇末、何耶、答、正諸志焉記之類、皆決而不決故也、有口傳、問、耳字如何、答、卽上句而受于下、如耳之在頭面、無黨字、問、而已者豈不黨乎、答、非也、而已者、而後已也、是決也、雖然置焉耳、則與而已黨、謂之決文之辭、見虛字問答、問、乎字如何、答、疑而淺也、見字注、問、有黨字乎、答、如歟耶、則其黨與同、問、哉字如何、答、疑而決也、乎哉兩字者同功一躰、乎哉云、則如問而答、哉字者大疑小決也、問、有黨乎、答如也夫、則其黨也、見虛字問答、夫見字注、禮曰、右四字分別如是、今則歸于也之一字、成二字則也耶也、然則內決而外疑之字也、疑則皆卽上句、

故謂之助字矣、予按虛字問答、說論之、或之所論、蓋以之也之兩字、爲古文鹽梅云々、宛轉反覆之間、筆之所澁、詞之所滯、味之所不足、意之所不至、以之字合焉、以也字決分焉、則勢如破竹而後以矣字決斷、而其次之破句、轉句、不可無千鈞力量、若唯摸索故人、無自已所得、如至之也矣之開合、如驊騮之捕鼠耳、何以取焉、藏六子云、夫語端辭也、又語已辭也、吾已矣夫、柳曰、疑辭也、又有所指之辭、夫二三子也、其語端辭云々、又指物之辭、於語助也、之語助也、諸之也、又疑辭也、有諸又語助、日居月諸而語助、語室是遠、而又因辭、又抑辭、又發端之辭、兮見韵書、歌行多用之、乎語之餘、上句之餘聲也、又極辭、一曰疑辭也、舒辭也、與及也歟見韵書、俗以爲語末辭也、又歎辭、經傳通作與、耶未定之辭哉、君子哉若人、是爲間隔之辭、柳曰、疑辭也、矣語已詞也、大決之字、耳語已也、焉見韵書、語終也、小決之字也、語之餘也、助辭、終也、爾言之助也、詞之必然也、已止也、此也、甚也、說也、語終辭也、然語辭決辭、卽今也、半也、當也、則助辭、然後之辭、行有餘力、則以學文、乃廼同、曳詞之難也、春秋難辭、繼夏之辭、々之後也、便安也、習也、宣也、此卽則爲三字、不可不辨、

夫序者、次序之語也、前之說、勿施後、々說勿施前、其語次第不可顚倒、故次第其

元和五年十二月十九日

語、曰序、尙書序、詩序、古今作序、々大格樣也、書序、首言畫卦書契之始、次言皇墳帝典三代之書、及夫子定書之由、又次言秦亡漢興之事也、詩序、首言六義之始、次言變風變雅之作、又言二南王化之因也、

夫記者、所以記日月之遠近、工費之多少、王佐之姓名、敍夏如書史之法也、尙書顧命篇是也、敍事之後、略作識論、以結之、然不多、蓋記者以備不忘也、

銘者字從金、喩如金玉、一字泛甲、善爲文者、宜如古詩、雅頌作、行實之作、當取其人平生忠孝大節云々、作傳法亦然、

跋者取古詩、狠跋其胡立義、狠前行、則躐其胡、（跋語不可多云々、）

說者、則自出己意、橫說竪說、如韓文師說是也、

文筆者、詩賦銘頌箴贊、謂之文也、詔筆移檄章奏書啓、謂之筆、

詩者、有四法、四格、六義、前實後虛、後實前虛、四實、四虛之体矣、四法者、起又云氣、意高遠而悠々可作時景、可作吃体、承要從容、不離其題寄意也、轉要變化、轉而可作之、合其題之一度合、而甚深遠長、味不盡樣可作之、四格者、題目、其題儘可作也、破題、其題意趣可破心本可作、譬喩、寄其題、以喩作也、述懷、寄其題、述我情思、又文章可有此意也、六義者、風、寄物、直不言而作之、賦、詩注、賦之言鋪也、直鋪陳其事也、比、比物作也、興、吃景氣其儘作之也、雅、能々合法度、句道儘作之也、頌、其德或顯或謗作也、有口傳也、廣勻歌也、又周禮太師注、頌誦也、誦今之德、廣以美之也、前實、是皆八句之中夏也、前二句、作吃景者前實也、後實（也）後二句、寄物作曰後虛也、後實、前虛、反上體作之、四實、中四句、皆作吃景也、四虛、中四句、皆作我情思也、遠者以虛不虛、以實不實、虛中作實、々中作虛、只一向虛、詩意弱也、一向實、詩意卑俚也、以深遠幽微之意可作也、句法者、杜子美、恩友人云、渭北春天樹、江東日暮雲、是可爲法者也、

（策彥ノ祕本中ヨリ抄出ス）

右自策彥和尙祕本之中抄出而書焉、

虛白就南禪鉄（景徐）叟和尙、問文法、叟曰、予昔聞之月舟（壽桂）和尙、焉字喩礎石也、自下抱上也、然火上燃、故受上事處置之也、而與髭同韵、髭下垂、故自上事及下處用之、蓋物蓋也、器有蓋、則不知其中物、推之也、故推量叟處置字也、苟容易義也、頗十物六七方云也、尊乎哉、盛也哉ナトヽ、重書、深褒辭也、又虛白就月溪（壽梁）和尙、聞蒲室之講、時云、而ホウヒゲ而トト（云カ）也、ホウヒゲハ、人ノ頭トアギトヽノ間ニアル物也、而文ノ上下ノ間置字也、

原夫（タツヌルニ）、大凡、夫梅者、夫松者ナトヽ、書ハ、皆大文ノ書出也、文ハ短ケレトモ、大文

ノ体也、

某分者、某少年者ナトヽ書ハ、小序也、文ハ長クトモ、小序ノ体也、穠太史曰、黄太史曰ナトヽ書ハ、人證ト云也、詩カ語カヲ發端ニ書出ノ、其人ノ手合ヤウニ書ヲ句證ト云也、然則末ノカキトメヤウ、有口傳也、三歩一顧、五歩一顧ト書ク、散文ヲ長ク書、無分別也、

狼跋詩九、狼跋ハ美周公ヲ也、周公攝政、遠四國流言、近則王不知、周大夫美ム不失シコトヲ聖、狼跋其胡、載疐其尾云々、

右予禪定之餘、問取先輩而錄之、而成小卷、祕在匣中矣、依直江城州太守之所望、手書以投贈太守之麾下、

皆慶長四年暮春日　（前化玄測）虛白拙叟

江西和尚ノ口傳

四六之法十段、江西和尚ノ口傳

一、蒙頭ニハ、隔句ヲ用也、輕隔句ヲ爲好、然トモ不守一隅也、

二、結句ハ直對也、此下ニ、共惟ノ二字ヲ書也、

三、八字稱ハ、凡四書一對ヲ本トス、

四、師承、隔句一聯、但シ對ニハ、其人ノ支ヲ書テ本トス、

五、和句ハ直對也、和句ハ二對モ一對モアリ、又無モ一体也、

六、實錄ノ隔句ヲ一聯書ス、其人師承ナケレハ、前ノ師承ノ處ニ實錄ヲ書キ、此ニハ緣語ヲ可書也、

七、又直對アリ、無トモ不苦也、是モ和句ト云也、和句トハ、上下ノ理ヲ和シアワスルニ依テ云也、大支ノ物也、

八、自敍、直對一對、凡八字ヲ本トス、

九、隔句、前ハ自敍、后ハ其人ノ支ヲ以テ、對スル也、

十、祝語モ直對也、凡此分也、此外色々体多也、

凡啓劄ハ十對也、十二對十三對マテハ法也、十四十五ハ無法度支也、輕隔句ハ、上四字、下六字也、重隔句ハ、上六字、下四字也、平隔句ハ上下六字也、麁隔句ハ上三字、下九字、十字、十三字、五字也、蒙頭ニハ、肩ノ聲々ヲ可調也、

江西和尚蒲室四六講明口傳

某ノ後ニ、隔句對ヲ三對書サウ、蒙肇ノ隔句對ノ外也、サリナカラ筆力ノナイ者カ三對カケハ、ヨロメイテ、ワルウサウホトニ、大略二對カイタガヨイ

紹巴重光ノ爲メニ連歌ノ式目ヲ書ス

重光手寫ノ古文眞寶

重光手寫ノ藥方書

詩歌亂舞ニ長ズ

大男ニテタ打上リタル風俗

ソ、八字稱ヨリ後ハ、八九對ニ過テハ不可書、今ハ無法度夏也、上ノ句ハ四字、或ハ八字、或ハ六字、不用五字七字、蓋詩ノ句ニ似タル故也、上ノ句四字ナル則、下一句六字、或八字、他ハ皆假(ナラヘ)之、蒙肇ニハ、時節ト其人ノ夏ニ似合タル夏、或ハ總論ヲ用也、疏ニハ、山門ニハ、祝語、境致ヲ用、凡有法者多也、

〔和漢篇〕

○本文略ス、本書ハ二條良基ノ撰ニカヽル、

(奥書)此式目者、爲直江城州染筆者也、林鐘二日　法橋紹巴花押

〔古文眞寶直江兼續公手寫〕

○羽前伊佐早謙氏所藏

○本文略ス、卷末ニ重光ノ花押アリ、

〔諸藥方書直江城州手抄〕

○羽前伊佐早謙氏所藏

○本文略ス、諸病應驗藥ノコトニカヽル、伊佐早氏ニハ、コノ外重光ノ手抄ニカヽル藥方抄ナホ二冊アリ、

〔武邊咄聞書〕五　一景勝家老直江山城守兼繼(價千同ジ)ゐ、木曾殿の四天王樋口二郎兼光ゐ末也、謙信小姓立にて、後い卅二万石領す、文才、學問、詩歌、亂舞よ長し、武勇も逞く、大男よて、打上りさる風俗、公儀肩を並るものゐし、石田

閻魔王ヘノ書狀

治部少と心を合せ、天下の大亂起をし程の大膽者也、越後より會津へ國替の時、上杉家中三寶寺庄藏、下人を成敗をる、其罪科切程の事よておきよ付、親類共、是非彼者を返し給い度と祈さる、埒不明とて、直江山城守所へ詰る、山城守曖よ、銀貳拾枚取を可申間、跡をも弔ひとらを、そ度よて堪忍をよとあり、親類共中〳〵合點をに、山城守申ゐ、死さる者ゐよび返も事からす、銀子を取て堪忍せよと曖、親類共中〳〵承引をに祈さ度懸る山城守ゐ家來森山舍人を呼、高札一枚拵、一筆書て、山自身(源平脫カ)玄關へ出、訴訟人共を呼、いろ〳〵曖共、其方いつれも、是非彼者返せと申上ゐ、不及是非、よひ返し取もへし、但冥途へ呼よ遣者ゐし、彼者の兄と甥と伯父三人、閻魔廳へ參り、彼者を申請歸り候へとて、三人の親類を召捕、往下ノ橋にて斬罪、其前よ高札を立る、

未得御意候得共、一筆令啓上候、三寶寺家來何りし不慮之仕合に而相果候、親類共歎候て、呼返しくれ候へと樣々申よ付、則三人迎よ進之候、彼死人御返し可被下候、恐惶謹言、

慶長二年二月七日　直江山城守兼繼

閻魔大王様冥官獄卒御披露

右之通書付立る故ゑ、國中一言も申者なゝりしと也、〇續武者物語、諸家雜記、煙霞綺談、古實話、武道實話、古老物語、武隱叢話、武家叢談同ジ、

一金錢初アとし頃、伊達政宗金錢を懐中ゑて、諸大名列座の砌取出し、皆々ゑ見せる、折節末座ゑ、景勝家老直江山城守罷在候、政宗金錢を山城前へ持參し、珍敷物とて見せらる、山城守扇をぬき、一間ゐろけ、そをゑて羽ゑをぱく様ゑして、打返し〳〵見る、政宗心ゑい、我隨身をるとの故、禮儀ゑて手ゑ不取と心得、城州、不苦候間、手ゑ取、よく見候へとあり、山城申候い、我等事い、謙信傍ゑて使立、一手の大將申付、只今景勝家ゑて先手仕、采幣を取候手ゑて、かやうのいやしき器（ウツハモ）のい不取申物ゑて候間、そを故扇ゑて請申候と、ゐゝ〳〵敷申候故、政宗赤面をられしと也、〇續武者物語、諸家雜記、落穗雜談、一言集、古實話、武要實錄、武道實話、古老物語、武隱叢話、武家叢談同ジ、

金錢ヲ賤ム

金錢ヲ賤ミタリト云フハ後世ノ妄說ナリトノ說

〔武林名譽錄〕

一　直江山城守兼續金錢を扇ゐて受し話

〇上略、上ノ武邊咄聞書ニ同ジ、今按ゐ、〇中略以下三寶乃布施ゑ充らるゝ金銀錢を、賤しき物と云へきゐあらぢ、兼續此理を知さる人ゐあらぢ、正宗卿も亦赤面をへきゐあらぢ、是金銀を稱貸ゑて利を計るい賤劣とゐをとも、金銀い寶貨ゐして、賤劣へき物ゐあらぬ理を辨へさる者乃妄作と知へし、

酒ヲ好ム

梅干ヲ肴トス

〔武邊雜談〕乾

一謙信上戸也、景勝も大上戸也、直江山城、石坂撿校上戸故、不斷相手にして酒盛也、ゐり初ゑ緣らをへ出、酒持參（レ）とて、小（サ）き盃ゑていくつも呑、色々肴もなく、梅干を肴にして、不斷酒盛也、飯い少（シ）つゝこ而酒計、大關常陸い度々武功有者ゐれ共、近頃ゐとけ者ゐて、景勝極眞成人の酒盛の時、顏ゑ紅白粉をぬり、異形體こ而舞出抔をる、然ども大剛ゐ士大將故、景勝ゑゝりもせぢ、其通也、大關常陸ハ杉原常陸事也、

羽黑山權現ノ木像ヲ盜マシム

〔米澤地名選〕社祠部

笹野大悲觀音〇中略

笹野の圓通堂に、大悲と羽黑の本尊二體あり、羽黑の本尊と云は、直江兼續、其比、明鏡院と云山伏を語ひて云樣は、羽黑の本體を取來ること成へしやと云ければ、明鏡申けるは、隨分取來ること、左程六ヶ布にも有まし、若取來らは、我を侍になし賜へと云ければ、兼續、隨分其方の望に任すへしと許しければ、明鏡院悅ひ、則一七日潔齋し、羽黑に籠り、遂に取來り、直江へ差出し

浪人ノ召抱ヲ辭ス

けれは、直江悦ひ、明鏡院を武士に取立て、是を佐野政右衞門とそ云ける、其孫、今與板組に在、〇略下

〔直江重光兼續書翰留〕

如貴札、其以後不得御意、所存之外候、仍被仰越御牢人之儀、邂逅之御用之條、如何共推量、御馳走申度候へとも、家中ふゆ之躰思召之外候條、當分應御意候ても、以來彼御身上不罷成候へと、却而無曲可思召候條、折返申候、全非存疎意候、淵底彼御牢人、家中ふゆ之躰御見聞候條、定而可爲御才覺之由得御意候、恐惶謹言、

（慶長十九年）二月廿四日　水但州様人々御中

ためし鐵炮

如貴札、其以來と依無指儀、不得御意候處、爲御音信、ためしの鉄炮二挺、眞靏一、幷兩樽、殊貴城之御酒、一入忝賞翫仕候、然者先日之平林内藏（正榮）人所ゟ得御意候人通、彼此節々御無心之申事、御馳走難申謝令存候、此方御用之儀候者、可被仰付候由得御意候、恐々謹言、

酒代

重光病ム

（慶長十九年）五月一日　茂石見守（慶隆綱元カ）殿御報

尚々、鉄炮、此地か様之筒始而見物仕候、入（被脱カ）御念候通、別而祝著仕候、以上、

〔千葉さよ氏所藏文書〕

猶々、此方無相換義候條、可御心安候、以上、

御祝義相濟、珍重至祝不盡、仍爲酒代銀子廿匁投贈、目出此事と候、然者吾等就所勞、切々千伊豆所迄蒙仰、辱次第難申謝候、一兩日者彌本腹仕候條、可御心安候、猶期後音之時候、恐々謹言、

直山城守　重光（花押）

六月十三日　安總州様人々御中

〔中山小太郎氏所藏文書〕〇羽前（慶寛考）

直江山城守とのへ人々申給へ　小伊豆入　濟□

尚々申候、彼刻以來彼是可申述候條、閣禿筆候、

今度其方御煩細々見廻申故、早速被有平安、於貴殿亦御大慶之趣、以千坂豆

藥禮二百兩ヲ旦齋ニ贈ル

忝被仰達、剰爲御祝儀銀子貳百兩謹拜受、誠目出度奉存候、宜預御取成候、恐惶頓首、

七月十六日　旦（昌叟）

〔祕傳集〕

祕傳集身ノ上ノ大事ヲ知ル事

○伯爵上杉憲章氏所藏

一日天ニムカイ奉リテ、我カ影ヲ見ルニ、其日大夏有ヘキニハ、影ミヘス、然ハ能々愼、縱イカ成大切之用所アリ共、家ヲ不出シテ神ヲ取、氣遣スヘシ、又七日之内ノ儀モ知ト云リ、

一小便ヲシテ見ルニ、其日大夏アランニハ、泡タヽス、アハ有ハクルシカラサルト可知、

一第一生死ヲ可知夏、口ノウチニ脈アリ、ソレト手ノ脈ヲ取合テミルニ、其日大夏アルヘキニハ、脈不揃、二所ノ脈同夏ニアラハ、縱難義ノ子細有共、身上クルシカルマシキト心得ヘシ、又只今一戰ニヲヨヒ候時モ、是ヲモツテ生死ヲ知、脈二所同樣ニウタハ、心ヲカウニモチテ、高名スヘシ、又惡ハ、其コヽロヘヲナシ、愼ト有、又無了間所ナラハ、思切テ討死セント思定テアレハ、不苦シテ高名スル夏有之、加樣ノ義トモ、天道ヨリノツケナレハ、努々不可疑、惣而人間ノ身、天地同根ニシテ、ヘタテナキ物ナレハ、自然トウ樣之シルシ出來スル者也、スコシモ疑ヲナスヘカラス、又脈ノ取樣口傳ニ有之、

外出中友ト參會ノ事

出テ中友ニ可相方之夏

子午卯酉ハ九目、丑未辰戌ハ五目、寅申巳亥ハ六目、右此方ヲ可愼、

一膳ノウチニ毒ノ有ランニ、其方ノヒチ、シリ、同マヂリ、必カユキ者也、其カタノ物ヲ食ヘカラス、

一我カ前ニブスアレハ、俄ロカワキ、クチビルヒリメクヤウニ成也、能々氣遣シテ、心モトナキ物ヲクワスシテ、用心スヘシ、

一毒ノ有膳ヲスユル時ハ、持タル者涙浮也、サテ我目ニモ涙ウカフ也、俄ニ小便ニイタキコヽロアルヘシ、

一ドク持タル者、ワカマヘニ來トキ、左ノ肱サキ、右ノ目尻カユク、俄ニ小便シタク成也、

一ドク持タル人ヲ知夏、其者ワカ前ニ來レハ、俄ニ鼻ヲシミテ、ノドノアタリカユク成、是モ小便ニイタキ心出來者也、

一第一ドクノアタリニ有ルヲ知事ハ、アリノトワタリ、シキリニカユキ者也、コレウタカイナシト云ヘリ、

船渡ノ大事

船渡之大事

一舟ニ乘時、足ノ大指ニテ、辻ト云字ヲ書テ、龍王揃ヲ一卷讀、サテ賦ト云字ヲカキ、點ヲウチ樣ニ、日輪ノ印ヲ結、印ノ中ヨリ、舟ノ頭ヲ見ヘシ、フチノカシラ不見ハ、乘事努々有ヘからず、

兵法枕ノ大事

兵法枕之大夏

一先枕ニ向テ、九字七返唱テ、心經一卷讀、鈡印ニテ是ヲ書ヘシ、光光明永、次伏折フシ、ヒタイニ、鈡印ニテ書之、光明鬼神永、次祕歌ニ云、

武士ノコシニサシタルツハ刀夏ノツマツキアラセ給ふナト三返、又歌ニ、

武士ノ枕ニ神ノ告有テ、チラフカタキハアラワレニ計利ト三返ウ樣ニ誦シテヌレハ、縱フシ入タリモ、カタキニ相テ、利失夏ナシ、以上、

〔直江城州手抄〕

曲肱子ノ評

古ヲ好ミ聖典ヲ學ブ

俗ヲ易ヘ生民ヲ化スヲ能クス

上杉浪人ノ評

叨綴五言漫體、謹奉呈雍(光)州使君之麾下云、

是正、東方君子國、又有君子人、好古學聖典、論道敍彝倫、禮容正穆々、文質已彬々、知囊括四海、名節滿八垠、懷忠奉明主、易俗化生民、人中稱威鳳、天上呼瑞麟、天資溫而厲、風流淨無塵、題詩最得妙、下筆如有神、格律賤島廋、句法學蘇新、誰知武毅將、遊心翰墨畛、多詞恐汚德、逐一不敍陳、山僧歎命薄、官軍征南津、干戈激迅電、敗走似驚麞、欲行々不得、依稀推隻輪、以夏我有罪、敢無所遁身、終亦成俘獲、入獄久遘屯、禍福吁有命、不用問蒼旻、人生如朝露、豈待八千椿、老矣榮與辱、聊付南柯淳、公矜我劬瘁、膳(卷)我芳情醇、前年賜文選、一字亦可珍、況是六十軸、不屑文犀螾、又有白金賜、恩波起涸鱗、救乏謂之惠、扶窮豈非仁、施德不報所、君子知情眞、中心何日忘、謝忱未能伸、東西隔千里、寄書何因頻、今歲公朝洛、寓簷煩使臣、慰問我安否、恩越骨肉親、慈顏我未拜、相望恨參辰、何時聞赦報、得逢大平春、東遊吾所欲、必支黑瓤皴、當敲君門戶、莫用防雜賓、願結茅封內、與君欲成隣、花晨與月夕、詩句可品論、此志定不遂、思之淚沾巾、

元和第五歳六月日　曲肱子磬折

〔武邊咄聞書〕六　一上杉浪人門田造酒佑ハ、淺野采女正長則(重カ)ヨ奉公、かの

門田ゝ物語ゝ云、○中略直江山城守ハ大男ゝて、勿躰百人ゝ中ゝも勝ゝ、學文有て、詩歌ゝ達者、智才武道兼ゝる者也、恐くハ天下ゝ御仕置ゝかゝりゝ候とも、ゆくゝもましゝ仁躰也、○中略門田語りしを書付了、

秀吉ノ評

秀吉公天下御草創の初、被仰ハ、陪臣ゝて直江山城守兼繼（實）、小早川左衛門佐隆景、堀監物直政ゝ、天下ゝ御仕置するとも、仕兼ましきと御譽也、○武隱叢話、掃聚雜話同ジ、

〔前橋舊藏聞書〕五

藤原惺窩ヲ訪フ

一直江山城守兼繼明壽院（讀下同ジ）（藤原惺窩）惺齋ニ對面ノ望アリテケレ共、惺齋止メ、ウケヒカス、兼繼ツイニ押メ惺齋ノ宅ニ至リヌ、惺齋他行ノ折カラナリキ、直江度々招請相見ヲヲカヘルニ不果、今日來レルニ不逢、一向留守ヲツカヘルニ同シトテ、惺齋自彼カ宅ニ尋ヌ、直江、關東ヘ下向ノタメ、既ニ其日發足シヌトアリケレハ、惺齋アトヲ追テ、大津ニ至リテ對談アリキ、兼繼、夏ノツイテニ、久シクスタレタル家ヲ急ニ可取立時ニ、臣下ノ心持ハ如何アルヘキト尋ヌ、惺齋、夏ノ急ナルハ却テ破ルヽノ基ナリト云事ヲ詳ニ談メカヘリヌ、後ニ惺齋云ク、兼繼、主君ヲスヽメテ事ヲヲコサシメ、家ヲ滅亡スヘキヿヲナシテントカタレリキ、果メ景勝

惺窩ニ慶家再興ノ際ニ於ケル家臣ノ心得ヲ問フ

惺窩ノ評

奥州ニ夏アリテ、其功ヲ不終ナリニキ也、

林道春ノ評

〔米澤地名選〕廟墓部

直江侍從（ヤウ）山城守兼續墓　○上略、下ニ收ム、或時、城州（重光）、小早川隆景と共に洛より歸る道すから、惺先生（藤原名肅字斂夫）を訪ける折節、先生他出せりとて、遂に逢てそ歸りける、惺窩歸て、兩將の訪よし聞て、竊かに驚き、急に旅裝を調へ、大津迄追ひ行き、小早川隆景か陣へは行かすして、直江か宿處へ訪ひ、一夜天下の治亂を談して、明方に相分れぬ、時に惺窩か門弟林羅山之を聞て、大に憤り、直に惺窩へ至て、問て曰、兼續は天下の奸雄、小早川中納言は當世の君子あり、何そ君子に見へすして、奸雄を見るや、師の爲めに吾竊かに憤ふる處ありと難せり、惺窩答て、いやとよ、昨夜、大津の宿にて、一夜兼續と談するに、成程人の云如く、一天下の奸雄なり、然し又器量に至ては、是亦一天下の英俊あり、彼それ遂に天下三つ有は、其二つを握ん者あり、然る時は、吾此度彼か訪に應せされは、吾を忌む者として、僞て遇はさる者にやと疑ひ、彼か羽翼付き驥尾展ひたる時、吾必暗殺の禍に陷らんを恐れてなり、小早川殿は一世の君子あり、蓋爾たる君子、一國に君たるのみ、何そ人を害さんや、去は惡しき鷹には鉗（前）を餉（餌）へと云ことを知らすやとそ云へる

惺窩ノ評

遺蹟
與板城

重光ノ女ニ關スル傳說

直江城

とあり、○下略、重光ノ詩ノコトニカヽル、上ニ收ム、

〔越後名寄〕八上三島郡　古城跡　與板昔ハ大津ト云、上杉景勝之長臣直江山城守兼續居城也、直江ハ當國ニ久キ家ニテ、領主也、○中略山城也、辨財天池馬冷場ナト有、又竈ト廻リスル有土穴、○北越略風土記ニハ、竈と號する土穴トアリ、是ハ城外ニ忍ヒ出ル穴トミヘタリ、城ノ南ノ山足ニ、倉ト云ル村アリ、兼續ノ女ニ倉子ト云者住ケルヨシ、與板ニ、毎日茶ノ水ヲ汲ニ遣シケル妻、泉之部ニ委シ、右之一妻、彼所ノ古來ヨリ云傳ル所ナリ、○北越略風土記同ジ、又重光ノ女ノコト、コノ外所見ナシ、

〔越後名寄〕九水　茶水　同郡（三島郡）　與板士家馬場町ノ東ニ在、昔日、上杉之家士直江山城守兼續此處ニ居住ノ時、有女子倉子者、居城之山足而、毎朝汲水於此、以煎茶、故至今名之謂茶水也、此水去倉子之家凡二十餘町也、其女子ノ居セル處ヲ、今ハ倉谷邑ト云、

〔越後名寄〕八下古城　直江城　頸城郡直江津今町　直江大和守實綱居城、此大和守、代々越後直江城主久キ家也、○中略大和守ハ子ナキニヨリ、與板城主樋口與右衞門尉カ子謙信小姓寵臣與六郎兼續ヲ、大和守カ聟養子トシテ、○本書聟養子トナスハ誤ナラン、直江ノ跡ヲツカシム、○下略

越後十六家ノ一

御館城
騎崎山城

〔越後頸城郡誌稿〕二十一下ノ郷　古城跡古戰場考　直江古城　直江津城主直江氏ハ、當國ノ舊家ニシテ、十六家ノ一ナリ、往古直江次郎富豪ノ者ニテ、八幡太郎義家奥羽征伐時代ヨリ住スルト、義經記等ニ出タリ、又直江右衞門眞行等ノ舊跡、口碑ニ傳ヘタリ、又永正大永年間ヨリ元龜天正慶長年間ニ當テハ、直江酒椿齋、同大和守實綱、同山城守等居住ニシテ、石高モ四萬貫ニシテ、貳萬貫ハ地方、貳萬貫ハ浦運上ナリ、此浦運上ハ、往古ハ海三貫トテ、小分ノ運上ナリケルニ、當時直江氏ノ領スルニ至テ、如此海陸總合テ四萬貫ナル所、是ニ今般長沼領（信孫）ヲ加ヘテ、景勝時代、上杉家第一番ノ大身ノ士大將ナリ、此等ヲ以テ是レヲ按シテモ、直江氏ノ城跡無ンハアラス、然シテ此城跡ヲ後世ニ止メタル以所（マヽ）ノ者ハ、御館城跡、騎崎山城跡ノ如ク、共ニ平城ナレハナリ、然シテ騎崎山ノ如キハ、平城ト雖モ、平山城ナリ、故ニ今ニ茫乎トシテ、其古跡アリト雖モ、御館、直江ノ如キハ、市街墾田ト變セシヲ以テ、其遺跡ヲ失セシト云ンカ、然シテ御館城ハ、幸ヒニ古岡ノ存スルアリ、直江城ニ至テハ、遺跡モ古岡モ合テ存スルモノナシ、後世、至德寺村ノ地内ニ、字但馬屋敷ト稱スル所ノ、方三十間四方ノ土居堀跡、角矢倉臺跡寺（等カ）存スルモノ

アリ、是等ノ如キモ、現今將ニ鐵道局停車場構内ニ入テ、今將ニ跡ヲ止メサル景況ニ至ル、桑海ノ變、古昔ヲ知ルニ苦ム所也、

裝束屋敷

〔直江津砂山ニ、御殿跡、又古城、舞居敷等ノ字アル處アリ〕

〔新編會津風土記〕十三郭内　陸奥國若松之二横通大町通　別墅　此通ノ西頰本一之丁ト米代一之丁ノ間ニアリ、上杉氏ノ時、其老臣直江山城守兼續カ裝束屋敷ナリシト云、肥後守正之封ニ就テ後モ、執政ノ居宅ナリシカ、後故アリテ、西ノ方數間ヲ割キ、士屋敷トシ、東ノ方ヲ別墅トス、今西ノ方ニ割シ士屋敷ノ内ニ、直江清水トテ、昔ノ遺跡存セリ、

直江清水

蛇堤ヲ築ク

〔米澤地名選〕廟墓部　蛇堤　東寺町、東の松川の堰也、慶長六年、直江兼續築く所あり、

塹橋川ヲ掘ル

〔米澤地名選〕川池部　塹橋川、堀川、立一名芳野川　鶴府第三の橋川也、其源は吾妻山より出て、城の西郭を繞る、尤要害の河也、慶長十四年夏、直江下知して塹らしむ、東北に流るゝこと一里許り、松川に入る、夏日には螢火多し、宇治川にことならす、納凉尤もよし、

直江大石

堰潴河原　中流に直江大石と云者あり、竹股美作（常陽カ）是を拔去らんと云を、六十在家ノ民士甚難義に思ひ、百口申せとも、作州聞入れす、無據在家の者共搆て申樣、若此末川除け崩るゝに至ては、公儀普請に被成被下度の御手券下し置るへきの由申けれは、則奉行衆連名の覺書を下しけれは、在家の者共止事を得す、此大石を拔けれは、下の方に直江山城守建之と彫し置けるよし、是より水切れ強く成て、堰々悉く崩るゝよし、且作州の手券、今に在家に用、番送りにして所持の由、

直江石

又直江石とて二基あると云、文政七年八月、谷地河原の堤破れて、一の石碑出たり、其銘に、龍師火帝の字あり、是は或僧の加持し立たる石と云、

荒澤常火堂ノ橋

〔出羽風土略記〕四　一常火堂荒澤まあり、當所の鎮守と見へさり、祭神知る人なし、千載の遺恨といふへし、○略中當所に小橋あり、擬寶珠唐金也、銘言、奉納立出羽國羽黑山麓御橋、施主直江山城守兼續、文祿二年巳五月吉日、天下一道仁作とあり、

著用ノ鎧

〔越後頸城郡誌稿〕十九名所舊跡部神社考附高田市街社　日吉神社　高田杉森町ニ在、神主猪股氏、○略中寶物　直江山城守兼續鎧今ハ草摺ハカリ存セリ、

〔米澤地名選〕廟部　墓　直江侍(マヽ)從山城守兼續墓　林泉寺にあり、英貌院殿達山全智居士、元和五年十二月十九日、江戸鯖(マヽ)野邸に卒す、六十歳、同后室、同平八景明墓所も同斷、兼續夫婦實の墓は高野にあり、山城守卒する時、秀忠公より賻を賜ふと銀三百枚あり、平八卒する時も、將軍家より御辱被成下、屋形樣直江登城御禮、太閤も、直江兼續程兩道兼て、且器量の者はあるましと、殊の外歎せられけるとかん、初信夫町德正寺に葬る、故あり、林泉寺に改葬、位牌北寺町東源寺にあり、○下略、重光ノ逸事及ビ詩ノコトニカヽル、詩ハ上ニ、逸事ハ下ニ收ム、

林泉寺ノ墓　實ノ墓ハ高野山ニ在リ　初メ信夫町德正寺ニ葬リ後林泉寺ニ改葬ス　東源寺安置ノ位牌

〔高野山名所圖會〕奥の院參路の右側　奥の院の重なる墓碑と諸遺跡　上杉家墓羽前米澤侯なり、直江山城守の墓もあり、○紀伊國續風土記、紀伊國名所圖會所見ナシ、

墓銘

〔直江重光墓碑〕(銘)

奉爲達三全智居士　施主

丸

敬白

于時元和六年庚申二月七日○墓碑ハ林泉寺ニ在リ、

〔瑜祇塔念誦次第〕○紀伊　廻向文

二月十九日

達三全智大居士

直江山城守

〔北越略風土記〕五三島郡　佛閣之部　德昌寺曹洞派、號香積山、　吉川庄昔ハ大與板津と云、

本尊

開山光陰動夫和尚也、本山ハ紀州有馬(田)郡田部の安樂寺也、昔ハ勅獨(マヽ)賜ありといへり、慶長年中、上杉景勝の家士直江山城守兼續領地の節、菩提所ありしゆ、上杉一家會津へ所替の砌、寺號、記錄、什物等迄不殘引移されて、今ハ又米澤よあり、其後大破よ及ひゆるを、第十五世如實全宗和尚積年丹精して、造營全備せり、十七世春龍和尚關東を歴て、隨法幢の地とかなを、末院四ケ寺あり、大門村正應寺、鄉本村玄德寺、刈羽郡鎌田村明宗寺、頸城郡南潟村西光寺、

〔上杉家文書〕

從四位ヲ贈ラル

贈從四位、

大正十三年二月十一日（大正御曆）

宮内大臣從二位勳一等子爵牧野伸顯奉

故從五位下直江兼續

特旨ヲ以テ位階追陞セラル、

大正十三年二月十一日

宮内省

〔附錄〕

〔武術流祖錄〕砲術

重光ノ臣丸田盛次霞流砲術ヲ創ム

丸田九左衞門盛次

霞流

直江山城守重光之臣也、欲究砲術之奥祕、渡異國、練修數年、遂得妙旨、後歸國、門人許多、關八左衞門、須田九郎左衞門傑出タリ、

○重光室直江氏及ビ嗣子景明、養子長房、勝吉ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔上杉家中諸士略系譜〕九直江ナ　山城守兼續○事蹟略ス、上ニ收ム、

室直江氏

重光室直江氏ノ病ノ平癒ヲ皇大神宮ニ祈ル

秀忠時服ヲ贈ル

但兼續妻ハ大和守景綱娘也、父ノ○重光養父、與兵衞信綱妻トナリ、信綱卒、仍テ命ヲ請テ、兼續妻ト成ル、又兼續卒後ニ國政ヲ聞ク、直江後室ト云ハ是ナリ、寛永二年七月廿六日、秩三千石賜之、同十四年正月四日卒、歳八十一ニシテ卒ス、號寶林院、

〔上杉家記〕三十二景勝公八　同十六日（寛永元年閏七月）、直江兼續、舟岡某ニ命シ、其妻直江氏ノ病平癒ヲ伊勢ノ大廟ニ祈禱セシム、舟岡文書、

態申遣候、仍而内方ゟつらひ候ゟうくゟんとして、いせへ大かくら申あけへく候、このゝうにて申あけへく候へ共、こゝろもち候て、其方りさへ申遣候、今日中あけへく候、謹言、

後七月十六日　兼續

ふゝおりけんさへゟんとのへ

〔上杉年譜〕四十九景勝二十九　同年（元和二年）冬十月二十日、幕下ヨリ直江山城守室ニ御服二領ヲ拜領ス、時ニ御懇ノ上意コレアル由、千坂（高信）ヨリ言上スルニヨリ、土井大炊頭マテ飛札ヲ以テ、御禮仰上ラル、山城守ハ、自分ニ使者ヲ以テ謝シ奉ル、

元和五年十二月十九日

京都ヨリ江戸ニ歸ル

〔上杉年譜〕五十三　定勝三　同（寛永二年六月）十日、直江後室、京都ヨリ今日江戸ニ飯府、此ニ依テ、千坂采女高治、上泉源五郎秀富ヲ迎トシテ、去頃京都ヘ遣サル、今日、同伴下著ス、○上京ノコト、本書所見ナシ、

定勝ヨリ食祿三千石ヲ與ヘラル

（七月）同二十六日、直江後室ニ食祿三千石ヲ賜ル、是ニ依テ、賀儀トシテ、御羽織一領、酒肴三種二荷ヲ獻呈、拜謁ス、

〔上杉年譜〕五十四　定勝四　同（寛永三年五月）五日、元老千坂伊豆守高信ヲ酒井備後守忠利ノ官邸ヘ招カレ、當家ニ證人此有哉ト問尋アリ、證人改役日下部兵右衞門、牧野内匠頭列席也、證人此ナキ由、高信演說ス、則證人ノ帳ニ此ヲ記ス、且公ノ内政、直江後室、高信妻女、娘等在府ノ趣高信演達シ、書付差出ス、則御帳ニコレヲ記ス、其書ニ曰、

在府

上杉彈正内儀在江戸、
直江山城守後家在江戸、
千坂伊豆守女共幷子共七人之内娘一人、
右之通何茂在江戸仕候、
寅五月五日

定勝ノ起居ヲ候ス

定勝枉駕シテ物ヲ與フ

（七月十日）同日、直江後室、江府ヨリ使節日浦舍人ヲ以テ、鶴一隻、鮭鹽引五尺、糯一箱ヲ獻呈、公ノ起居ヲ伺ヒ奉ル、同十七日、飯府ニ付拜謁、時服二領拜受ス、

〔上杉年譜〕五十六　定勝六　同（寛永五年二月）二十六日、直江後室ノ邸ニ御駕ヲ枉ラレ、紗絹五卷ヲ賜フ、後室ヨリ晒布十疋ヲ公ニ獻呈ス、

亡父追福ノタメ米澤ニ下向ス

（三月）同二十六日、直江後室、今般亡父（景綱）年忌追福ノタメ、米府ニ下向ス、寶龜院、龍門寺同伴タリ、

同秋七月朔日、直江後室先般米府ヘ下向ノ處、今日櫻田ノ邸ニ飯著、公ニ謁見アリ、

〔上杉年譜〕五十八　定勝八　同（寛永七年九月）三日、志駄修理義秀ニ御書ヲ賜リ、來年櫻田邸修營普請ノ御底濫ヲ告報シ玉フ、直江後室鱗屋鋪ヘ引移ニ依テ也、

江戸櫻田ノ藩邸ニ歸著ス

鱗屋敷ニ移ル

〔上杉年譜〕六十三　定勝十三　同（寛永十三年十月二十八日）日、直江兼續後室病痾ニ付、快復之禱願、勢州山田兩宮ニ於テ、大神樂奏スヘキ由、神官藏田左京ニ命ラレ、同日、公、後室カ病床ニ御駕ヲ枉ラレ、起居ヲ訪尋シ玉フ、

定勝大神樂ヲ皇太神宮ニ奏シテ直江氏ノ病ノ祈ヲ愈ヲ平ヲ又其病ヲ訪フ

〔上杉年譜〕六十四　定勝十四　同（寛永十四年正月）四日、直江後室（山城守兼續妻女）宿痾彌留ス、故公御越駕起居ヲ訪尋シ玉フ、舊冬ヨリ祈療徵驗ナク、今日下世ス、公ニモ悼惜斜ナラ

病歿

法名重光ノ死後國政ニ與ル

ス、寶林院殿月桂貞心尼大姉ト謚號ス、此則直江大和守政綱(後)カ娘ニテ、兼續卒シテ後、國政ヲ與リ聞ク、故ニ群臣之崇敬他ニ異也、同六日、葬式米府ニ於テ經營仰付ラルヘキ旨命有テ、米府ノ執夏ニ告達ス、是ニ依、二月八日、米府林泉寺ニ於テ、葬送法養アリ、〇上ノ米澤地名選ニハ、實ノ墓ハ高野山ニアリトアリ、

定勝ノ氏ニ附屬シ直江ノ木士ノ預ク俊重ヲ齋ニ

定料ヲ山ニ寄ヲ勝常燈テ高野セ氏ノ祈ノ直江ノ冥福ヲ

同二十三日、直江後室カ追福トシテ、常燈料ヲ高野山ニ寄附シ玉フ、千坂安藝守、岩井左京ヨリ高野山上生院ヘ遣ハス、

同四日、御歩行之内四十五人、德松君之御廣間番ニ命ラレ、九人宛五番ニ勤仕ス、且齋木内藏丞俊重組ノ御歩行ヲ西山刑部宗信、左田圖書重俊兩人カ組ニ召加ラル、直江後室手明四十人ヲ齋木内藏丞俊重ニ御預ナリ、〇下略

〔高野春秋〕十四編年輯錄十四

廿日、瑜祇塔再興供養、執行大曼荼羅供、慶導師尊性親王呪願、撿校宥盛大和尚、職衆百口、内會所青巖寺、親王著御客殿正面、重疊設之、是準據後高野御堂號後白河院第八王子、道法親王是也、御列座之舊例也、考此塔開基、眞然大上杉景勝之長臣直江山城守之庶子也、慶長五年、直江氏有大故、家亡、其後室、大永元年大災之時、炎上、已來爲中絶、于茲、寵光院主清融闍梨者、越後太守上杉景勝之庶子也、(元和)尊性王御住山勤學、入御龍光院、大塔施私財、爲後生善所、令再興當塔也、于時、重光庶子ノコト、諸書所見ナシ、女塔誦經修禪院快譽、〇紀伊續風土記同ジ、

〔龍光院先師傳記〕〇紀伊

第三十六世法印權大僧都清融、或作勢宥、字良任房、越中(後)國直江山城守息、蓋直江氏仕上杉景勝、領十萬石、而關原合戰失利、且有故、景勝所削所領、融師後得慈母之淨財、再修瑜祇塔、以薦母氏寶林院日柱(月桂カ)貞心尼、塔落成、供養御導師、大覺寺尊性親王、呪願、撿校宥盛、職衆百口、寛永六年三月廿日、修大曼荼羅供、同八年辛未十月廿二日示寂、世壽五十八云、紀

清融母ノ瑜祇爲メニ塔ヲ建ツトノ說

清融ハ重光ノ弟ナリトノ說

〔寶藏院先師過去帳〕〇紀伊

阿闍梨清融、良任房、初住一乘院、又移龍光院、後轉當院、母氏建立瑜祇塔、越後刄上杉家臣直江山城守則其兒云、寛永八年閏十月廿三日入滅、

〔直江重光室墓碑〕

奥刄米澤直江山城守爲御後室

刄寶林院殿月樹(桂)貞心大姉

寛永十四天正月四日

直江氏ノ墓碑銘

〔瑜祇塔念誦次第〕〇紀伊

廻向文

寛永十四年丁丑正月四日示寂、

宿坊清淨心院〇墓碑ハ高野山清淨心院ニアリ、

寶林院殿月柱(桂カ)貞心大姉

直江山城守後室六十六歳、〇本書六十六歳トナスハ誤ナラン、

嗣子景明

婚姻ノ日取

重光ノ新第

〔上杉家記〕三十四　景勝公十一

守留書

去月廿九日貴札、今月六日參著、卽拜見、過分至極奉存候、如貴意、下著以後不得御意、所存之外候、内々自是以脚力成共可申上所、彼此取紛、乍自由御無音、剩罷成御報、迷惑仕候事、

一將軍様（秀忠）彌御勇健、大御所様（家康）今月中旬駿府出御、其地御下向之由、乍恐御目出度奉存候事、

一景勝所へ御書面之趣、懇々可申聞候、定而參府之節、可被得御意候事、

一平八（景明）祝儀之儀、拙者罷登候而、日限等可被相究由、岡八郎右被申候き、拙者罷登儀、當月下旬と大方支度仕候、右之分と罷著候其節伺候、可得御意候、恐惶謹言、

猶々、万端可爲御取籠處、遠路被仰下、忝儀、書面御禮難申盡候、以上、

十月七日

本雲州（本田忠朝）様御報　人々御中

同（十一月）二十二日、本田正信（多）、昨日駿府ヨリ還ル、是ノ日、直江兼續ノ新第ヲ觀シ、平

景明婚禮ノ日取決定

本多正信ノ室景明ノ婚禮ニ臨マントス

八景明ノ婚儀ヲ議シ、來月二日ト定ム、直江山城守書留

同二十四日、直江兼續、書ヲ平林正恆ニ與ヘ、男景明ノ婚儀ヲ報シ、又安房（本多）守勝吉以下、爲ニ參府スルヿヲ停ム、直江山城守書留

急度申遣候、仍去廿一日、佐劔（本多正信）様御歸サと爰元へ御出、作事以下御覽被成、祝儀可相急之由御意候、然共兼日其元と而申定筈、彼是様子岡八郎右殿談合申、安房（勝吉）守登、得御意候所、無用之由と候條、任其意候、祝儀者來月二日と相究候、然者其元と而召寄候者共、何爲苦と達間敷候條、壹人爲爲登間敷候、爲祝儀登候者、重而可申越候條、誰爲爲登候事、堅可相止候事、

一爰元雖不及申、万事佐劔様御意次第と申付候條、手間爲不入候、殊祝言之夜者かゝ〻可有御出候由候條、猶以心安候、人々入候儀者、大隅殿（本多忠勝）正○信ノ三男ヘ任置候條、公界内儀共と事缺候儀無之條、如何とも可心安候、爲其申越候、恐々謹言、

霜月廿四日　平林藏人（正恆）佐殿

景明戸田氏鐵ノ女ト婚ス

本多正信ノ媒妁

〔上杉年譜〕四十六 景勝二十六　同年冬十二月二日、江戸ニ於テ、直江山城守男平八婚儀ヲ調フ、平八妻ハ江州膳所城主戸田左門氏鉄ノ娘ナリ、〔慶長十四年〕〔大奔濃垣戸田家譜所見ナ〕シ、曾テ本多佐渡守〔正信〕媒妁ニテ、公ニ窺ヒ、其意ニ任スヘキ旨仰出サル、山城守在江戸タルニ依テ、今日相濟ム、則脚力ヲ以テ、米府ニ言上ス、公ニモ、寵臣山城守カ男婚禮故、別テ御喜ヒ斜ナラス、山城守父子幷ニ平八カ妻ニモ御祝儀ヲ下サル、又本多佐渡守、戸田左門方ヘモ嘉儀ヲ賜ル、

景明婚禮ノ覺

〔上杉編年文書〕三十二

慶長十四年十二月二日、直江平八婚禮覺

一　摠司　　千坂伊豆〔高信〕

一　輿請取　　左 澁谷彌兵衛　右 平林與八郎

一　警固　　西山善五郎　樋口玄蕃

一　御物奉行　　河越久太夫　山崎與三

一　同　　遠藤間兵衛　鳥山吉三

一　同　　長井武右衛門　篠田甚九郎

一　下雜物　　大月與五郎　服部與兵衛

一　庭燒松　　長澤滿介　佐藤半右衛門

一　庭ノ玄そく　　早川六郎左衛門　赤澤六助

一　餅つき　　平賀次兵衛夫婦

一　瓶子持　　日浦次郎右衛門

一　座配　　上泉源五郎　西山善五郎

一　同次間　　石黒采女

一奏者

一挑灯奉行

一輿供侍

近藤甚十郎
安部藤兵衛
桶口玄番（港）
登坂四郎右衛門
山岸主殿
窪田左京
舟岡源七郎
瀧澤庄三
來次三四郎
高橋茂作
棚橋源六
安部久八
二村宮内
本郷一藏
駒形作三

町田作左衛門
石黒采女
近藤甚十郎
今井源三郎
神山次右衛門
日浦伊兵衛
高野庄兵衛
佐藤新十郎
春日小左衛門
今泉仁兵衛
太田源三
淺岡與市
横山善吉
高橋久三
中島左太夫

一弓拾挺　中島左内
一鑓廿挺　北條清右衛門

御新造ニ而賄役付、

一惣奉行　山田兵庫
一肴奉行　池村十右衛門　岡村佐左衛門
一木具奉行　青木十右衛門
一瓦器奉行　高橋小四郎
一椀奉行　淺野久左衛門
一椀奉行　夜川與三
一折敷奉行　德家加兵衛
一鍋奉行　河野甚八郎
一桶奉行　櫻井平七

一水汲奉行　肝煎壹人
一酒奉行　鈴木
一食奉行　内記
一菓子奉行　小山甚六
一紙蠟燭油奉行　高島勘右衛門　益田利右衛門
一料里　河内　小林
表方賄役付
一惣奉行　西山善五郎　上泉源五郎
一肴奉行　池村十右衛門
一折敷奉行　飛木　岡村佐左衛門
吉田十兵衛

元和五年十二月十九日

一鍋奉行　木戸十右衛門
一木具奉行　青木十右衛門
一酒奉行　高村喜四郎
一桶奉行　櫻井平七
一土器奉行　高橋小四郎
一水汲奉行　肝煎
一食奉行　内記
一菓子奉行　關戸七藏
　　六郎左衛門
一料里　宇佐美三郎左衛門
　　彌二郎

同遺物覺

一御太刀一腰　銀三十枚　本多佐渡守殿へ
一御馬一足
一御肴（もち、こんふ、こい、きし、）

一御樽五荷　同御内室へ
一御小袖壹重（内むく壹、）
一銀子廿枚

一小袖壹重　おちノ人へ
一銀子三枚　おいちやへ
一小袖壹重　客　人　へ
一同　同

此外銀二枚三枚ゟ有之者十二三人、

一御太刀一腰　銀廿枚　本多大隅守（忠純）殿へ
一御馬一足
一小袖壹重（内むく壹、）　同御内室へ
一同壹重　戸田左門（氏鐵）殿御老母へ
一御太刀一腰　銀十枚　同左門殿御子息へ
一御馬一足
一小袖壹重（内むく一、）　三浦監物殿御内へ

元和五年十二月十九日

元和五年十二月十九日

一 御太刀一腰　銀廿枚　岡八郎右衛門殿へ
御馬一疋　同　三八殿へ
一 御太刀一腰、三百疋　庖丁人又助へ
一 小袖一重、あやゝら島　大隅守殿留守居　内海主水
小袖同、あやゝら島　御同人　庖丁人へ
一 銀子五枚　同　同
一 小袖壹重、あやゝら嶋　佐渡守殿　同
一 小袖二　本多出雲殿家來　中川十左衛門へ
一 同　同　御留守居　鈴木金右衛門へ
一 同　同　大高金右衛門へ
一 同　同　あやゝら嶋
一 同　同　同
刀一腰、馬一疋
一 小袖壹重　（同脚カ）
同　同　同

一 同　同　奥村九郎右衛門へ
一 小袖壹重　上坂次郎右衛門へ
右平八殿ゟ、
太刀一腰　銀十枚　大高金右衛門へ
一 馬一疋　奥村九郎右衛門へ
一 同斷　上坂次郎右衛門へ
一 同斷　銀五枚
右ハ山城守殿ゟ、

〔上杉家記〕（三十四　景勝公十）

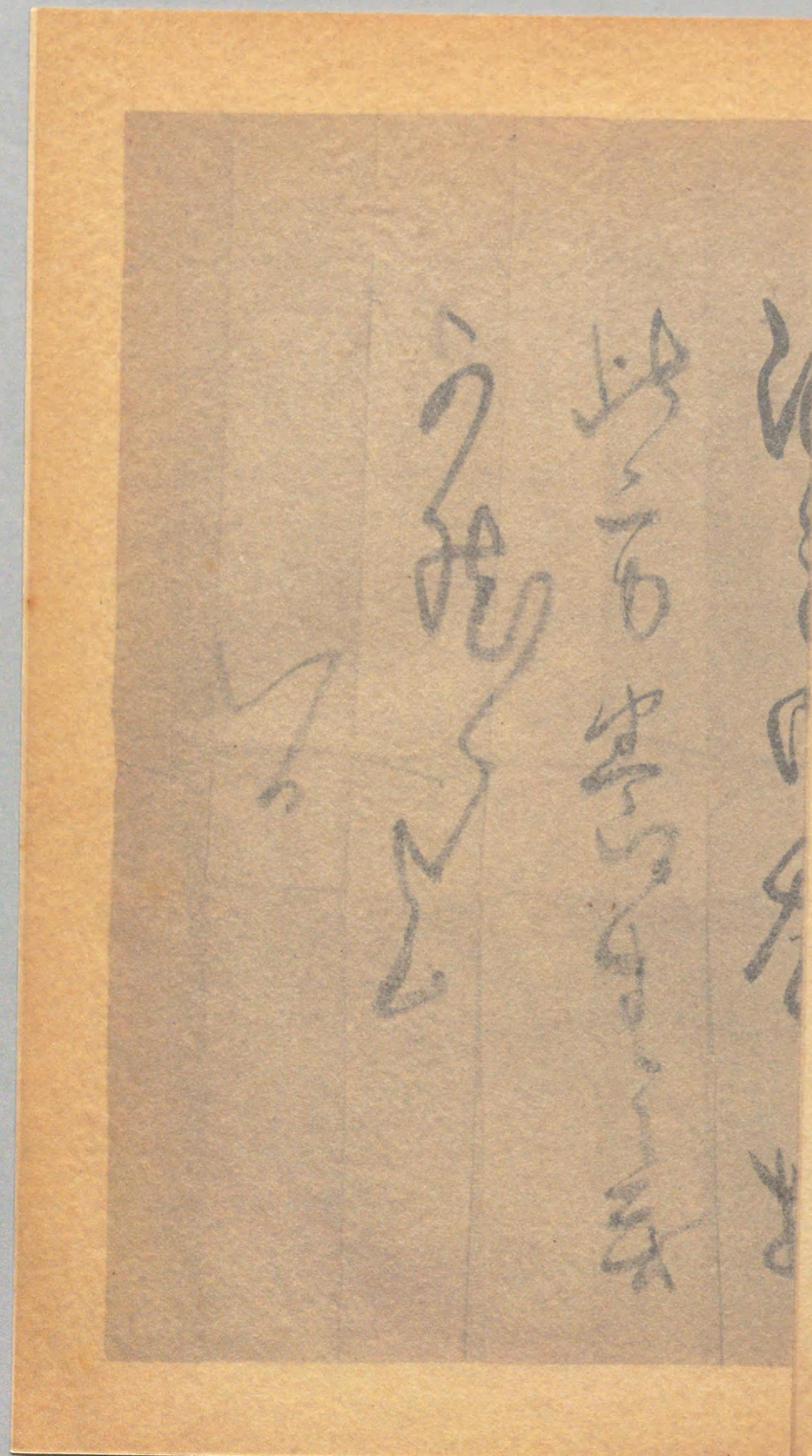
（慶長十四年十二月）同九日、是ヨリ前直江安房守勝吉使ヲ遣シ、義弟景明ノ婚ヲ賀ス、是ノ日、兼續答書シ、且ツ明年正月、駿河ニ詣ラントスルヿヲ報ス、（直江山城守書留）

勝吉景明ノ婚姻ヲ賀ス

祝儀ニ付而預脚力、令滿足候、先日如申入候、今月[illegible]二日祝儀相調候、佐州様御夫婦御取持之儀ニ候條、公界内儀共ニ無殘所候條、可心安候、然者其元侍中ヨリ祝儀候共、造作無之様被相計尤候、自分之者共祝儀五三人之間申付候、其外ハ不入義ニ候條、堅無用之由可被仰付候、平林所へも右之由

婚姻ハ本多正信夫婦ノ取持

元和五年十二月十九日



直江重光兼續書狀　伯爵上杉憲章氏所藏

原寸　縱〇・三一〇　横〇・四四九

元和五年十二月十九日

申遣候、自分之者共爲祝儀、或ハ自身之者共、重而此方ゟ左右次第可被差越候、其内春日與十郎義者、年内越候得由申付候條、右之分たるへく候、先日佐劔様御意候ハ、正月二日ニ此方相立、駿河へ可參由御理ニ候、其用意申事候、猶重而可申候、謹言、

十二月九日　　山城守
安房守殿　　重光(花押)

景明ノ大坂出陣

曲直瀬道三秀忠ノ命ヲ受ケ

〔上杉家文書〕

其許大坂立之由御觸付而、此方御人數も被召寄候條、只今用意專候、自分早々相上申度候へ共、御留守中之御仕置彼是申付、少遲々可申候、其内相換義候者、可被申越候、恐々謹言、

(慶長十九年)
十月九日　　山城守
平八殿參　　重光(花押)

〔歴代古案〕五

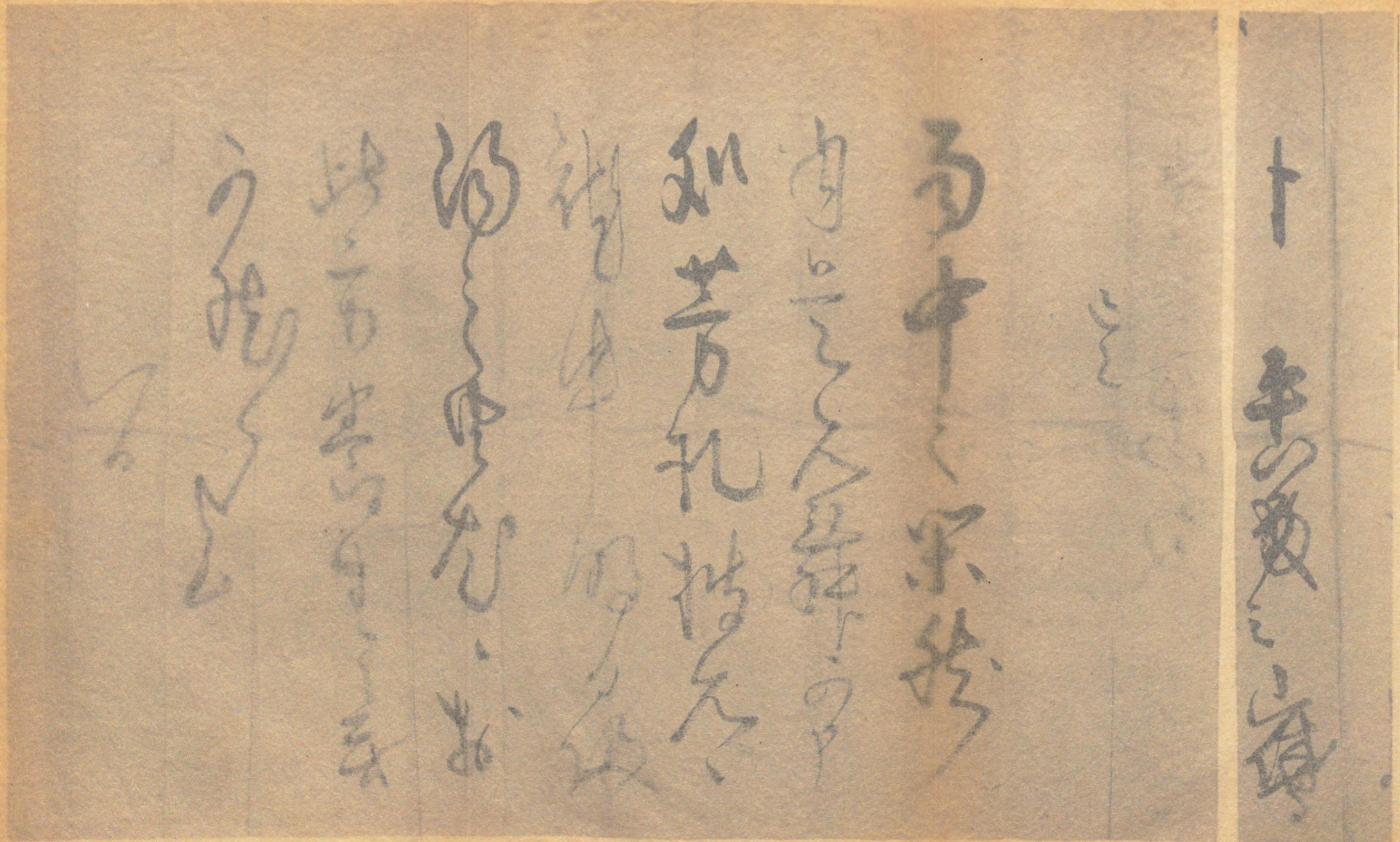
米澤にて狀認、

曲直瀨道三秀忠ノ命ヲ受ケ

米澤にて狀認、

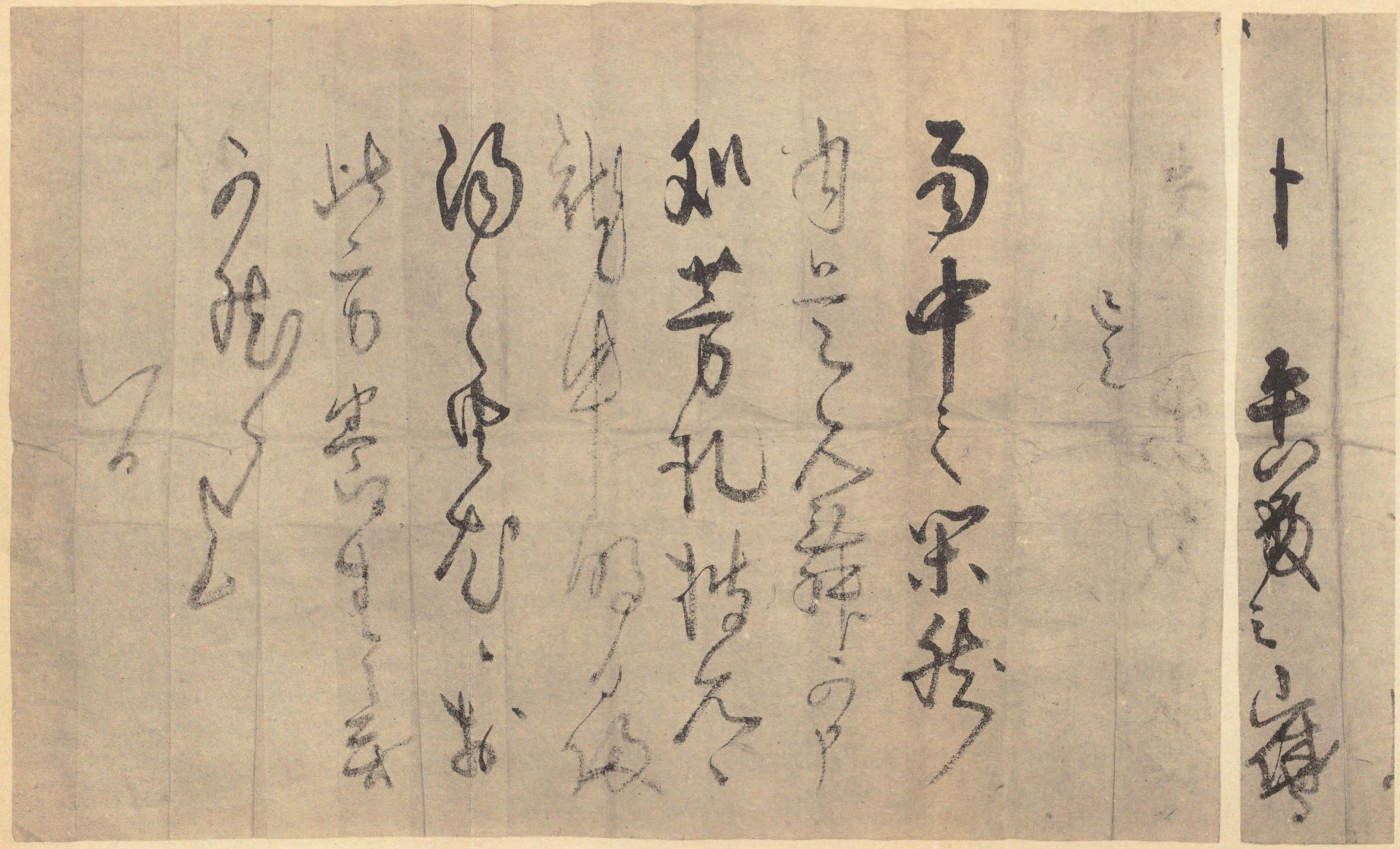
直江重光兼續書狀　伯爵上杉憲章氏所藏

原寸　縱〇・三一　橫〇・四九



直江重光兼續書狀　伯爵上杉憲章氏所藏

原寸　縱〇・三一〇　橫〇・四四九



テ景明ノ病ヲ治療ス

態啓上、仍（七月十二日死去、平八煩と付而、道（曲直瀬）三法印被加上意、療治被仰付候由、誠貴殿様御取成難申盡奉存候、景勝も被承、過分至極之段被申入候、乍恐可然様御取成候て、可被下候由、得御意候、恐惶謹言、

（元和元年）七月二日　　直江山城守

土井大炊様

酒井雅樂頭（忠世）様

安藤對馬守（重信）様

各札

景明死ス

〔上杉年譜〕四十九　景勝二十九　同（元和元年）年秋七月二日、直江山城守男平八景明疾病ニ罹リ、諸醫手ヲ束ヌ、此事已ニ台聽ニ達シ、道三法印ニ命シ、病ヲ療セシム、千坂伊豆守ヨリ羽檄ヲ以テ言上ス、公モ鈞命ノ辱ヲ謝シ玉フ、直江山城守モ土井大炊頭、酒井雅樂頭、安藤對馬守マテ謝詞ヲ奉示ス、其書云、〇書狀略ス、上ノ歴代古案ニ同ジ、但署名ヲ直江山城守兼續ニ作ル、

同月十二日、直江平八沈痾日ニ篤ク、針藥其驗ナク、今日泉下ニ歸ス、享齡十八歳、千坂方ヨリ羽檄ヲ飛シ、米府ニ言上ス、公聞ニ達シ、御感懷少カラス、則上使ヲ以テ、香奠銀子十枚、此ヲ下サル、山城守、上意ノ淺カラサル事ヲ感拜

元和五年十二月十九日

シ奉ル、

〔上杉編年文書〕三十三

直江系

平八景明

慶長三年生、元和元年七月十二日卒、年十八、

江照院殿

月岑秋清大禪定門　直江平八殿　東源寺早朝諷經

月岑秋清大禪定門　東源寺牌名

捐館月心清秋禪定門　神儀　林泉寺藏　招靈棚牌名

按ニ、招靈棚牌名最モ的確ナリ、取ルヘシ、

〔瑜祇塔念誦次第〕○伊紀　廻向文

七月十二日示寂、

月岑清秋大禪定門

直江山城守子息平八郎

〔上杉家記〕三十六景勝公十二　同（元和元年七月）十二日、直江平八景明江戸邸ニ沒ス、年十八、月心秋清禪定門ト法諡ス、將軍秀忠、香奠銀十枚ヲ賜フ、（景勝公御年譜、東源寺牌名、招靈棚法名、直江系圖、大政祕鑑、）

按ニ、國乘、元和二年七月十二日景明卒シ、年二十二ト記ス、東源寺牌名、招靈棚法名、其年月日ヲ記セス、姑ク系圖等ニ據ル、

養子長房

〔上杉年譜〕六十四定勝十四　同（寶永十四年正月）二十四日、本庄出羽重長ヨリ、同姓如雲長房加勽ヨリ歸參命許ニ依テ、飛札ヲ以テ謝シ奉ル、今日同左兵衞信重、如雲嫡子、太刀馬代獻呈、同市兵衞繁儀、同男、次五明一箱獻呈、各拜謁ス、抑此本庄如雲長房ハ、本庄越前守繁長カ三男ニテ、文祿二年、直江山城守兼續養子ニ命有リ、直江與次郎ト改號ス、其後離緣、本氏ニ立歸リ、本庄主馬ト稱シ、慶長年中、鮎川主計秀定ト同ク、加州ヘ相越ス、公ヨリ長房飯參之事ヲ催促有ト雖モ、利光許容ナシ、此ニ依テ寛永十四年、長房加州ヲ不時ニ立除キ、江戸品川ヘ落付、剃髮シ、如雲ト稱シ、出仕俸祿ノ望是ナキ趣、起請文ヲ以テ、加州ヘ告達ス、寛永十五年正月中、福嶋飯坂之地ヘ相越ス、公ヨリ月俸トシテ、百人扶持ヲ賜ハル、同十七年、米澤小國之地ヘ移ルヘキ命有テ、新營ヲ命シ引移ル、相續テ小國ノ役舍トス、本庄左兵衞信重ハ、後鮎川掃部ト號ス、同主馬長房カ嫡男ニテ、父如雲ト

離緣

共ニ小國之地ニ居住、寛永十六年六月廿五日、新知五百石ヲ賜リ、本庄出羽重長組ニ召入ラル、

養子勝吉

〔上杉年譜〕四十四 景勝二十四　同月（慶長九年閏八月）中旬、本多佐渡（正信）守次男左平次、故有テ浪客トナリ、米府ニ來ル、即公聞ニ達スル所ニ、町屋ニ留置、馳走コレアリ、疎略仕マシキ旨、内々公命アリ、爰ニ直江山城守繼嗣ナキニ付テ、娘ニ取合セ、後日名跡ニ仕度旨御内意ヲ伺ヒシカハ、公モ尤ニ思シ召サレ、則左平次ヲ養子ニ定メ、名ヲ改メ、公ヨリ御字ヲ下サレ、直江大和守勝吉ト號シテ、御目見有テ、采地一万石賜ヒ、奉仕ス、後日ニ、佐渡守ヘモ、右ノ旨趣ヲ山城守ヨリ委曲ニ達シケレハ、佐渡守甚喜悦シテ、尤恩愛ノ道ナレハ、大和守モ義ヲ重シ、孝ヲ專トス、山城守ト相共ニ出勤ス、佐渡守ハ秀忠ノ元老ナレハ、是ヨリシテ公私ノ諸用自由ヲ得タリ、

大和守ト稱ス
一萬石ヲ領ス

重光ノ起請文案

〔上杉家文書〕

（句紙）
直江山城、本多安房（勝吉）守契約以後、直江大和守ニ任ス、時ニ山城、大和守所ニ起請文之案書二ツ」

きゑやう文

一さどさゑ御りいもうをわもれ、貴所とおやこのけいや（く脱カ）をちりへ、ふさゝ申ゑき心中無之事、

一五りてう申入候こゝろもちのやう、おゝ事につき候てもこゝろをのこし、他人のゑゝてこれおく候事、右いつゑり申とおいてい、にんやんこく大小のちんき、八まんたいやさゆ、あゝこ、むく山の御むゆをかうむゑ、こくひやくのやまいをうくゑき者也、仍如件、

十月十二日　　大和守殿參　　山城守

覺

一家中大躰之事、一内々立入様子之事、一郡中仕置之事、一家中指引之事、一竹松身上之事、以上、

誓約ノ五箇條

二箇條ノ誓詞

きゑやう文

右いゑゆい、さいせん二りてうせいしのところいもちろん、いらいまても、御家中をとりたて、御家中のつゑむしらともおるへきもの、貴所をむなし候てい、一人もこゝろあてこれおく候、もとより身のためこい云ぬるとも、

元和五年十二月十九日

一心合體ノ覺悟

いくるとも、貴所と一ッこゝろこさへ候ハヽ、おホのおもひもあるまし
ものをとの心中ニ候、たゝ貴所わろく御入候まゝ、御ふんをりもかゝり候
ハんりとのあんし事までニ候、このむうニあしく去おしそむけ候ハんと
のりくこゆめ〳〵これあく候事、
右いつゝり申ニおゐてハ、

山城守
重光

十月十六日
大和守殿参

重光大國實賴ノ女ヲ養ヲ勝吉ニ配セントス

〔上杉家記〕三十四景勝公十　同十（慶長十四年八月）二日、是ヨリ前直江兼續、弟大國實賴ノ女ヲ養
フテ、義子安房守勝吉ニ配セントス、是ノ日、書ヲ本多大隅守（忠縁）、〇正信ノ三男、岡八郎
右衛門及ヒ本多正信ノ妻ニ送リ、其意ヲ問フ、皆ナ之ヲ賛ス、直江山城守書留探史月表、
按ニ、一書、勝吉妻死シ、繼室ニ大國實賴ノ女ヲ以テスト云フ、是ニ非ス、

〔上杉年譜〕四十六景勝二十六　同（慶長十四年）秋九月、兼テ公命有テ、直江山城守姪大國但（直頼）
馬守娘、同安房守（勝吉）〇勝吉、安房守ト改稱セル年月詳ナラズ、ニ嫁セシム、本多佐渡守差圖ニヨリ、
山城守カ養女トシテ、江戸ヨリ米府ニ赴カシメテ、婚禮ヲ調フ、佐渡守ヨリ、

勝吉安房守ト改稱ス

重光勝吉ノ緣邊ニツキ本多忠純ニ謀ル

重光ノ養女米澤下向ニツキテノ注意

忍ビノ下向

途中衛護ノタメ、殊ニ安房守タメ故、家臣岡八郎右衛門、原七兵衛ト云者ヲ
シテ、米澤マテ送與セシム、

〔上杉編年文書〕三十二
一書啓達、仍安房守緣邊之儀、重而分別相替ニ付而、以使者爲申登候、其許有
御相談、可然樣奉賴候、猶使者可得御意候、恐惶謹言、
（朱書）慶長十四　八月十二日　直山城守
本大隅樣　人々御中

書狀披見、仍安房守女共早々可指下由、佐州樣御物語候哉、卽爲迎青柳幷
大國者共爲上候條、道中之儀、念を入可差下候事、
一岡八郎右殿、原七兵衛兩人被差添候由、實儀ニ候哉、大躰ニ候者、道中見苦
敷躰、中々安房守外聞を失候仕合迷惑候條、何者共不見樣ニ、青柳召連罷
下候樣ニ仕度候、右兩人之衆被差副候へハ、安房守女共、又我等之骨肉隱
有間敷候、誠をめんぬのこの躰、荷くら馬の仕合ニて、五人三人之躰、諸人
之得意迷惑候條、忍而下申度候、此樣子安房守ニ相談、合點候而、かゝゐへ

ふゝ越候條、兩人も我等内證之樣子、八郎右殿へらゝり候て、かゝく無用こいゝし尤候、我等之骨肉、安房守女共与見へ候て下候者、せめて乘物之五丁も三丁も、乘りけ成共貳十も三十も候てこそ可然候こ、中々申も無面目、見苦敷候てゝ、如何共罷成間敷候、其元見苦敷躰、ありやうこかゝり可申事、

道中傳馬ノ辭退

一道中傳馬かゝ被下候共、堅無用こ可致之候、自分之造作を以、おにとおく差下、尤こ候事、

道中ノ賄

一道中賄之儀、其元こ有之、番替之者共之内、見計申付可差下候、勿論道中之供、上下をもさせ候ゝんゝゝめ、逗留させ候條、其分相心得、尤こ候事、

一蠟燭佐州樣へ持參、御機(氣)こ入候由、令滿足候、併五分程おりく可致由相心得候事、

一日浦手前こ有之蠟燭注文不著之事、

一作事方々出來候由、尤候、玄蕃(飯津利忠)殿間之かゝら倉、はよゝの用所こ、二階こ成候由、とてもの事こ板を敷尤こ候事、

作事ノ進行

一簾中普請存之外相持候由、氣(気)特候事、

一石切此方ゟ遣候者下手こ付而、其元こ而請切こ申付候由、尤こ候事、

一くれノ祝義、岡八殿、内證次第其支度尤候事、

一先日定器之繪ノ事、平林所ゟ申越候、いまゝゝ返答無之候、急便こ樣子可申越候事、

一重陽之御服をそく下候て迷惑由、無心元候、併無油斷申付、駿州も可相立由、滿足申事こ候、以上、

(朱書)「慶長十四」九月六日

千坂伊豆守殿　直江

澁谷彌兵衛殿(古案ニテ校ス、本文書歴代○)

勝吉婚姻ノ準備

一書申遣候、仍安房守祝義こ付而、岡八郎右殿、原七兵下著故、時宜相濟候條、可心安候、俄之義与云、又不知案内と云、不調法、中々對兩人失面目候へ共、不及是非、先以隙明候事、

一其元作事、無人故出來兼候由、成次第可申付候、其元祝義ノ事ゝ、此方之調次第と、八郎右殿も被申候條、其心得尤候事、

元和五年十二月十九日

一客人こき十人前、ほさもまきゑと内々用意候へ共、先度書面之分ゑ、まきゑこても朱こてもと候條、一向こ朱こ申付候、其上まきゑ道具萬之物、不相調候て、成（々）あさきつをい（こ）りり申付候而も、其外之道具見苦敷候へい、中々おきこいをとり候、小笠原殿ノ差圖こて、朱こいさし候と可有之事、

合器ほた
蒔繪道具
小笠原流ヲ用フ

一兩人之衆、一兩日中可爲歸洛候、此中祝義こ取紛、用所共相つりへ候條、兩人さて申候而、用所等相調、來月半時分此方可立候、其内用所之儀候者、早々可申下候事、以上、

（朱書）慶長十四
九月晦日　直江

伊豆守殿

〔上杉家記〕

澁谷殿（三十四景勝公十）○歷代古案同ジ、

吉ノ弟本多忠純ニ送ル、曰、（慶長十四年）十月二日、直江兼續、謝書ヲ安房守勝吉ノ母及ヒ勝御狀拜見、仍安房守祝儀こ付而、原七兵衞方被差下候故、時宜相濟候、御念之通難申盡、令存候、巨細七兵衞方可被申宣候、恐惶謹言、

直江山城守書留、本多家譜、

重光書ヲ本多正信ノ室及ビ本多忠純ニ寄セテ勝吉ノ婚姻ヲ謝ス

拾月二日　山しろのかミ

本大（本多忠純）隅様　人々御中

一ふて申あきらし、あむのりみ玄うきまつけて、八郎へをんとの御くさし候ゆへ、おやしめしのをくすを候て、さゑめて御まんそくおほしめさるへく候、おそをおらしおおし事こそんしさてまつり候、くをしをいい八郎へもんより、御物かさり候て御さ候いんまゝ、申のこし候よし、御申たのみ入候、めて度しもし、

（正信室）あいちや　御申給へ

同十三日、是ヨリ前、直江勝吉ノ邸火ヲ失ス、（日子未詳）蒲生氏ノ老岡半（重政）兵衞、町野左近等、書ヲ兼續ニ送リ、之ヲ弔ス、兼續之ニ答書ス、曰、（直江山城守書留）

御狀拜見、仍安房守火事無御心元被思召候由、被入御念、御飛脚、別而忝奉存候、萬可然樣御取成奉賴候由得御意候、恐惶謹言、

勝吉ノ第火ヲ失ス

十月十三日　岡半兵樣

元和五年十二月十九日

町右近様（左カ）　御報

〔直江重光（兼續）書翰留〕

態申入候、其元無違義候哉、無心許候、依無異儀久敷無音候、自然用所之儀候者、如申置候、平林相談尤ニ候、然者安房守女共登候儀ニ付而、佐州様のりゑさゑか切々如此被仰越候、其元様子あり安房守指圖不存候條、我等女共之御馳走ニ難被成候、再三御返事申候へとも、不打置、か様ニ被仰候、一往公方迄不申屆候へと、如何之條、御文差下候、有披見、返札待入候、猶重而可申候、恐々謹言、

二月十六日（慶長十七年）

戸田攝津守殿〇政重ノ家老、

一書申遣候、仍加州か安房守女共爲迎、河井右兵衞此方へ下候、口上書札之趣卽書付越候條、可被申付候事、

一乘物うき、挾箱ゑと爲持候者廿四五人、奉行一人、但うちの者申付、越中迄送くれ候へ由賴候條、是分可被申付候、足輕之内鑓之者を可被申付候事、

勝吉室直江氏出發ニツキ本室信ノ多正注意

直江氏加賀ニツキ赴ク重光ノ注意

供連

傳馬人足

其外ハ壹人も入間敷候、其元より何ゝと申候共、被聞入間敷候事、

一越後境目迄傳馬人足、是又被賴候條、可被申付候事、

一攝津守（戸田）ゝしめ、何も太儀之由其方相心得可被申候、其元ニ不有合故、不及馳走候、恐々謹言、

卯月廿四日（慶長十七年）

平林藏人殿　參

内々自是可申越處、書札披見、令祝著候、然者安房守女共爲迎、河井右兵衞此地迄下著候、越中迄送候足輕之儀、彼此安房守被申越候通、平林所へ申遣候、定而不可有違義候、將亦近年不思儀之仕合を以、家中ニ逗留候處、彼此遠慮在之而、疎略之致過、失面目候、去年以來猶以疎想之至、口惜候、安房守方へも無音、所存之外候、内々使者成共遣度候へ共、家中ニ被居候間、疎想候て、他國へ被越、輕薄ゐる馳走ゝてゐとゝ、於世上取沙汰可在之事無面目儘、乍存疎意之躰候、此等之段、次之時分被爲心得賴入候、自然相應之用所等候者、可被申越候、恐々謹言、

元和五年十二月十九日

（慶長十七年）卯月廿七日　戸田攝津守殿

直江氏住宅ノ破却

書狀披見、
一安房守女共之爲迎、河井右兵衞此方へ下候、送之者傳馬以下之儀書付、右兵衞へ差越候、無違義相調、早々可被送立候事、
一安房守女共居候家、早々こわし可被置候、其外ゟも不入家共在之者、皆々壞、ゟら屋敷ゟて、番おしこ可被差置候事、
一御下向之沙汰、未無之候、定而端午御禮以後御暇可罷出由令校量候、自然御下向於遲々者、我等可罷上之事、
一御堂御作事鉢伏次第可被申付候、先度被仰越候くゝ物之儀ハ、御内神之事ゟて候、大材木著候て、惣やう番匠てゐ之不入内こと、御内分こ候、其分可被相心得候、山ゟ出候材木之つもりハ、五月六月こりゝ可罷出由、兼々申上候、左樣之儀ゟてハ無之候事、
以上

直江氏ノ出發

（慶長十七年）卯月卅日　平林藏人殿

○上略
一安房守女共、無違義、去月十七日こ被送立候由、可然候、最前如申越候、安房守扶持方放候者、其外其元こ徘徊無之樣こ、堅可被申付候、自然加州ゟ安房守爲用所罷下候者之儀者、相應之馳走、用所次第可被申付候、むさと徒者隱居候て、徒夏申出候へハ無詮候條、如此申遣候、以上、

（慶長十七年）六月二日　平林藏人殿參

○直江氏、初直江信綱ニ配シ、信綱ノ死後、重光ニ配スルコト、天正九年九月朔日ノ條ニ、勝吉、重光ノ女ニ配シ、尋デ、直江氏ヲ去リ、本姓本多氏ニ復シ、政重ト改メ、前田利光ニ仕フルコト、慶長十六年七月十七日ノ條（第十二編ノ十一所收補遺）ニ見ユ、

二十一日、庚午、御髮上、

〔孝亮宿禰日次記〕五　十二月廿一日、庚午、晴、禁裏御髪上、辰刻忠利參仕、衞士相從之、吉方申酉間云々、

是ヨリ先、幕府、京都法觀寺ニ、建仁、清水兩寺寺領ノ内ヲ、塔屋敷トシテ寄附ス、是日、兩寺ニ替地ヲ給ス、

〔法觀雜記〕○城山

當寺領御朱印内參石七斗貳升四合所、今度八坂寶(法)觀寺爲塔屋敷、致寄附訖、爲其替地、東鹽小路村開之内ヲ以、右之高石相渡置候、全可有御寺納者也、仍而執達如件、

元和五年　極月廿一日　伊賀守(板倉勝重)(朱書)「判」　(朱書)「本帯在常住」

建仁寺

〔成就院文書〕○城山

當寺領御朱印内壹石六斗三升四合所、今度八坂寶(法)觀寺爲塔屋敷、被寄附訖、爲其替地、東鹽小路村開之内を以、右之高石相渡置候、全可有寺納者也、仍執達如件、

元和五年　極月廿一日　伊賀守(花押)

清水寺本願

〔參考〕

〔法觀雜記〕○城山

已上

一筆申入候、八坂塔再興ニ付、壹重之瓦代銀拾枚進之候、委細並河九太夫申含候間、不具候、恐々謹言、

(朱書下同ジ)「竪文」

(卓朱印)六月十三日　勝重判

(朱書)「ウラニ」板倉伊賀守　勝重

八坂ノ塔再興ニ板倉勝重瓦代銀ヲ寄附ス

〔京都府寺志稿〕四十九　法觀寺

(朱書)「ヲモテニ」靈洞院侍者御中

本尊五智如來　釋迦　大日　寶性　阿閦　彌陀

一五重寶塔今本堂ト稱ス、